

○陸軍恩給令 明治十六年九月  
第三拾七號達

官省院廳府縣

陸軍恩給令別冊ノ通改正候條此旨相達候事  
但陸軍罷役俸並恤金令ハ廢止ス

(別冊)

陸軍恩給令

陸軍恩給令目錄

- 第一章 總則
- 第二章 恩給及增加
- 第三章 寡婦(孤兒)扶助料
- 第四章 服役年算則
- 第五章 從軍年算則
- 第六章 恩給支給順序
- 第七章 賑恤金
- 第八章 給助金
- 陸軍恩給令
- 第一章 總則

第一條 陸軍恩給ハ陸軍諸種ノ勤勞ニ依リテ之ヲ給スル者ナリ其種類別テ

左ノ五項トス

- 一 退職恩給
- 二 免除恩給
- 三 寡婦(孤兒)扶助料
- 四 賑恤金
- 五 扶助金

第二條 退職恩給免除恩給寡婦扶助料ハ本人ノ終身孤兒扶助料ハ男女共ニ  
二十歳ニ至ル迄之ヲ給シ賑恤金扶助金ハ一時限リ之ヲ給ス

第三條 軍人ハ年限ノ年齡ニ達スレハ現役ヲ辭シテ恩給ヲ受ルヲ例トス其  
年限左ノ如シ(明治十七年第三十七號達ヲ以テ本條中(會計卒看病卒)ニ  
生)ノ八守ヲ刪リ(憲兵卒)ノ下(雜卒諸工)ノ四字ヲ加フ)

會計監督	軍醫監	藥劑監	六十		
憲兵大中佐	會計副監督	軍醫正	藥劑正	馬醫監	五十七
步騎砲工輜重兵大中佐	憲兵少佐	會計監督補	會計一	五十四	
等軍吏	一等軍醫	一等劑官	一等馬醫	五十一	
步騎砲工輜重兵少佐	憲兵大尉	會計二等軍吏	二等軍	五十一	
醫	二等劑官	二等馬醫	砲工兵上等監護		
步騎砲工輜重兵大尉	憲兵中少尉	會計三等軍吏	二等		

第七條

軍醫 三等刺官 二等馬醫 軍樂長 砲工兵監護 砲兵 四十八  
 監守 砲兵監査 諸工長 諸工下長  
 歩騎砲工輜重兵中少尉 憲兵下士 會計書記 看護長 四十五  
 馬醫生 軍樂次長 軍樂手  
 歩騎砲工輜重兵下士 憲兵卒 雜卒 諸工 四十  
 歩騎砲工輜重兵卒 三十五  
 第四條 軍人定限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特抜  
 又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命ズルコトヲ得但強テ現  
 役ヲ辭スル者ハ此限ニアラス  
 第五條 上長官士官准士官未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年  
 以上ノ者ニシテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ士官以上ハ陸軍卿准士官  
 ハ其所管長官旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ  
 第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノ  
 ミ之ヲ停ム  
 一 公權停止ノ時  
 二 事故アリテ日本人タル分限ヲ失フ時  
 三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出テタル時  
 第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受ケル

(明治十八年一月十日陸軍省伺同  
 年五月十日大政官指令)  
 令第七條ニ掲クル  
 文官トハ准官吏以  
 上ノ者ヲ云フ

時ハ其間該恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス  
 第八條 寡婦(孤兒)扶助料ハ當該軍人死歿ノ日 戰地等ニテ死歿ノ者ハヨリ一箇  
 年間願出サル者ハ其權利消絶ス 陸軍官憲ヨリ報告ノ日  
 恩給及ヒ扶助料ハ一箇年以上其金額ノ受領ヲ怠ル時ハ其怠リタル年間ノ  
 金額ハ之ヲ給セス  
 第九條 恩給及扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メテ金  
 圓ヲ受領セシヨリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ陸軍卿ニ上申ス可シ  
 若シ此期限ヲ過クル時ハ之ヲ受理セス  
 第二章 恩給及ヒ増加  
 第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達  
 シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ査問會議ノ處決若クハ陸軍卿ノ諭旨  
 ニ依リ退職スルモノニ之ヲ給ス (明治十八年第四號達ヲ以テ本條一項中(疾病)ノ上ニ  
 下ニ(若クハ疾病)ノ五字ヲ追加ス) (傷痍ヲ受ケ若クハ)ノ八字ヲ追加シ二項中(傷痍)ノ  
 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メニ傷痍若クハ疾病ヲ受ケ一肢以  
 上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認トムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ  
 罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ非健ノ勞  
 動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ従事シ爲メニ健康ヲ妨害シ全ク職務ニ堪ヘザル  
 ニ至リ其証據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ

給ス

其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至ル年々等差アルコト甲號表面ノ如シ但十一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ノ等シキ額ニ依ル

第十一條 免除恩給ハ下士及ヒ卒服役實期十一年以上ニシテ年限ノ年齢ニ達シ或ハ服役滿期トナリ或ハ傷痍若クハ疾病ノ爲メ免官若クハ免役スル者ニ之ヲ給ス(明治十八年第四號達ヲ以テ(疾病)ノ(傷痍若クハ)ノ五字ヲ追加ス)

前條第二項ニ掲クルカ如ク傷痍疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其証據明亮ニシテ免官若クハ免役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖ヒ亦之ヲ給ス

其免除恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々等差アルコト乙號表面ノ如シ但十一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十二條 准士官以上傷痍ヲ受クルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職スル者ハ現官等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス

第十三條 傷痍疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候トモ詳細之ヲ開陳ス可シ

第十四條 傷痍疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見證證書又ハ公文若クハ査問會議口供書ノ寫ヲ以テ之ヲ證明ス可シ

第十五條 傷痍疾病不治ノ狀ハ陸軍病院長及ヒ主任醫官(地方病院ニ於テ治療ヲ受ケシ者ハ其院長并ニ主任醫師)ノ診斷證書ヲ以テ之ヲ證ス可シ其診斷證書ハ傷痍疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治ノ狀ヲ詳悉ス可シ

病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖ヒ陸軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷書ヲ要ス

第十六條 傷痍疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ證書ニ依ルト雖ヒ其軍務ニ堪ヘサルヤ否ヤハ當該所管ニ於テ檢査判定シ尙ホ檢閱監軍部長ノ審査ヲ經テ之ヲ陸軍卿ニ移ス可シ陸軍卿ハ更ニ軍醫本部ニ下シテ覆數セシメ以テ之ヲ決定ス(明治十七年第三十七號達ヲ以テ(監軍)ノ(部長)ノ上(檢閱)ノ二字ヲ追加ス)

第十七條 恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但下士以上其官階ニ進ミ未ダ進級條例ノ停年最下限ノ半ニ至ラスシテ退職免官ヲ願フ時ハ前官ニ準シテ之ヲ給ス其戰闘若クハ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ或ハ戰地ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス

第十八條 准士官以上退職恩給ヲ願フ時所管長官ハ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ休暇ヲ命ス下士卒免除恩給ヲ願フ時亦該長官同上ノ日ニ於テ直ニ免官若クハ免役ス可シ

第十九條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ左ノ各項ニ

該ル者ハ恩給ノ外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ  
遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

- 一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者
- 二 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者
- 三 一肢ヲ盲シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者
- 四 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者
- 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者
- 六 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者

第二十條 傷痕疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ル現役ヲ離レ  
シ後重症ニ趨キタル者左項ノ期限内ニ願出ル時ハ検査ノ上事實相違ナキ  
ニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フ  
ハ現役ヲ離ルノ際其傷痕ノ爲メ服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル

- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レシ日ヨ  
リ貳個年
- 一 二肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者  
ハ現役ヲ離レシ日ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十一條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人

ノ官階ト死没ノ緣故トニ依リテ等アリ

- 一 戰闘或ハ公務ノ爲メ死没シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痕ニ原因シテ  
死没シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受ケ  
ルヲ願ミルコト能ハシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲  
メニ發病死没シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シ  
死没シタル軍人ノ寡婦
- 二 退職若クハ免除恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死没  
シタル軍人ノ寡婦

其扶助料ノ額第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表  
面ニ依ル

第二十二條 戰闘及ヒ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケタル雖ヒ其傷痕ニ原因セサル  
他病ニテ死没シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十三條 戰闘中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシニ相違ナキヲ確認  
スル時ハ第二十一條第一項ヲ適用ス

第二十四條 寡婦ハ陸軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨ  
リ一ヶ年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生シタル  
兒子アレハ嫁時年月ノ查數ヲ要セス又戰死若クハ傷痕疾病ニ原因シテ死  
シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セス負傷又ハ發病前ニ婚配セル者ニ

限ル

第二十五條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受クルノ權消絶ス

第二十六條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該軍人ノ孤兒(嫡子庶子養子ヲ論セス戸籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ男女ニ拘ハラヌ家名ヲ繼襲スル者ニ限ル)ニシテ其家名繼襲ノ者ニハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者ニハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤子ノ母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十七條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少者ニ及フ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戸籍ヲ去リ或ハ男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權利消絶ス

第二十八條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラレ、時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ク可キ者ニ之ヲ給ス

第二十九條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ終身給スルコトアル可シ  
其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若ク

ハ權利消絶スルコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齡五十歳以上其未滿ハ癡疾又ハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ且孰レモ軍人死歿ノ際年齡五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在ル者ニ限ル

第三十條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見人アレハ其後見人若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戸主二名連署シ其郡區長戸長ノ奥印セル願書ヲ以テ之ヲ地方廳ニ呈ス可シ

其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ者ハ見證々書若クハ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷痍疾病ニ基ク者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷證書ヲ證據ニ供ス可シ但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書ヲ添附シ死歿ノ原因ヲ証明ス可シ  
第四章 服役年算則

第三十一條 服役年ノ始期及ヒ終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ルヘシ  
明治四年八月ヲ以テ始期トス故ニ其以前ヨリ勤仕ノ者ト雖モ總テ同月ヲ以テ始トス

但明治四年八月以前ヨリ勤仕シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額

(第三十三條) 文官奉仕中ノ年月日ハ總テ十六箇月ヲ以テ一箇年トスノ比例ニ依リ通算シ一日未滿ノ分數ハ除算スヘシ又巡

- チ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス
- 二下士以上ハ其初任當日ヨリ起算ス
- 三徵兵ハ入營初日即チ毎年四月二十日ヨリ起算ス
- 四壯兵其他諸種ノ方法ヲ以テ軍籍ニ入りタル者ハ其就役ノ當日ヨリ起算ス
- 五上長官士官准士官ハ退職恩給ノ願ハ該長官ヨリ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ヲ以テ終期トス
- 六下士卒ハ免官免役ノ日ヲ以テ終期トス
- 第三十二條 十七歳未滿ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス
- 士官以上待命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ従事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル時間ハ之ヲ除算ス
- 第三十三條 海軍々人轉シテ陸軍々人トナル者ハ海軍服務ノ年月ヲ通算ス又文官轉シテ陸軍々人トナリタル者並ニ陸軍々人ノ現役ニ在ラスシテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受クル者恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉任中ノ年月ハ十六箇月ヲ以テ一年トシ之ヲ通算ス
- 第三十四條 豫備後備ニ在ルノ月日ハ服役實期ニ算セスト雖モ復習ノ外現役ニ徵集スルコトアル時ハ前後ノ現後ヲ通算ス

查等外吏ハ通算ノ限ニアラス(明治十八年十一月十八日福井縣伺同月十七日陸軍省指令)

- 第三十五條 退職免役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス
- 第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其歸營以後ノ現役ニ通算ス
- 第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス
- 第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス
- 第五章 從軍年算則
- 第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役實期十一年未滿ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セス
- 第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ
  - 一 日本國外ノ戰地ニ於テ服役スル時ハ二箇年ヲ増加ス
  - 二 出征軍ニ偏入セラレ或ハ合圍若クハ臨戰地境內ニ於テ服役セシ時又戰時平時ヲ論セス日本國外ノ地ニ於テ鎮戍ノ軍隊ニ在リシ時及ヒ海戰ニ當リ其船中ニ在リシ時ハ一箇年ヲ増加ス
  - 三 海戰ニ當リ海岸防禦ニ従事セシ時ハ半箇年ヲ増加ス
  - 第四十一條 出征軍ノ定メニアラスシテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ於テハ陸軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス
  - 第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ跨リ十二箇月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ

依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ檢閱監軍部長ヲ經テ陸軍卿ニ呈シ陸軍卿之ヲ太政官ニ上申ス

扶助料ノ願書ハ居住地ノ地方官ヨリ陸軍卿ニ呈シ陸軍卿之ヲ太政官ニ上申ス(明治十八年第六十四號達ヲ以テ改正)

第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ内務大藏陸軍三卿ニ下シ内務卿ヨリ管轄地方官ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ年々金圓受領ノ證ト爲サシム

恩給登錄寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ陸軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ以テ其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ免除恩給並ニ恩給料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル

一 准士官以上ハ計算書日附ノ翌日

二 下士卒ハ免官免役ノ翌日

三 寡婦(孤兒)扶助料ハ當該軍人死去ノ翌日

第四十六條 恩給及ヒ扶助料ハ一月四月七月十月ニ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上戸長ノ證セル本人生存書及ヒ金額受領證書ト引換ニ其金額ヲ

交付ス

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ期月ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ属スル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ収メテ内務省ニ出シ内務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省陸軍省ニ報告ス但扶助料移轉ス可キ者アル時ハ恩給登錄寫帖ヲ収メス更ニ扶助料請願ノ證ト爲サシム

第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ失亡スル時ハ速ニ其旨ヲ届出可シ此場合ニ於テハ内務卿ヨリ證明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

一 下士卒戰鬪或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ服役ニ堪ヘス免官除隊スト雖モ第十九條末項ヨリ輕症ニシテ免除恩給ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ前條ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル

ル金額ヲ給ス

三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニアラスシテ傷  
疾疾病ヲ受ケ全ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルニ至ル者及ヒ其五年未  
滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若シクハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應  
スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサ  
ル金額ヲ給ス

四 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ  
生活セル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癡疾ノ兄弟姉妹アリテ之  
救育スルノ親族ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラ  
ス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ陸軍卿之  
ヲ詮議シ太政官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳  
ヲ經テ之ヲ下付ス

第八章 給

第五十一條 恩給金 下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤續キノ後罷役  
或ハ免官トナリ恩給ヲ給ハラサル者ニ之ヲ給ス其金額ハ已號表面ニ依ル  
但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之  
ヲ給セス(明治十七年第三十七號達ヲ以テ本  
條中(若クハ扶助料)ノ六字ヲ刪ル)



甲號

退職恩給

年數	官等	一	二	三
十一年	千	五百圓	千二百圓	千五百十
十二年	千	五百二十五圓	千二百二十圓	千六百七圓五十
十三年	千	五百五十圓	千二百四十圓	千八百十五
十四年	千	五百七十五圓	千二百六十圓	千九百二十五
十五年	千	六百圓	千二百八十圓	千一百二十
十六年	千	六百二十五圓	千三百圓	千三百三十七圓五十
十七年	千	六百五十圓	千三百二十圓	千四百五十五
十八年	千	六百七十五圓	千三百四十圓	千五百七十二圓五十
十九年	千	七百圓	千三百六十圓	千六百九十
二十年	千	七百二十五圓	千三百八十圓	千七百七圓五十
二十一年	千	七百五十圓	千四百圓	千八百二十五
二十二年	千	七百七十五圓	千四百二十圓	千九百四十二圓五十
二十三年	千	八百圓	千四百四十圓	千一百六十
二十四年	千	八百二十五圓	千四百六十圓	千二百七十七圓五十
二十五年	千	八百五十圓	千四百八十圓	千三百九十五
二十六年	千	八百七十五圓	千五百圓	千五百十二圓五十
二十七年	千	九百圓	千五百二十圓	千六百三十
二十八年	千	九百二十五圓	千五百四十圓	千七百四十七圓五十
二十九年	千	九百五十圓	千五百六十圓	千八百六十五
三十年	千	九百七十五圓	千五百八十圓	千九百八十二圓五十
三十一年	千	一千圓	千六百圓	千一千四百
三十二年	千	一千二十五圓	千六百二十圓	千四百十七圓五十
三十三年	千	一千五十圓	千六百四十圓	千四百三十五
三十四年	千	一千七十五圓	千六百六十圓	千四百五十二圓五十
三十五年	千	二百圓	千六百八十圓	千四百七十
三十六年	千	二百二十五圓	千七百圓	千四百八十七圓五十
三十七年	千	二百五十圓	千七百二十圓	千五百五
三十八年	千	二百七十五圓	千七百四十圓	千五百二十二圓五十
三十九年	千	三百圓	千七百六十圓	千五百四十
四十年	千	三百二十五圓	千七百八十圓	千五百五十七圓五十

退職恩給表

等	三	四	五	六	七	八	九
二百四十圓	千六十七圓五十錢	七百六十二圓五十錢	六百二十圓	四百五十七圓五十錢	三百五圓	二百二十八圓七十五錢	百八十八
二百六十圓	千八十五圓	七百七十五圓	六百三十圓	四百六十五圓	三百十圓	二百三十二圓五十錢	百八十八
二百八十圓	千二百二十五圓	七百八十七圓五十錢	六百四十圓	四百七十二圓五十錢	三百十五圓	二百三十六圓二十五錢	百八十八
三百圓	千三百三十七圓五十錢	八百十二圓五十錢	六百五十四圓	四百八十七圓五十錢	三百二十五圓	二百四十三圓七十五錢	百九十九
三百二十圓	千五百五十五圓	八百二十五圓	六百六十圓	四百九十五圓	三百三十圓	二百四十七圓五十錢	百九十九
三百四十圓	千七百七十二圓五十錢	八百三十七圓五十錢	六百七十圓	五百二圓五十錢	三百三十五圓	二百五十一圓二十五錢	二百
三百六十圓	千九百九十圓	八百五十四圓	六百八十圓	五百十圓	三百四十圓	二百五十五圓	二百
三百八十圓	千二百七十四圓五十錢	八百六十二圓五十錢	六百九十圓	五百十七圓五十錢	三百四十五圓	二百五十八圓七十五錢	二百
四百圓	千二百二十五圓	八百七十五圓	七百圓	五百二十五圓	三百五十圓	二百六十二圓五十錢	二百
四百二十圓	千二百四十二圓五十錢	八百八十七圓五十錢	七百十圓	五百三十二圓五十錢	三百五十五圓	二百六十六圓二十五錢	二百
四百四十圓	千二百六十圓	九百圓	七百二十圓	五百四十四圓	三百六十圓	二百七十一圓	二百
四百六十圓	千二百七十七圓五十錢	九百十二圓五十錢	七百三十圓	五百四十七圓五十錢	三百六十五圓	二百七十三圓七十五錢	二百
四百八十圓	千二百九十五圓	九百二十五圓	七百四十圓	五百五十五圓	三百七十圓	二百七十七圓五十錢	二百
五百圓	千三百十二圓五十錢	九百三十七圓五十錢	七百五十圓	五百六十二圓五十錢	三百七十五圓	二百八十一圓二十五錢	二百
五百二十圓	千三百三十圓	九百五十圓	七百六十圓	五百七十圓	三百八十圓	二百八十五圓	二百
五百四十圓	千三百四十七圓五十錢	九百六十二圓五十錢	七百七十圓	五百七十七圓五十錢	三百八十五圓	二百八十八圓七十五錢	二百
五百六十圓	千三百六十五圓	九百七十五圓	七百八十圓	五百八十五圓	三百九十圓	二百九十二圓五十錢	二百
五百八十圓	千三百八十二圓五十錢	九百八十七圓五十錢	七百九十圓	五百九十二圓五十錢	三百九十五圓	二百九十六圓二十五錢	二百
六百圓	千四百圓	一千圓	八百圓	六百圓	四百圓	三百圓	二百
六百二十圓	千四百十七圓五十錢	千十二圓五十錢	八百十圓	六百七圓五十錢	四百五圓	三百三圓七十五錢	二百
六百四十圓	千四百三十五圓	千二十五圓	八百二十圓	六百十五圓	四百十圓	三百七圓五十錢	二百
六百六十圓	千四百五十二圓五十錢	千三十七圓五十錢	八百三十圓	六百二十二圓五十錢	四百十五圓	三百十一圓二十五錢	二百
六百八十圓	千四百七十圓	千五十五圓	八百四十圓	六百三十圓	四百二十圓	三百十五圓	二百
七百圓	千四百八十七圓五十錢	千六十二圓五十錢	八百五十圓	六百三十七圓五十錢	四百二十五圓	三百十八圓七十五錢	二百
七百二十圓	千五百五圓	千七十五圓	八百六十圓	六百四十五圓	四百三十圓	三百二十二圓五十錢	二百
七百四十圓	千五百二十二圓五十錢	千八十七圓五十錢	八百七十圓	六百五十二圓五十錢	四百三十五圓	三百二十六圓二十五錢	二百
七百六十圓	千五百四十圓	千九百圓	八百八十圓	六百六十圓	四百四十圓	三百三十圓	二百
七百八十圓	千五百五十七圓五十錢	千百十二圓五十錢	八百九十圓	六百六十七圓五十錢	四百四十五圓	三百三十三圓七十五錢	二百

五等	六等	七等	八等	九等	十等
六百百圓	四百五十圓	三百百圓	二百二十五圓	百八十圓	百五十圓
六百二十圓	四百六十五圓	三百十圓	二百三十二圓	百八十六圓	百五十五圓
六百三十圓	四百七十二圓	三百十五圓	二百三十六圓	百八十九圓	百五十七圓
六百四十圓	四百八十八圓	三百二十圓	二百四十四圓	百九十二圓	百六十六圓
六百五十圓	四百八十七圓	三百二十五圓	二百四十三圓	百九十五圓	百六十二圓
六百六十圓	四百九十五圓	三百三十圓	二百四十七圓	百九十八圓	百六十五圓
六百七十圓	五百二圓	三百三十五圓	二百五十一圓	百九十九圓	百六十七圓
六百八十圓	五百十圓	三百四十圓	二百五十五圓	百四圓	百七十七圓
六百九十圓	五百十七圓	三百四十五圓	二百五十八圓	百七圓	百七十二圓
七百圓	五百二十五圓	三百五十圓	二百六十二圓	百十圓	百七十五圓
七百十圓	五百三十二圓	三百五十五圓	二百六十六圓	百十三圓	百七十七圓
七百二十圓	五百四十四圓	三百六十圓	二百七十一圓	百十六圓	百八十八圓
七百三十圓	五百四十七圓	三百六十五圓	二百七十三圓	百十九圓	百八十二圓
七百四十圓	五百五十五圓	三百七十圓	二百七十七圓	百二十二圓	百八十五圓
七百五十圓	五百六十二圓	三百七十五圓	二百八十一圓	百二十五圓	百八十七圓
七百六十圓	五百七十圓	三百八十圓	二百八十五圓	百二十八圓	百九十九圓
七百七十圓	五百七十七圓	三百八十五圓	二百八十八圓	百三十一圓	百九十二圓
七百八十圓	五百八十五圓	三百九十圓	二百九十二圓	百三十四圓	百九十五圓
七百九十圓	五百九十二圓	三百九十五圓	二百九十六圓	百三十七圓	百九十七圓
八百百圓	六百百圓	四百百圓	三百百圓	四百十圓	二百百圓
八百十圓	六百七圓	四百五圓	三百三圓	四百十三圓	二百二圓
八百二十圓	六百十五圓	四百十圓	三百七圓	四百十六圓	二百五圓
八百三十圓	六百二十二圓	四百十五圓	三百十一圓	四百十九圓	二百七圓
八百四十圓	六百三十圓	四百二十圓	三百十五圓	四百二十二圓	二百十圓
八百五十圓	六百三十七圓	四百二十五圓	三百十八圓	四百五圓	二百十二圓
八百六十圓	六百四十五圓	四百三十圓	三百二十二圓	四百八圓	二百十五圓
八百七十圓	六百五十二圓	四百三十五圓	三百二十六圓	四百十一圓	二百十七圓
八百八十圓	六百六十圓	四百四十圓	三百三十圓	四百十四圓	二百二十圓
八百九十圓	六百六十七圓	四百四十五圓	三百三十三圓	四百十七圓	二百二十二圓







○依リ恩給扶助料罷役俸罷役恤金ヲ

給與シ又ハ給與スヘキ者處分方明治十六年十一月  
陸軍省達甲四十號

左ノ通太政官ヨリ達相成候條爲心得此旨相達候事

府縣

本年第三十七号ヲ以テ陸軍恩給令ヲ改正シ陸軍罷役俸并恤金令廢止候處右

陸軍省

恩給令改正前ニ舊恩給令ニ依リ恩給扶助料罷役恤金ヲ給與シタル者又ハ給與スヘキ資格ヲ備ヘ詮議中ニ係ル者ハ舊恩給令ニ照シ給與スヘシ此旨相達候事

○舊恩給令ニ依リ恩給扶助料給與ノ者改正令發

布後其權利移轉等ニ係ルトキ處分方明治十七年  
八月陸軍省

達甲第三  
十八號

府縣

別紙之通太政官ヨリ御達相成候條爲心得此旨相達候事

(別紙)

陸軍省  
舊陸軍恩給令ニ據リ恩給或ハ扶助料ヲ給與シタル者改正恩給令發布後ニ於テ其權利移轉若クハ停止及其他ノ事故生ゼシトキハ總テ改正令ニ據リ處分スヘシ此旨相達候事

○陸軍恩給令附則 明治十八年七月 第四十号達

官省院廳府縣

陸軍恩給令附則左ノ通相定候條此旨相達候事

陸軍恩給令附則

第一條 屯田兵ノ恩給ハ左ノ各條ニ據ル可シ  
第二條 屯田兵上長士官ノ恩給并ニ其寡婦孤兒等ノ扶助料ハ凡テ本令ニ據リ支給ス

第三條 屯田兵下士ノ内北海道ニ移住ノ節定規ノ恩給ヲ受ケサル者ニアリテハ總テ本令ニ據リ各種ノ恩給ヲ支給ス

第四條 屯田兵下士卒ニシテ定規ノ恩給ヲ受ケサル者ニアリテハ服役年ノ爲メニ恩給ヲ受ケルノ權ナシト雖モ戰鬪或ハ戰時平時ニ拘ハラヌ軍隊勤務中公務ノ爲メ死歿又ハ傷痍疾病ヲ受ケ職務ニ堪サルニ至リ其證據明亮ニシテ免除恩給スル者ハ凡テ本令ニ據リ各種ノ恩給ヲ支給ス但免除恩給ハ

服役年數ニ關セス十一年ニ等シキ額ヲ給ス

第五條 北海道ハ移住ノ節定規ノ恩給ヲ受ケサル者ノ服役年計算ハ本令ニ據ル可シト雖モ恩給ヲ受ケシ下士卒ヨリ出身ノ士官ハ士官ニ就任ノ日ヨリ起算ス可シ

第六條 屯田兵上長士官下士ノ現役ヲ辞シテ恩給ヲ受ケルノ例ハ本令第三條憲兵ノ年齢ニ準ス

○陸軍恩給取扱規則 明治十九年九月 陸軍省令甲第三十六號

北海道廳府縣

陸軍恩給取扱規則同諸書式左ノ通定ム

陸軍恩給取扱規則

第一條 此規則ハ陸軍恩給令ニ基キ取扱ノ規準ヲ定ムルモノナリ

第二條 令第七條ニ掲ケタル文官トハ准官吏以上令第二十七條但書官署ニ奉職トハ歳出科目表中俸給ノ部ヨリ支出スル俸給ヲ受ケル者ヲ云フ

第三條 令第十條第二項ニ掲ケル流行病トハ陸軍官憲ニ於テ認定シタルモノニ限ル

第四條 令第二十條ノ年限内ニ場所再感ノ確證アル者ハ情願ニ依リ本人居住地近傍ノ陸軍病院ニ於テ官費治療スルヲ許ス



第五條 令第二十六條ニ掲ケタル家名繼襲ノ孤兒ハ令第二十七條ノ順次ニ拘ハラス年長者ニ先タチ扶助料ヲ願フコトヲ得又戸主ニアラサル軍人ノ長子(男女ニ論ナク)ハ家名繼襲ノ者ニ準ス

第六條 孤兒扶助料ヲ受クルハ令第二十六條ニ掲ケタルカ如シト雖トモ已ニ他家ノ養子女トナリ當該軍人ノ死後ニ至リ復籍スル兒子ハ扶助料ヲ願フコトヲ得ス

第七條 令第二十九條末項ニ掲ケタル夫ナキ母及祖母癡疾不具等ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ハ五十歳未滿ト雖モ父及祖父ノ例ニ準ス

第八條 扶助料ハ當該軍人ノ官階ニ依ルト雖トモ令第二十一條第二項ニ該ルモノニシテ當該軍人其官階ニ進ミ未タ陸軍武官進級條例ノ停年最下限ノ半ニ至ラスレテ前官ノ恩給ヲ受ケ或ハ未タ恩給ヲ受ケスレテ死シタル軍人ノ寡婦(孤兒)ハ前官ノ額ニ依ル

第九條 陸軍藥劑監獸醫監一等軍吏一等軍樂長砲工兵上等監護ノ如キ進級停年ノ定メナキ者ノ恩給ハ猶令第十七條ノ但書ニ憑據シ藥劑監獸醫監一等軍吏ハ各其相當官ノ停年ニ一等軍樂長砲工兵上等監護等ハ少尉ノ停年ニ準據ス其寡婦(孤兒)扶助料モ亦前官ト異ルコトナシ

第十條 寡婦(孤兒)扶助料移轉ノ時並ニ令第二十九條及ヒ第四十九條第四項ニ依リ扶助料若クハ賑恤金ヲ仰カントスル者其出願期限ハ令第八條ノ

初項ニ掲ケタル寡婦(孤兒)扶助料出願ノ期限ニ同シ

第十一條 軍人服役實期十一年以上ニシテ文官ヲ兼任シ後備軍艦員トナリタル者ノ恩給出願ノ期ハ其兼官罷免ノ時トス

第十二條 服役年並恩給計算書ニハ從軍年ヲ加算シ逃亡又ハ禁錮等ノ刑ニ處セラレ現役ニ服セサルノ日數ハ之ヲ控除シテ記載スルモノトス

第十三條 恩給扶助料ヲ受クル者外國ニ寄留シ該地ニ於テ其金額ヲ受領セントスル者ハ豫メ之ヲ願出ヘシ但一年以上寄留スル者ニアラサレハ之ヲ許サス

第十四條 扶助金ヲ給スルハ令第五十一條ニ掲ケルカ如シト雖トモ下士五年以上勤續ノ後豫備役及後備役ニ入ル者ハ其際之ヲ給スルモノトス

第十五條 下士一旦死官直ニ陸軍ノ生徒トナリ復タ軍人トナリタル者ノ如キハ令第三十五條ニ據リ前後ノ現役ヲ通算スルヲ以テ其死官ノ際ハ給助金ヲ給セス

第十六條 恩給扶助料ハ年々四期ニ下付スルヲ以テ其始期終期ニ端月日ヲ生スル時ハ其年額四分ノ金高チ端月日ニ乘シ其期ノ現日數第一期ハ九月十日閏第二期ハ九月十二日第三期ハ九月十三日第四期ハ九月十二日ヲ以テ之ヲ除シ四捨五入ノ算法ニ依ル

第十七條 恩給及扶助料ノ終期  
一 死去若クハ再婚復籍レタル者ハ其當日

二 孤兒年齡滿限ニ依ル者ハ二十歳ニ達スル前月ノ晝日ノ出生シタル月  
 三 犯罪ニ係ル者ハ刑名宣告ノ前日

第十八條 服役年ヲ算スルニ方リ初任ノ月ニ端日數ヲ生シタル時ハ其月ノ  
 大小ニ依リ積算スルノ法ナルヲ以テ死官ノ月ノ端日數ト合セテ三十日以  
 上ニ及ヒタル時ハ其初任ノ日ノ大小ニ從ヒ一ヶ月ノ區域ヲ定ム

第十九條 令第三十三條ニ掲ケタル恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄トハ武官服  
 役滿十一年ニ及フノ期ヲ指シタルモノニシテ則チ其期ニ至ル迄トハ武官奉  
 任中ノ年月十六箇月ヲ以テ武官ノ服役年ヲ補充スルモノトス故ニ武官ノ  
 服役年已ニ二十一年ニ及ヒタルモノハ文官奉任中ノ年月ハ十二箇月ヲ以テ  
 一箇年ト算ス但文官初任ノ月ニ限リ奉任日數ニ拘ハラズ一箇月ト算ス

第二十條 文官或ハ卒ヨリ下士以上ニ任スル者ハ其前官若クハ前服役ノ年  
 數ヲモ通算ス但士官學校教導團其他生徒ヨリ士官下士ニ採用ノ者ハ其生  
 徒中ノ年月ハ算入セス

第二十一條 下士卒又ハ文官ヨリ生徒トナリ下士以上ニ採用ノ者ハ令第三  
 十五條ノ例ニ從ヒ其生徒トナリタル迄ノ服役年ハ之ヲ通算ス

第二十二條 令第三十一條第二項ノ徵兵ニシテ徵兵令第四十二條割註ニ當  
 ル者ノ如キハ同令ノ起算法ニ依ル

第二十三條 軍人ニシテ一旦退身再ヒ現役ニ就ク者ハ令第三十五條ニ據リ

前後ノ現役ヲ通算スト雖トモ給助金又ハ管テ滿年賜金ヲ受ケタル者ニ在  
 テハ前現役年數ハ通算セス

第二十四條 恩給登錄寫帖ヲ盜難水火災等ノ爲メ亡失シタル時ハ書面ヲ以  
 テ速ニ地方廳ヘ届出ヘシ地方廳ハ之レニ添書シテ内務省ニ具申シ證明書  
 ノ下付ヲ請フ可シ

第二十五條 凡ソ恩給ノ願書ハ當該軍人ヨリ順序ヲ經テ其所屬長聯隊ニアル  
 聯隊ヲ爲サハル隊若クハ獨立隊ニ在テハ  
 該隊長官職ニ在テハ隊長等以下之ニ依リ呈ス所屬長ハ之ヲ恩給調査委員ニ付シ

第四式ノ書面及第二十八式ノ計算書ヲ作り順序ヲ經テ所屬長官ニ呈ス

第二十六條 恩給調査委員ハ聯隊ニ在テハ聯隊聯隊ヲ爲サハル隊若クハ獨立隊ニ在  
 テハ該隊長自ラ之ニ當リ其部下ニ之  
 ナ命官廳近衛鎮臺監督  
 官廳近衛鎮臺監督  
 官廳近衛鎮臺監督謀長其幕僚員ニ其時々之ヲ命スルモノトス

第二十七條 軍醫部獸醫部武庫主管調馬主管軍法會議等ニ在ル者ノ恩給取  
 扱モ亦前條ノ例ニ準ス但陸軍大臣ニ進退シタル時ハ所屬長官ヨリ其旨ヲ  
 本屬長官ニ通報スヘシ

第二十八條 服役年ニ基ク恩給ノ願ハ定限ノ年齢ニ達スルノ前(凡三  
 十日)若ク  
 ハ服役滿期トナル前ニ於テ當該軍人ハ第一式ノ願書ニ第十三式第十四式  
 ノ書類ヲ添ヘ所屬長ニ呈出スルモノトス

第二十九條 所屬長官第二十五條ノ書類ヲ査閱シ意見ナキ時ハ近衛鎮臺ニ

在テハ參謀長官廨ニ在テハ次長若クハ課長(管テ調査委員)等ヲシテ服役年并恩給計算書ヲ檢査シ署名捺印セシメ而シテ第二十七式ノ進達書ヲ作り願書類ヲモ併セテ之ヲ陸軍大臣ニ呈ス可シ但令第五條ニ掲クル恩給出願ノ順序モ亦前條并本條ニ準ス

第三十條 傷疾疾病ニ基ク恩給ノ願ハ第二式ノ願書ニ第十三式第十四式及令第十四條第十五條ニ示シタル所ノ書類ヲ併セ第二十條ノ例ニ依リ之ヲ所管長官ニ呈ス所管長官ハ其書類ヲ所屬長ニ下付シ軍醫(第十五式ノ證書ヲ除ク)二名ヲシテ所屬長及調査委員ノ面前ニ於テ當該ヲ審査セシム軍醫ハ其診斷書ニ照シ果シテ服役ニ堪ヘスト認メタル時ハ其診斷書ニ署名捺印シ若シ服役ニ堪ニ可クシテ且項差ノ策定不適當ト認メタル時ハ檢査意見書(第六式)ヲ作り之ヲ所管長官ニ呈ス可シ所管長官ハ恩給ノ取扱ヲ他日ニ延ハシ更ニ治療セシムルコトアルヘシ

第三十一條 所管長官ハ前條兩軍醫ノ檢査ノ後軍醫長ニ移シテ其診斷証書ヲ審査セシメ當該軍人恩給ヲ受クヘキ者ト認メタル時ハ第二十九條ノ例ニ依リ願書類ヲ併セテ之ヲ陸軍大臣ニ呈ス陸軍大臣ハ更ニ之ヲ醫務局ニ下シ覆覈セシメ其證書(第七式)ヲ作ラシム(明治二十一年陸軍省令第二十六號ヲ以テ改正)

第三十二條 令第二十條ニ掲クル所ノ恩給願書ハ第三式ノ願書ニ第十五式寫及第二十式ノ診斷證書ヲ添ヘ直ニ之ヲ地方ノ鎮臺ニ呈スヘシ

第三十三條 鎮臺司令官ハ前條ノ願書ヲ受領スレハ之ヲ參謀長ニ下シテ調査セシメ其軍醫二名ヲシテ當該人ヲ檢査セシムル等第三十條以下ノ例ニ同シ

第三十四條 非職ノ者退職恩給ヲ願フ時ハ願書及第十三式第十四式ノ書類ヲ直ニ所管鎮臺司令官(他管ニ寄留ノ者ハ其地方鎮臺司令官)ニ呈ス可シ司令官ハ之ヲ參謀長ニ下シテ調査セシメ且進達書ヲ作ル等第二十九條ノ例ニ同シ

第三十五條 傷疾ヲ受ケタリト雖トモ尙ホ奉職シ後日傷疾ニ依リ退職恩給ヲ願フ者ハ負傷當時付與シタル軍醫ノ診斷證書類ヲ添フ可シ其傷疾ノ項目ハ恩給出願ノ時ニ於テ第三十條ノ例ニ依リ之ヲ定ム但戰鬪公務ノ爲メ再ヒ傷疾ヲ受ケタル者ハ前後ノ傷疾ヲ合セテ更ニ其項目ヲ定ム

第三十六條 凡ソ扶助料ノ願書ハ令第四十三條第二項ノ順序ヲ經テ陸軍大臣ニ呈ス可シ陸軍大臣之ヲ當該軍人ノ舊所管ニ下シ查覈ノ上服役従事明細書(第十式)ヲ作ラシメ查覈書類ト共ニ再ヒ進呈セシム

第三十七條 寄留地ニ於テ扶助料ヲ願ハントスル者ハ其願書ヲ寄留地ノ地方廳ニ出ス可シ但該廳ヨリ陸軍大臣ニ進達シタル時ハ其趣ヲ本籍地方廳ニ通知スヘシ

第三十八條 若シ前條ノ書類ニ連署ス可キ親族ナキ時ハ令第三十條ニ準シ寄留地ノ同郡(區)内ニアル戸主二名連署スルモ妨ケナシ

第三十九條 令第四十九條第一項第二項第三項ニ掲ケタル賑恤金ヲ請フ者アリタル時ハ所屬長其證據書類中診斷證書(第十)ニ基キ其申請書(第十)ヲ作り所管長官ニ呈シ所管長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達シ其日ニ於テ直ニ死官若クハ死役スヘシ

陸軍大臣ハ其進達書ヲ受領スレハ之ヲ醫務局ニ下シ取換證書(第十)ヲ作ラシム

第四十條 令第四十九條第四項ニ係ル者ノ願書類ハ令第四十三條第二項ノ取扱ニ準ス

第四十一條 令第三十一條第一項但書一時賜金ハ陸軍省ニ於テ調査ノ上金員ヲ大藏省ヨリ受領シ地方廳ヲ經テ本人ニ下付スルモノトス

第四十二條 給助金願書(第三十)ニハ履歷書(第三十)ヲ添ヘ本人或ハ遺族(遺族ナキ者ハ親族)ヨリ直ニ同所管ニ出願セシメ同所管ニ於テハ進達書(第三十)ヲ作り之ヲ陸軍大臣ニ呈ス陸軍省ニ於テ調査ノ上金員ヲ大藏省ヨリ受領シ本薪若クハ寄留地ノ地方廳ヲ經テ本人ニ下付ス

第四十三條 第二十八條ノ恩給願書ニ添フ可キ證據書類

一 服役従事明細書第十三式

二 戸籍明細書第十四式

第四十四條 第三十條ノ恩給願書ニ添フ可キ證據書類

一 軍醫診斷證書第十五式

二 第三十五條ニ掲ケタル者恩給ヲ願フ時ハ負傷當時付與シタル軍醫診斷證書

三 見證書(第二十)若クハ公文又ハ査閱會議口供書寫ノ内一通

四 服役従事明細書

五 戸籍明細書

第四十五條 令第二十一條第一項ニ該ル扶助料願書ニ添フ可キ證據書類

一 公文

二 孤兒ハ母死去若クハ離別證書(第二十四式)

三 戸籍明細書

四 傷痕疾病ニ罹リ治療ノ未死歿セシ時ハ見證書及軍醫診斷證書(第二十二)若クハ査問會議口供書寫

但軍醫在ラサル地ニシテ地方醫師ノ診斷ヲ受ケシ時ハ地方病院長ノ診斷證書第二十式

第四十六條 令第二十一條第二項ニ該ル扶助料願書ニ添フ可キ證據書類

寡婦ハ

一 夫死去證書第二十四式

二 戸籍明細書

- 三 夫恩給ヲ受ケタル後死歿シタル時ハ恩給登錄寫帖  
孤兒ハ
  - 一 父死去證書母ノ扶助料ヲ繼承スル者ハ之ヲ受ケス 第二十四式
  - 二 母死去證書(再婚證書)(復籍證書)(離別證書)長子ヨリ次子ニ移ル時ハ長子十四式第二十五式第二十六式
  - 三 戶籍明細書
  - 四 恩給扶助料ヲ受ケタル後死去或ハ權利消絶セシ時ハ恩給登錄寫帖
- 第四十七條 令第二十九條ニ該ル父母又ハ祖父母扶助料願書ニ添フ可キ證據書類
- 令第二十一條第一項ニ該ル者ノ父(母)祖父(祖母)ハ
- 一 公文
  - 二 戶籍明細書
  - 三 五十歳未満ニシテ癱疾不具ノ者ハ其診斷證書第廿一式
  - 四 傷痕疾病ニ罹リ治療ノ未死歿セシ時ハ見證書及軍醫診斷證書若クハ查問會議口供書寫  
但軍醫在ラサル地ニシテ地方醫師ノ診斷ヲ受ケシ時ハ地方病院長ノ診斷證書
- 令第二十一條第二項ニ該ル者ノ父(母)祖父(祖母)ハ

- 一 當該軍人死去證書第二十四式
  - 二 當該軍人恩給ヲ受ケテ後死歿シタル時ハ恩給登錄寫帖
  - 三 戶籍明細書
  - 四 五十歳未満ニシテ癱疾不具ノ者ハ其診斷證書  
扶助料ヲ受ケシ寡婦權利消絶シ或ハ父ヨリ母ニ母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スル時父(母)(祖父)(祖母)願書ニ添フルハ  
扶助料ヲ受ケ居タル者死去若クハ離別證書又ハ權利消絶ヲ證スル者
  - 二 同上恩給登錄寫帖
  - 三 戶籍明細書
  - 四 五十歳未満ニシテ癱疾不具ノ者ハ其診斷證書
- 第四十八條 令第四十九條ニ該ル賑恤金願書ニ添フ可キ證據書類
- 一 軍醫診斷證書第十八式
  - 二 見證書
  - 三 服役從軍明細書
  - 四 戶籍明細書
- (諸書式畧之)

○海軍恩給令 明治十六年九月  
第三十八號達

官省院廳府縣

海軍恩給令別冊ノ通相定候條此旨相達候事

但從前ノ海軍退隱令ハ廢止ス

(別冊)

海軍恩給令

海軍恩給令目錄

第一章 總則

第二章 恩給及ヒ増加

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第四章 服役年算則

第五章 從軍年算則

第六章 恩給支給順序

第七章 賑恤金

第八章 扶助金

海軍恩給令

總則

第一章

第一條 海軍恩給ハ海軍諸種ノ勲勞ニ依リテ之ヲ給スル者ナリ

種類別テ左ノ五項トス

一 退職恩給

二 退役恩給

三 寡婦(孤兒)扶助料

四 賑恤金

五 扶助金

第二條 退職恩給退役恩給寡婦扶助料ハ本人ノ終身孤兒扶助料ハ男女共ニ

二十歳ニ至ル迄之ヲ給シ賑恤金扶助金ハ一時限リ之ヲ給ス

第三條 軍人ハ定限ノ年齢ニ達スレハ退職退役シテ恩給ヲ受クルヲ例トス

其定限左ノ如シ(明治十八年第六十四號達ヲ以テ軍醫大監主計大監ノ項六十五ヲ六十ト改ム)

軍醫大監 主計大監 六十

機關大監 機關中監 軍醫中監 軍醫少監 六十

主計中監 主計少監 六十

大佐 中佐 機關少監 大軍醫 中軍醫 大主計 五十五

中主計 掌砲上長 水兵上長 木工上長 機關工上長 五十五

掌砲長 水兵長 木工長 機關工長 樂長 五十五

少佐 大機關士 中機關士 少軍醫 少主計 下士 四十五

大尉 中尉 少機關士 卒 四十五

少尉 軍醫補 主計補  
少尉補 機關士補

四十  
三十

第四條 軍人定限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特拔又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命スルコトアル可シ但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限ニアラス

第五條 軍人未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニシテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ海軍卿旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ

第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停ム

- 一 公權停止ノ時
- 二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時
- 三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス

第八條 寡婦若クハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ日(戰地等ニテ死歿ノ者ハ海軍官憲ヨリ報告ノ日)ヨリ一箇年間願出サル時ハ其權利消絶ス  
恩給及ヒ扶助料ハ一箇年以上其金額ノ受領ヲ怠ル時ハ其怠リタル間ノ金

額ヲ之ヲ給セス

第九條 恩給及ヒ扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メテ金圓ヲ受領セシ日ヨリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ海軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル時ハ之ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ査問會議ノ處決若クハ海軍卿ノ諭旨ニ依リ給職スル者ニ之ヲ給ス

戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メニ傷痍若クハ疾病ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰時ニ於テ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顯ミルコト能ハフシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ健康ヲ妨害シ至ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其証據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ又之ヲ給ス

其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト甲號表面ノ如シ但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十一條 退職恩給ハ下士退役恩給ハ卒服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ或ハ服役滿期トナリ或ハ傷痍若クハ疾病ノ爲メ退職若クハ退

役スル者ニ之ヲ給ス

前條第二項ニ掲クルカ如キ傷疾疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其証據明亮ニシテ退職若クハ退役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス

其退職退役恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等スルコト乙號表面ノ如シ但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十二條 軍人傷疾ヲ受ケルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職若クハ退役スル者ハ現官等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス

第十三條 下士以上ノ恩給願書ハ所管長官ヲ經テ海軍卿へ卒ハ所管長官へ其履歷書ヲ副呈ス可シ

第十四條 傷疾疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候等詳細之ヲ開陳ス可シ

第十五條 傷疾疾病ヲ受ケテ事故及ヒ其原因ハ見証証書又ハ公文若クハ査問會議口供書ノ寫ヲ以テ之ヲ証明ス可シ

第十六條 傷疾疾病不治ノ狀ハ海軍病院長並ニ主任醫官(地方病院ニ於テ治療ヲ受ケシ者ハ其院長並ニ主任醫師)ノ診斷証書ヲ以テ之ヲ証ス可シ其診斷証書ハ傷疾疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ベ以テ不治ノ狀ヲ

詳悉ス可シ

病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ海軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷書ヲ要ス

第十七條 傷疾疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ証書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘサルヤ否ヤハ當該ノ所管ニ於テ檢査判定シ之ヲ海軍卿ニ呈スヘシ海軍卿ハ臨時調査委員ヲ選定シ更ニ覆覈セシメ以テ之ヲ決定ス

第十八條 下士以上恩給ヲ願フ時ハ所管長官其海軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ休暇ヲ命シ卒恩給ヲ願フ時亦所管長官同上ノ日ニ於テ直ニ免役ス可シ

第十九條 凡恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但其官階ニ進ミ未タ滿十箇月ニ至ラスシテ退職若クハ退役ヲ願フ時ハ前官ニ準シテ之ヲ給ス其戰闘又ハ公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ或ハ戰地若クハ航海中ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス

第二十條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ左ノ各項ニ該ル者ハ恩給ノ外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者

二 前項ニ等シキ傷疾ヲ受ケシ者



三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者  
 四 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者  
 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者  
 六 前項ニ等シキ恩給ヲ受ケシ者

第二十一條 傷痕疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ趨キタル者左ノ期限内ニ願出ル時ハ検査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ルノ際其傷痕ノ爲メ服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル

一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ二箇年  
 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十二條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ緣故トニ依リテ差アリ

一 戰闘或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痕ニ原因シテ死歿シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰地ニ於テ非常ノ勞働及ヒ困苦ノ勤務ニ服シ爲メニ健康ヲ害セラレ發病終ニ死歿シ又

ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ按シ該病者ニ感染死歿シタル軍人ノ寡婦

二 退職若クハ退役恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡婦

其扶助料第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表面ニ依ル

第二十三條 戰闘若クハ公務ノ爲メ傷痕ヲ受クルト雖モ其傷痕ニ原因セサル他病ニテ死歿シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十四條 戰闘中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシニ相違ナキヲ確認スル時ハ第二十二條第一項ヲ適用ス

第二十五條 寡婦ハ海軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痕疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セス負傷又ハ發病前ニ婚配セシ者ニ限ル

第二十六條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受ルノ權消絶ス

第二十七條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該軍人ノ孤兒(嫡子庶子養子ヲ論セス戸籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ男女ニ拘ハラス家名ヲ繼襲スル者ニ限ル)ニシテ

其家名繼襲ノ者ニハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者ニハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十八條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少ナル者ニ及フ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戸籍ヲ去リ或ハ男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權利消絶ス

第二十九條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラレ、時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ク可キ者ニ之ヲ給ス

第三十條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ終身寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ給スルコトアル可シ

其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消絶スルコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齡五十歳以上其未滿ハ癡疾及ヒ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者父母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ其孰レモ軍人死歿ノ際年齡五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在ル者ニ限ル

第三十一條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見

人アレハ其後見人若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戸主二名連署シ其郡區長戸長ノ奥印セシ証書ヲ以テ地方廳ヘ進達ス可シ但恩給登錄寫帖アレハ之ヲ添附ス可シ

其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ時ハ死亡報告若クハ死亡證書若クハ他ノ公文ノ内其一ヲ証書ニ供シ其傷痕疾病ニ起因スル者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷書ヲ証書ニ供ス可シ但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證據ヲ添附シ死歿ノ原因詳細ヲ證明ス可シ海軍卿ハ之ヲ調査委員ニ下シ其事實ヲ調査セシメ以テ決定ス

第四章 服役年算則

第三十二條 服役年ノ始期及終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 准士官以上ニテ四上長四長及ヒ樂長ヲ除クノ外ハ初任ノ日四上長四長及ヒ樂長以下ハ四等卒及ヒ樂生タルノ日ヲ以テ服役年ノ始期トス但准士官以上ハ明治四年八月以前下士以下ハ明治二年五月以前准卒ハ海軍定員ニ准セサル以前ノ服役年ニ算入セス然レモ其以前ヨリ勤仕シタル者ハ其算入期ノ前年ニ於ケル現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス

二 下士以上ハ退職恩給ノ願書ヲ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈スル進達書ノ日卒ハ退役ノ日ヲ以テ終期トス

第三十三條 十七歳未満ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス  
士官以上待命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ従事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル時間ハ之ヲ除算ス

第三十四條 陸軍軍人轉シテ海軍軍人トナル者ハ陸軍服役ノ年數ヲ通算ス又文官轉シテ海軍軍人トナリタル者並ニ海軍軍人ノ現役ニ在ラスシテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受クル者恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月ハ十六箇年ヲ以テ一年トシ之ヲ通算ス

第三十五條 退職若クハ退役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス  
第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其復歸以後ノ現役ニ通算ス  
第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス  
第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役實期十一年未満ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セス

第四十條 後軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 日本國外ノ戰役ニ從事中ハ二箇年ヲ増加ス

二 出征艦隊編入中及ヒ合圍若クハ陸戰地境內ニ服役中ハ一箇年ヲ増加ス

三 戰時平時ヲ論セス外國航海中ハ半箇年ヲ増加ス

第四十一條 出征軍ノ定メニアラスシテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ於テハ海軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス

第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇年間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ跨リ十二箇年ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈シ海軍卿之ヲ太政官ニ上申ス

扶助料ノ願書ハ居住地ノ地方官ヨリ海軍卿ニ呈シ海軍卿之ヲ太政官ニ上申ス(明治十八年第六十號達ヲ以テ改正)

第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ內務大藏海軍ノ三卿ニ下シ內務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金圓受領ノ証ト爲サシム

恩給登録寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ海軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ以テ其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ退役恩給並ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 下士以上ハ計算書日付ノ翌日

二 卒ハ免役ノ翌日

三 寡婦若クハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ翌日

第四十六條 恩給扶助料ハ一月四月七月十月ニ於テ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經テ下付ス但其交付者ハ恩給登録寫帖ヲ披閱ノ上戸長ノ證セル本人生存書及ヒ金額受領證書ト引替ニ其金額ヲ交付ス可シ

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ其期ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地方廳其恩給登録寫帖ヲ收メテ内務省ニ出シ内務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省海軍省ニ報告ス但扶助料移轉ス可キ者アル時ハ恩給登録寫帖ヲ収メス更ニ扶助料請願ノ証ト爲リシム

第四十八條 恩給登録寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ亡失スル時ハ速ニ其旨ヲ届出可シ此場合ニ於テハ内務卿ヨリ證明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

一 下士卒戰鬪或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ服役ニ堪ヘス免官免役スト雖モ第二十條末項ヨリ輕傷ニシテ退職退役ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニアラスシテ傷痍疾病ヲ受ケ全ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルニ至ル者及ヒ滿五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

四 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ其寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生活セル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癡疾ノ兄弟姉

妹アリテ之ヲ教育スルノ親族ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一箇年ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ海軍卿之ヲ詮議シ太政官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤續キノ後罷役或ハ免官トナリ恩給ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其金額ハ已號表面ニ依ル但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス

○海軍恩給令發布前退隱料扶助料ヲ給與セシ者

處分方 明治十六年十一月 海軍省乙第十一號達

府 縣

海軍恩給令發布前ニ海軍退隱令ニ依リ退隱料扶助料ヲ給與シタル等退隱令ニ照シ給與之義左ノ通御達相成候條此旨相達候事

海軍省

本年第三十八號ヲ以テ海軍恩給令ヲ定メ從前ノ海軍退隱令廢止候處該恩給

海軍恩給金

甲號 退職恩給表

年數	官等	一	二	三	四
四十年	二千二百二十五圓	千七百八十圓	千五百五十七圓五十錢	千百十	
三十九年	二千二百圓	千七百六十圓	千五百四十圓	千	
三十八年	二千二百七十五圓	千七百四十圓	千五百二十二圓五十錢	千八	
三十七年	二千二百五十圓	千七百二十圓	千五百五圓	千七	
三十六年	二千二百二十五圓	千七百圓	千四百八十七圓五十錢	千六十	
三十五年	二千圓	千六百八十圓	千四百七十七圓	千	
三十四年	二千七十五圓	千六百六十圓	千四百五十二圓五十錢	千三十	
三十三年	二千五十圓	千六百四十圓	千四百三十五圓	千二	
三十二年	二千二十五圓	千六百二十圓	千四百十七圓五十錢	千十一	
三十一年	二千圓	千六百圓	千四百圓	千	
三十年	千九百七十五圓	千五百八十圓	千三百八十二圓五十錢	九百八	
二十九年	千九百五十圓	千五百六十圓	千三百六十五圓	九百	
二十八年	千九百二十五圓	千五百四十圓	千三百四十七圓五十錢	九百六	
二十七年	千九百圓	千五百二十圓	千三百三十圓	九百	
二十六年	千八百七十五圓	千五百圓	千三百十二圓五十錢	九百三	
二十五年	千八百五十圓	千四百八十圓	千二百九十五圓	九百	
二十四年	千八百二十五圓	千四百六十圓	千二百七十七圓五十錢	九百十	
二十三年	千八百圓	千四百四十圓	千二百六十圓	九	
二十二年	千七百七十五圓	千四百二十圓	千二百四十二圓五十錢	八百八	
二十一年	千七百五十圓	千四百圓	千二百二十五圓	八百	
二十年	千七百二十五圓	千三百八十圓	千二百七圓五十錢	八百六	
十九年	千七百圓	千三百六十圓	千二百九十圓	八百	
十八年	千六百七十五圓	千三百四十圓	千二百七十二圓五十錢	八百三	
十七年	千六百五十圓	千三百二十圓	千二百五十五圓	八百	
十六年	千六百二十五圓	千三百圓	千二百三十七圓五十錢	八百十	
十五年	千六百圓	千二百八十圓	千二百二十圓	八百	
十四年	千五百七十五圓	千二百六十圓	千二百四圓五十錢	七百八	
十三年	千五百五十圓	千二百四十圓	千八百十五圓	七百	
十二年	千五百二十五圓	千二百二十圓	千六百七十七圓五十錢	七百六	
十一年	千五百圓	千二百圓	千五百十圓	七百	

軍 恩 給 金 額 表

退 職 恩 給 表

等	三	四	五	六	七	八	九
二百四十圓	千六百七十七圓五十錢	七百六十二圓五十錢	六百一十圓	四百五十七圓五十錢	三百五圓	二百二十八圓七十五錢	百八十八
二百四十圓	千八百一十五圓	七百七十五圓	六百二十圓	四百六十五圓	三百十圓	二百三十二圓五十錢	百八十八
二百六十圓	千二百二十五圓五十錢	七百八十七圓五十錢	六百三十圓	四百七十二圓五十錢	三百十五圓	二百三十六圓二十五錢	百八十八
二百八十圓	千二百二十五圓	八百一十圓	六百四十圓	四百八十圓	三百二十圓	二百四十四圓	百九十九
三百圓	千三百三十七圓五十錢	八百二十二圓五十錢	六百五十圓	四百八十七圓五十錢	三百二十五圓	二百四十三圓七十五錢	百九十九
二百二十圓	千五百五十五圓	八百二十五圓	六百六十圓	四百九十五圓	三百三十圓	二百四十七圓五十錢	百九十九
二百四十圓	千七百七十二圓五十錢	八百三十七圓五十錢	六百七十圓	五百二圓五十錢	三百三十五圓	二百五十一圓二十五錢	百九十九
二百六十圓	千九百九十圓	八百五十五圓	六百八十圓	五百一十圓	三百四十圓	二百五十五圓	百
二百八十圓	千二百七圓五十錢	八百六十二圓五十錢	六百九十圓	五百十七圓五十錢	三百四十五圓	二百五十八圓七十五錢	百
四百圓	千二百二十五圓	八百七十五圓	七百圓	五百二十五圓	三百五十圓	二百六十二圓五十錢	百
四百二十圓	千二百四十二圓五十錢	八百八十七圓五十錢	七百一十圓	五百三十二圓五十錢	三百五十五圓	二百六十六圓二十五錢	百
四百四十圓	千二百六十六圓	九百圓	七百二十圓	五百四十圓	三百六十圓	二百七十圓	百
四百六十圓	千二百七十七圓五十錢	九百一十二圓五十錢	七百三十圓	五百四十七圓五十錢	三百六十五圓	二百七十三圓七十五錢	百
四百八十圓	千二百九十五圓	九百二十五圓	七百四十圓	五百五十五圓	三百七十圓	二百七十七圓五十錢	百
五百圓	千三百十二圓五十錢	九百三十七圓五十錢	七百五十圓	五百六十二圓五十錢	三百七十五圓	二百八十一圓二十五錢	百
二百二十圓	千三百三十圓	九百五十圓	七百六十圓	五百七十圓	三百八十圓	二百八十五圓	百
二百四十圓	千三百四十七圓五十錢	九百六十二圓五十錢	七百七十圓	五百七十七圓五十錢	三百八十五圓	二百八十八圓七十五錢	百
二百六十圓	千三百六十五圓	九百七十五圓	七百八十圓	五百八十五圓	三百九十圓	二百九十二圓五十錢	百
二百八十圓	千三百八十二圓五十錢	九百八十七圓五十錢	七百九十圓	五百九十二圓五十錢	三百九十五圓	二百九十六圓二十五錢	百
六百圓	千四圓	九百圓	七百圓	五百圓	三百圓	二百圓	百
二百二十圓	千四百十七圓五十錢	千十二圓五十錢	八百十圓	六百七圓五十錢	四百五圓	三百三十四圓七十五錢	二百四十
二百四十圓	千四百三十五圓	千二十五圓	八百二十圓	六百十五圓	四百十圓	三百七十四圓五十錢	二百四十
二百六十圓	千四百五十二圓五十錢	千三十七圓五十錢	八百三十圓	六百二十二圓五十錢	四百十五圓	三百一十一圓二十五錢	二百四十
二百八十圓	千四百七十七圓	千五十五圓	八百四十圓	六百三十圓	四百二十圓	三百一十五圓	二百四十
七百圓	千四百八十七圓五十錢	千六十二圓五十錢	八百五十圓	六百三十七圓五十錢	四百二十五圓	三百一十八圓七十五錢	二百五十
二百二十圓	千五百五圓	千七十八圓五十錢	八百六十圓	六百四十五圓	四百三十圓	三百二十二圓五十錢	二百五十
二百四十圓	千五百二十二圓五十錢	千八十七圓五十錢	八百七十圓	六百五十二圓五十錢	四百三十五圓	三百二十六圓二十五錢	二百五十
二百六十圓	千五百四十四圓	千九百圓	八百八十圓	六百六十圓	四百四十圓	三百三十圓	二百六十
二百八十圓	千五百五十七圓五十錢	千百一十二圓五十錢	八百九十圓	六百六十七圓五十錢	四百四十五圓	三百三十三圓七十五錢	二百六十

額表

等	五	六	七	八	九	十
五十錢	八百九十圓	六百六十七圓五十錢	四百四十五圓	三百三十三圓七十五錢	二百六十七圓	二百二十二圓五十錢
圓	八百八十圓	六百六十四圓	四百四十四圓	三百三十四圓	二百六十四圓	二百二十二圓
五十錢	八百七十四圓	六百五十二圓五十錢	四百三十五圓	三百二十六圓二十五錢	二百六十一圓	二百十七圓五十錢
圓	八百六十四圓	六百四十五圓	四百三十四圓	三百二十二圓五十錢	二百五十八圓	二百十五圓
五十錢	八百五十四圓	六百三十七圓五十錢	四百二十五圓	三百十八圓七十五錢	二百五十五圓	二百十二圓五十錢
圓	八百四十四圓	六百三十圓	四百二十四圓	三百十五圓	二百五十二圓	二百十圓
五十錢	八百三十四圓	六百二十二圓五十錢	四百十五圓	三百十一圓二十五錢	二百四十九圓	二百七圓五十錢
圓	八百二十四圓	六百十五圓	四百十四圓	三百七圓五十錢	二百四十六圓	二百五圓
五十錢	八百二十四圓	六百七圓五十錢	四百五圓	三百三圓七十五錢	二百四十三圓	二百二圓五十錢
圓	八百十四圓	六百圓	四百圓	三百圓	二百四十圓	二百圓
五十錢	七百九十圓	五百九十二圓五十錢	三百九十五圓	二百九十六圓二十五錢	二百三十七圓	百九十七圓五十錢
圓	七百八十圓	五百八十五圓	三百九十四圓	二百九十二圓五十錢	二百三十四圓	百九十五圓
五十錢	七百七十圓	五百七十七圓五十錢	三百八十五圓	二百八十八圓七十五錢	二百三十一圓	百九十二圓五十錢
圓	七百六十圓	五百七十圓	三百八十四圓	二百八十四圓五十錢	二百二十八圓	百九圓
五十錢	七百六十圓	五百六十二圓五十錢	三百七十五圓	二百八十一圓二十五錢	二百二十五圓	百八十七圓五十錢
圓	七百五十圓	五百五十五圓	三百七十四圓	二百七十七圓五十錢	二百二十二圓	百八十五圓
五十錢	七百三十圓	五百四十七圓五十錢	三百六十五圓	二百七十三圓七十五錢	二百十九圓	百八十二圓五十錢
圓	七百二十圓	五百四十圓	三百六十四圓	二百七十四圓	二百十六圓	百八圓
五十錢	七百二十圓	五百三十二圓五十錢	三百五十五圓	二百六十六圓二十五錢	二百十三圓	百七十七圓五十錢
圓	七百十圓	五百二十五圓	三百五十四圓	二百六十二圓五十錢	二百十圓	百七十五圓
五十錢	六百九十圓	五百十七圓五十錢	三百四十五圓	二百五十八圓七十五錢	二百七圓	百七十二圓五十錢
圓	六百八十圓	五百十圓	三百四十四圓	二百五十五圓	二百四圓	百七十圓
五十錢	六百七十圓	四百八十七圓五十錢	三百三十五圓	二百五十一圓二十五錢	二百一圓	百六十七圓五十錢
圓	六百六十圓	四百八十圓	三百三十四圓	二百四十七圓五十錢	百九十八圓	百六十五圓
五十錢	六百五十圓	四百八十七圓五十錢	三百二十五圓	二百四十三圓七十五錢	百九十五圓	百六十二圓五十錢
圓	六百四十圓	四百八十圓	三百二十四圓	二百四十四圓	百九十二圓	百六十圓
五十錢	六百三十圓	四百七十二圓五十錢	三百十五圓	二百三十六圓二十五錢	百八十九圓	百五十七圓五十錢
圓	六百二十圓	四百六十五圓	三百十四圓	二百三十二圓五十錢	百八十六圓	百五十五圓
五十錢	六百十圓	四百五十七圓五十錢	三百五圓	二百二十八圓七十五錢	百八十三圓	百五十二圓五十錢
圓	六百圓	四百五十圓	三百四圓	二百二十四圓	百八十圓	百五十圓



乙號

退職及退役恩

年數	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十
官等	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十
級	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	
金額	六十圓	五十四圓	六十七圓五十錢	九十圓	八十一圓	七十五圓	九十四圓五十錢	百圓	百二十圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	百八圓	

丙號

負傷增加恩給

項目	官等	金額
一	一等	千五百圓
二	二等	九百圓
三	三等	七百五十圓
四	四等	六百圓
五	五等	四百五十圓
六	六等	三百圓

丁號

戦闘及公務ニ因リ

一	一等	千圓
二	二等	八百圓
三	三等	七百圓
四	四等	六百圓
五	五等	四百五十圓
六	六等	三百圓
七	七等	二百五十圓

戊號

寡婦(孤兒)扶助料表

一	一等	五百圓
二	二等	四百圓
三	三等	三百五十圓
四	四等	二百五十圓
五	五等	二百圓
六	六等	一百五十圓
七	七等	一百圓

己號

給助金表

一	一等	千五百圓
二	二等	千圓
三	三等	八百圓
四	四等	六百圓
五	五等	四百五十圓
六	六等	三百圓
七	七等	二百五十圓





海軍省訓令ニ依リ退隱料扶助料ヲ給與シタル者及ヒ退隱料扶助料賑恤金ヲ給與スヘキ資格ヲ備ヘ支給方詮議中ニ係ル者ハ退隱令ニ照シ給與ス可シ此旨相達候事

○退隱令ニ依リ退隱料扶助料給與ノ者恩給令發布後其權利移轉等ノ處分方  
明治十七年九月  
海軍省乙第十二號達

府縣

左ノ通太官政ヨリ御達相成候條爲心得此旨相達候事

海軍省

舊海軍退隱令ニ據リ退隱料或ハ扶助料ヲ給與シタル者海軍恩給令發布後ニ於テ其權利移轉若クハ停止及其他ノ事故生セシトキハ總テ恩給令ニ據リ處分スヘシ此旨相達候事

○海軍恩給扶助料出願中族籍變換改氏名届出方

明治廿年八月  
海軍省訓令第七十九號

海軍一般北海道廳府縣

海軍恩給令ニ據リ恩給並扶助料出願中本人族籍變換若クハ改氏名等異動アルトキハ速ニ當省へ届出ツヘシ

○武官恩給特例 明治十七年一月 第四號達

官省院廳府縣

陸海軍大將滿貳年以上在官ノ者退職若クハ死亡スル時ハ特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアル可シ

陸海軍中將少將并ニ同等ノ軍人ニシテ特別ノ功績アル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアル可シ

陸海軍武官ヨリ文官ヲ兼任スル者(武官ニシテ文官ノ職ヲ兼スル者モ同シ)武官現役十一年以上十五年(從軍年ニ合算ス)未滿ニシテ退官若クハ死亡スル時ハ陸海軍恩給令ニ依リ恩給ヲ支給シ其現役滿十五年(從軍年ヲ合算ス)以上ノ者ニハ本兼官ノ内其恩給額ノ多キ方ニ就テ之ヲ支給ス但シ文官ノ恩給ヲ支給スルトキハ官吏恩給令第五條ニ依ル(明治廿年勅令第四十七號ヲ以テ改正)

文官ノ恩給ヲ受ケ若クハ之ヲ受ケヘキ權ヲ有シテ死歿シタルモノト雖モ其寡婦孤兒扶助料ハ總テ陸海軍恩給令ノ例ニ依ル(全上)

右相達候事

○恩給者轉籍取扱順序 明治十八年九月 內務省甲第廿八號達

府縣

陸海軍恩給令並ニ官吏恩給令ニ依リ恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其受領地轉換又ハ轉籍等ノ時取扱順序左ノ通り相達候條此旨相達候事

但明治十二年六月內務大藏兩省乙第三拾號達ハ廢止ス

一 恩給若クハ扶助料ヲ受ル者成規ニ從ヒ其受領地ヲ轉換セントスルトキ現授受ノ管廳ニ於テ其願ヲ受タル節ハ現授受ノ管廳ニ照會ノ上聞届クヘシ

一 寄留地管廳ニ於テ恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其受領ノ權利消絶(死亡者ニ至リ又ハ轉籍及ヒ改姓名等ノ如キ本人ニ異動ヲ生スルトキハ其旨直ニ本籍戶長ヨリ本管廳ニ届出其管廳ハ之ヲ速ニ寄留地ノ管廳ニ通知スヘシ)

一 前各項ニ係ルモノハ其處分ヲ爲シタル管廳ヨリ其族籍姓名金額及聞届並ニ異動届出ノ年月日等ヲ詳記シ速ニ內務大藏兩省ニ届出ヘシ

一 明治八年第四十八號公達陸軍武官傷痍扶助概則並ニ同年第四百四十八號公達海軍退隱令ニ據リ退隱料及扶助料ヲ受ル者モ右同様取扱フヘシ

○海軍志願兵家族扶助金支給規則 明治廿二年六月 海軍省令第三號

海軍志願兵家族扶助金支給規則左ノ通定ム

海軍志願兵家族扶助金支給規則

第一條 家族扶助金ハ志願兵ノ家族(附籍ハ除ク)アル者ニ限り入營ノ日ヨリ現役ヲ離レタル日マテ支給ス

- 第二條 一日金五錢七厘ヲ給スル者ニ再服役ヲ許シタルトキハ再服役ノ日ヨリ一日金二錢七厘ヲ支給ス
- 第三條 家族扶助金ハ每月末日本人所轄廳所轄廳トハ艦船團其他下士卒ヲ直轄スル團ヲ云フ以下之ニ同シニ於テ支給シ其日休暇ニ當ルトキハ前日ニ繰上ケ支給スヘシ  
但服役場所ニ異動アルモ本文ニ同シ
- 第四條 免官免役死亡若クハ現役ヲ退キタルトキハ前條ノ支給定日ニ拘ハラズ其當日マテ其際支給スヘシ
- 第五條 單身ノ下士卒家族チ有シタルトキハ其報告本人所在ノ廳ニ到達ノ日ヨリ家族扶助金ヲ支給ス  
家族アル下士卒單身ト爲リタルトキハ其報告本人所在ノ廳ニ到達ノ日マテ支給ス
- 第六條 海軍部内ニ於テ會計チ異ニスル廳ヨリ借用シタル者ノ家族扶助金ハ本廳發程ノ翌日ヨリ歸廳ノ當日マテ借用廳ニ於テ支給スヘシ  
海軍部外ノ各廳ヘ貸與シタル者ニハ發程ノ翌日ヨリ歸廳ノ當日マテ支給セス
- 奏樂ノ爲メ一時貸與スル軍樂員ハ前二項ノ限ニアラス
- 第七條 家族扶助金ハ處刑罰收禁若クハ遞傳護送中ノ者又ハ檻ニ艦船團若クハ職役ヲ離レタル者ニハ其當日ヨリ歸廳ノ當日マテ之ヲ支給セス

- 第八條 事故アリ退給若クハ退徵スヘキモノアルトキハ翌月以降ニ於テ支給若クハ控除スルコトヲ得但會計チ異ニスル廳ニ涉ル退徵退給ハ各其廳ニ於テ退徵退給スヘキモノトス
  - 第九條 家族扶助金ハ所轄廳ニ於テ本人ニ代リ其家族ニ送付ス但家族ヨリ請願アルトキハ本人ニ下付スヘシ
  - 第十條 前條ノ送金ハ郵便爲替若クハ日本銀行爲替又ハ雜部金取扱順序ニ依リ地方廳ニ送付シ地方廳チシテ之ヲ下付セシム
  - 第十一條 死亡者若クハ逃亡者ニ支給スヘキ金額アルトキハ其家族ノ請求ニ依リ之ヲ下付スヘシ
  - 第十二條 家族扶助金ヲ受クル者家族ニ異動アルトキハ家族又ハ親族ヨリ地方廳ニ届出テ各地方廳ハ其都度其旨在籍ノ鎮守府海兵團ニ報告スヘシ  
單身ノ下士卒家族チ有シタルトキ亦同シ
  - 第十三條 海兵團ニ於テ前條ノ報告ヲ得タルトキハ直ニ本人所在ノ廳ニ轉送スヘシ
- 附則
- 第十四條 本年五月三十一日マテハ従前ノ例規ニ依リ横須賀鎮守府ニ於テ取扱フヘシ
  - 第十五條 舊規則ニ依リ一箇年金拾圓ノ家族扶助金ヲ給スル者ニハ本年六

月一日ヨリ志願兵徵募規則ニ依リ一日金二錢七厘ヲ支給ス  
 第十六條 舊規則ニ依リ一箇月金壹圓七拾五錢ノ家族扶助金ヲ給スル者ニハ本年六月一日ヨリ九月二十日マテ日割計算ヲ以テ志願兵徵募規則ニ依リ支給スルモノトス

第十七條 前條ノ家族扶助金ヲ給スル者ニハ本年十月一日ヨリ志願兵徵募規則ニ依リ一日金五錢七厘ヲ支給ス

○巡查看守給助例 明治十五年七月第四十一號達

警視廳 府縣 東京府 神奈川縣 函館縣 札幌縣 根室縣 釧路縣

巡查看守給助例別紙ノ通相定候條各地方ニ於テ給助金額ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ經テ施行可致此旨相達候事

但實施ノ府縣ハ八年一第三號達并九年ハ第八拾號達別表中免職歸國旅費ハ相廢候儀ト相心得ヘシ

(別紙)

巡查看守給助例

第一條 給助ハ退職給助、傷痕給助、死亡給助、療治料、祭祀料ノ五種トス

第二條 給助ヲ與ル者ハ左ノ如シ

一 退職給助 勤績巡査ヨリ看守ニ看守ヨリ巡査ニ給助トス 巡査五年以上ニシテ退職スル者ニ

ハ一時之ヲ給シ滿十年以上ニシテ退職スル者ニハ終身之ヲ給ス

二 傷痕給助 職務ノ爲メ負傷スル者ニ終身之ヲ給ス

三 死亡給助 職務ノ爲メ重傷死ニ至ル者及ヒ負傷後其傷痕ニ原シテ死亡スル者又ハ職務上傳染病ニ罹リ死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

四 療治料 職務ノ爲メ負傷シ若クハ傳染病ニ罹ル者ニ之ヲ給ス

五 祭祀料 奉職中死亡スル者ニ之ヲ給ス

第三條 退職給助ノ額

一 勤績滿五年ノ者ハ一時金貳拾圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿六年以上九年迄ハ一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

二 勤績滿十年ノ者ハ年金貳拾五圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿十一年以上ハ一年毎ニ金五拾錢ヨリ少カラス壹圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

第四條 傷痕給助ノ額

一 一等傷 終身不具トナリ自用ヲ辨スル能ハサル者 ハ年金三拾圓ヨリ少カラス四拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二 二等傷 終身不具トナリ自用ヲ辨スル能ハサル者 ハ年金貳拾圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

三 三等傷 終身不具トナリ自用ヲ辨スル能ハサル者 ハ年金拾圓ヨリ少カラス十二圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第五條 療治料ノ額

一 療治料 職務ノ爲メ負傷シ若クハ傳染病ニ罹ル者ニ之ヲ給ス

二 祭祀料 奉職中死亡スル者ニ之ヲ給ス

三 遺族料 職務上死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

四 遺族料 職務上死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

五 遺族料 職務上死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

第五條 死亡給助ノ額

- 一 寡婦又ハ相續ノ孤兒アル時ハ年金三拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カフサル額ヲ給ス寡婦再嫁シ孤兒二十歳ニ至レハ廢止ス但寡婦アレハ孤兒ニ給セス
- 二 寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ル者ナク祖父母又ハ二十歳未滿ノ兄弟姉妹ニシテ死者ニ依リ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 三 相續者タル孤兒滿二十歳ニ至ルモ癡篤疾ナルトキハ年金ヲ廢止スルニ際シ一金時五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 第六條 療治料ハ傷痍又ハ病症ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス
- 第七條 祭祀料
  - 一 奉職一年未滿ニシテ死亡スル者ハ一時金拾圓ヨリ少カラス拾五圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿一年以上一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス
  - 二 職務ノ爲メ死亡スル者ヘハ前項ノ外一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 第八條 左ノ各項ニ該ル者ハ給助ヲ受ルヲ得ス
  - 一 公權ヲ剝奪セラレタル者
  - 二 懲罰ニヨリ免職セラレタル者

第九條 左ノ各項ニ該ル者ハ其時間給助ヲ停止ス

- 一 俸給ヲ受ルノ官職ニ就キタル者
  - 二 公權ヲ停止セラレタル者
  - 三 失踪シタル者
  - 四 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者
- 明治十九年十二月内務省甲第七號

府 縣 東京府及沖繩縣ヲ除ク

明治十五年<sup>七月</sup>第四十一號公達巡查看守給助例ノ儀未タ施行セサル地方モ有之候處明治二十年度ヨリ施行スヘシ

○巡查看守給助條例施行前二年以上在職者退職ノ時慰勞金支給方

明治十五年七月第四十二號達

警視廳 府縣 東京府沖繩函館札幌縣根室四縣ヲ除ク

巡查看守給助例施行ノ期ニ際シ現在職滿二年以上五年未滿ノ者引續キ五年未滿ヨリ算スニシテ退職スルトキハ給助例施行ノ日ヲ限界トシ勤績年數ニ應シ滿年賜金ノ例ニ依リ當時ノ月俸額ヲ以テ退職ノ際ニ時慰勞金ヲ支給スヘシ此旨相達候事



○巡查看守給助例實施ノ府縣減員ニテ免職者へ

一時慰勞金支給方 明治十五年十二月  
第六十六號達

警視廳 府縣 東京府沖繩函館札  
札幌室四縣ヲ除ク

本年六月第四十一號ヲ以テ巡查看守給助例相達候處右實施ノ府縣ニ於テ人員減少等ニ因リ免職スルトアルトキ奉職五年未滿ノ者ハ免職當日迄ノ勤續年數ニ應シ滿年賜金ノ例ニ據リ一時慰勞金トシテ支給スヘシ此旨相達候事

○巡查看守給助例第二條一項割註ハ一地方轉任

者ニ限ル 明治十五年十二月内  
務省乙第六十八號達

警視廳 府縣 東京府沖繩  
札幌ヲ除ク

本年七月第四十一號公達巡查看守給助例第二條第一項勤續割註ノ趣ハ全ク一地方内轉任スル者ニ限ル義ニ付此旨爲心得相達候事

○巡查看守給助例中年金支給方 明治二十年四月内務  
省訓令第二十三號

廳府縣 集治監假留監

巡查看守給助例中年金ハ左ノ各項ニ據リ支給スヘシ  
一年金ハ毎年三月及九月ニ於テ其月ヨリ前十六ヶ月ノ六ヶ月ニ滿タサルモ  
ハ現月數ヲ以テ計

ス分ヲ支給スヘシ

一年金ハ退職又ハ死亡又ハ傷瀆ノ翌月ヨリ支給スヘシ

一年金ヲ受ケタル者本例第八條第一項及第九條ニ該當スルトキハ日割ヲ以テ支給スヘシ

一年金ヲ受ケタル者死亡又ハ本例第五條第一項後段ニ該當スルトキハ其月分全額ヲ支給スヘシ

○一般人民ニシテ巡查同様ノ働チナシ死傷セシ

者吊祭扶助治療料支給方 明治十五年十二月  
第六十七號達

警視廳 府縣 東京府沖繩函館札  
札幌室四縣ヲ除ク

一般人民ニシテ巡查同様ノ働チナシ死傷セシ者吊祭扶助治療料支給方左ノ通相定候條此旨相達候事

吊祭扶助治療料

一吊祭料

重傷死ニ至ル者へ金三十拾圓ヲ給ス親族故舊ナキモノハ戸長役場ニ付シ便宜處分セシム

一遺族扶助料

父母妻子若クハ死者ニ依リ從來生計ヲナセシモノヘ金五拾圓ヨリ少カ  
ラズ百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

一 傷痍扶助料

一等傷 終身不具トナリ自用ヘ金六拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額  
ヲ給ス

二等傷 終身不具トナルモ  
給ス 自用ヲ辨シ得ル者ヘ金拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カラサル額  
ヲ給ス

一 療治料

傷痍ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

○警察及監獄雇員死傷者吊祭扶助療治料支給方

明治二十年九月  
內務省訓令第四十二號

廳府 縣集治監  
假留監

警察及監獄雇員ニシテ職務上死傷セシモノ吊祭扶助療治料ハ十五年第六十  
七號公達ニ照準支給スヘシ

但警察備ハ警察費監獄備ハ監獄費ヨリ支辨スルモノトス

○官吏准官吏公務上傳染病豫防等ニ從事感染死

亡シタル者へ手當金給與方  
明治十九年七月  
閣令第二十三號

各官廳

官吏准官吏公務ニ依リ傳染病豫防救治ニ從事シ爲メニ感染シ又ハ死亡シタ  
ル者ハ左ノ區別ニ從ヒ手當金ヲ給ス

一手當金ヲ分チ吊祭料、救治料、療治料ノ三種トス

一 救助料ハ感染者又ハ死亡シヨル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

一 療治料ハ感染者治療看護ノ雜費トシテ之ヲ給ス

一 吊祭料ハ年俸十二分ノ一若クハ月俸一箇月若クハ日給三十日分ヲ給ス  
但官ヨリ埋葬スル者ハ之ヲ給セス

一 救助料ヲ分テ二等トス

一等 俸給五箇月分日給百五十日分

二等 俸給三箇月分日給九十日分

一 感染者死亡シタル者ハ一等救助料ヲ給シ死亡セサル者ハ二等救助料ヲ給  
ス

一 療治料ハ一日壹圓ヲ給ス但官ヨリ治療スル者ハ之ヲ給セス

第十一類 爵位 勳章

○爵位

○授爵ノ詔勅 明治十七年七月

詔書

朕惟フニ華族勳冒ヘ國ノ瞻望ナリ宜シク授クルニ榮爵ヲ以テ用テ寵光ヲ示スヘシ文武諸臣中興ノ偉業ヲ翼賛シ國ニ大勞アル者宜シク均シク優列ニ陞シ用テ殊典ヲ昭カニスヘシ茲ニ五爵ヲ叙テ其有禮ヲ秩ス卿等益ス爾ノ忠貞ヲ篤クシ爾ノ子孫ヲシテ世々其美ヲ濟サシメヨ

○華族令 明治十七年七月 宮内省無號達

華族一般

華族令左ノ通被仰出候ニ付此旨相達候事

華族令

第一條 凡ソ爵ヲ授クルハ勅旨ヲ以テシ宮内卿之ヲ奉行ス

第二條 爵ヲ分テ公侯伯子男ノ五等トス

第三條 爵ハ男子嫡長ノ順序ニ依リ之ヲ襲カシム女子ハ爵ヲ襲クコトヲ得ス但現在女戸主ノ華族ハ生來相續ノ男子ヲ定ムルトキニ於テ親戚中同族

ノ者ノ連署ヲ以テ宮内卿ヲ經由シ授爵ヲ請願スヘシ

第四條 嗣今有爵者又ハ戸主死亡ノ後男子ノ相續スヘキ者ナキトキハ華族ノ榮典ヲ失フヘシ

第五條 有爵者ノ婦ハ其夫ニ均シキ禮遇及名稱ヲ享ク

第六條 華族戸主ノ戸籍ニ屬スル祖父母父母及妻及嫡長子孫及其妻ハ俱ニ華族ノ禮遇ヲ享ク

第七條 本人生存中相續人ヲシテ爵ヲ襲カシムルコトヲ得ス  
但刑法又ハ懲戒處分ニ由リ爵ヲ奪ヒ又ハ族籍ヲ削ラレ更ニ特旨ヲ以テ相續人ニ授クル者ハ此例ニ在ラス

第八條 華族ノ戸籍及身分ハ宮内卿之ヲ管掌ス

第九條 華族及華族ノ子弟婚姻シ又ハ養子セントスル者ハ先ツ宮内卿ノ許可ヲ受クヘシ

第十條 華族ハ其子弟ヲシテ相當ノ教育ヲ受ケシムルノ義務ヲ負フヘシ

○叙位條例 明治二十年五月 勅令第十號  
朕叙位條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

叙位條例 第一條 凡ソ位ハ華族勅奏任官及國家ニ勳功アル者又ハ表彰スヘキ効績アル者ヲ叙ス

第二條 凡ソ位ハ正一位ヨリ從八位ニ至ル十六階トス

第三條 凡ソ位ハ從四位以上ハ勅授トシ宮内大臣之ヲ奉ス正五位以下ハ奏授トシ宮内大臣之ヲ宣ス

第四條 凡ソ位ハ懲戒ニ因リ返上セシムルカ又ハ刑法ニ因リ公權ヲ剝奪セラルノ外終身之ヲ有スルヲ得

第五條 凡ソ位ハ從四位以上ハ爵ニ准シ禮遇ヲ享ク其准例左ノ如シ

公	爵	侯	爵	伯	爵	子	爵	男	爵
從一位	正二位	從二位	正從三位	正從四位					

第六條 爵位ヲ併有スル者ハ高キニ從テ禮遇ヲ享ク

○位階奉宣方 明治三十年五月 內閣訓令  
勅令第十號ヲ以テ位階奉宣ノ事ハ宮内大臣ニ委セラレタル處華族及宮内官吏ノ叙位ヲ除ク外ハ從前ノ如ク內閣總理大臣ヲ經テ奏上スヘシ

○勳章 內閣總理大臣奏聞裁可ヲ經タル後之ヲ宮内大臣ニ移シ宮内大臣之ヲ奉宣ス

○勳章ヲ定ム 明治八年四月 第五十四號布告

今般勳章別冊ノ通被定候條此旨布告候事(明治九年第四百一十一號布告ヲ以テ賞牌ヲ勳章ト改ム以下倣之)

(別冊)

朕惟フニ凡ソ國家ニ功ヲ立テ績ヲ顯ス者宜ク之ヲ褒賞シ以テ之ニ酬ニヘシ依テ勳等勳章ノ典ヲ定メ人々ヲシテ寵異表彰スル所アルヲ知ラシメントス汝有司其斯旨ヲ體セヨ

明治八年二月

勳等勳章

勳等ハ勳績及功勞アル者ヲ賞スル爲メニ設クル所ノ階級ニシテ位階ト異ナル故ニ各種ノ勳章ヲ佩用セシム

勳等ヲ分ツテ八級ト爲ス

勳一等

右ニ叙スル者ハ一等勳章ヲ賜フ

勳二等

右ニ叙スル者ハ二等勳章ヲ賜フ

勳三等

右ニ叙スル者ハ三等勳章ヲ賜フ

勳四等

右ニ叙スル者ハ四等勳章ヲ賜フ

勳五等

右ニ叙スル者ハ五等勳章ヲ賜フ

勳六等

右ニ叙スル者ハ六等勳章ヲ賜フ

勳七等

右ニ叙スル者ハ七等勳章ヲ賜フ

勳八等

右ニ叙スル者ハ八等勳章ヲ賜フ

從軍記章(明治九年第四百一十一號布告ヲ以テ從軍牌ヲ從軍記章ト改ム以下倣之)

從軍記章ハ將卒ノ別ナク軍功ノ有無ヲ論セス凱旋ノ後從軍セシ徵ニ之ヲ賜フ

一勳章及從軍記章ハ佩用本人ニ止リ子孫之ヲ用ニルコトヲ得ス

勳章佩用式

一勳章ハ勳一等ニ限り必ス勳二等ノ牌ト共ニ兩箇ノ牌ヲ佩フハシ其他二等以下ハ一箇ヲ佩ルヲ規則トス譬ハ三等ノ牌ヲ佩ル者勳二等ニ叙スルトキハ管テ佩フル所ノ三等牌ヲ止メ二等牌ノミ佩ルカ如シ

- 一 勳章ハ禮服ノトキ佩ヘシ平服ニハ佩フヘカラス平服ニハ略綬ヲ左襟見返ノ釦穴ニ掛ケ其表トス
- 一 一等勳章ハ幅廣キ綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ斜ニ佩フ
- 一 二等勳章ハ右ノ綬邊ヘ綬ヲ不用針ニテ挾ミ佩フ
- 一 三等勳章ハ綬ヲ領ニ纏ヒ喉下ニ佩フ
- 一 四等以下ノ勳章及從軍記章ハ左助ノ邊ヘ左ニ列シ佩フ  
(表并ニ圖式略之)

○大勳章圖式並大勳章以下畧綬ヲ定ム 明治十年十月二十九日

明治九年中欽定ノ大勳位菊花大綬章大勳位菊花章圖式別冊ノ通ニ候事  
(別冊畧ス)  
 從前各種ノ略綬ヲ廢シ更ニ大勳章以下略綬別紙ノ通被定候事  
(別紙畧ス)  
 右相達候事

○勳章潤飾増設詔勅 明治二十一年一月三日

朕曩ニ勳位ヲ定メ佩章ノ制ヲ設ク茲ニ復潤飾増設シ新舊與ニ併行シ勳功

ル者ヲ賞旌シ以テ獎勵ノ道ヲ擴ム汝衆庶此旨ヲ體セヨ

○勳章等級製式大勳位菊花章頸飾製式 明治二十一年一月勅令

第一號

朕各種ノ勳章等級製式及ヒ大勳位菊花頸飾ノ製式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セ

- 一 寶冠章  
勳一等ヨリ勳五等ニ至ル婦人ノ勳勞アル者ニ賜フ  
章 寶冠ト竹櫻ノ形ヲ以テ飾ル  
綬 地黃色雙線紅色
- 一 勳一等旭日桐花大綬章  
旭日大綬章ノ上級トス勳勞アル者ニ賜フ  
章 旭日ト桐花ノ形ヲ以テ飾ル  
綬 地紅色雙線白色
- 一 瑞寶章  
勳一等ヨリ勳八等ニ至ル勳勞アル者ニ賜フ  
章 鏡珠ノ形ヲ以テ飾ル  
綬 地淡藍色雙線橙黃色

一 大勳位菊花頸飾

頸飾ハ大勳位ニ叙セシ者ニ特別之ヲ賜フ  
菊花菊葉ノ形ト明治二字古篆文ヲ以テ飾ル

○勳章及大勳位菊花飾頸章圖樣 明治二十一年十一月  
閣令第三十一號

明治二十一年一勅令第一號各種ノ勳章及大勳位菊花章頸飾ノ圖樣左ノ如ク  
(各種勳章及大勳位菊花章頸飾ノ圖樣畧之)

○勳章佩用式 明治二十一年十一月  
勅令第七十六號

朕勳章佩用式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳章佩用式

第一條 大勳位菊花章

菊花章ハ頸飾ヲ以テ喉下ニ佩ヒ其副章ヲ左肋ニ佩フ大綬ヲ以テ佩フル時  
ハ右肩ヨリ左脇ニ垂レ其副章ハ左肋ニ佩フ

第二條 寶冠章

一 勳一等寶冠章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ニ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ  
二 勳二等寶冠章以下ハ結縵狀ノ綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第三條 旭日章

一 勳一等旭日桐花章並旭日章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ニ垂レ其副章  
ヲ左肋ニ佩フ  
二 勳二等旭日章ハ右肋ニ佩ヒ其副章ヲ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ  
三 勳三等旭日章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ  
四 勳四等勳五等勳六等勳七等勳八等桐葉章ハ小綬ヲ以テ左肋ニ  
佩フ

第四條 瑞寶章

一 勳一等瑞寶章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ニ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ  
二 勳二等瑞寶章ハ右肋ニ佩フ  
三 勳三等瑞寶章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ  
四 勳四等瑞寶章以下ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ  
第五條 別種ノ勳章ハ之ヲ併佩ス其大綬章ハ之ヲ併佩セス

○勳章記章佩用心得 明治二十一年二月  
賞勳局告示第一號

第一款 一等勳章ヲ有スル者更ニ別種ノ一等勳章ヲ受ケタル時ハ旭日桐  
花章ト併佩スルニ同種ナリ 後ニ受ケタル一等勳章ノ正章並ニ其副章ト前ニ受ケタル  
一等勳章ノ副章ト併佩スヘシ

第二款 二等以下ノ勳章ヲ有スル者更ニ同種上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ其下級ノ勳章ヲ佩フルコトヲ止ム別種ノ同級若クハ上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ之ヲ併佩スヘシ

第三款 二等勳章若クハ一等ノ副章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ニ付テ其上位ニ列佩スヘシ

第四款 三等勳章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ上ニ佩フヘシ

第五款 四等勳章以下兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ右ニ佩ヒ其從軍記章若クハ褒章ヲ有スル者ハ之ヲ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第六款 勳章ハ男子ハ大禮服及ヒ通常禮服(燕尾服)着用ノ時佩フヘシ徒軍記及ヒ褒章ヲ有スル者亦同シ

通常禮服着用ノ時ハ大綬章ヲ上衣ノ下ニ佩ヒ其副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フ又大綬章ヲ胸衣ノ下襟衣ノ上ニ佩ヒ副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フルコトアリ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ其副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

旭日二等章ヲ有スル者通常禮服着用ノ節ハ其ノ副章ヲ省クコトアルヘシ

第七款 勳章ハ婦人ハ大中小禮服着用ノ時佩フヘシ

一等勳章ヲ有スル者大禮服ニハ大綬章及ヒ副章ヲ佩フ中小禮服ニハ時宜ニ依リ大勳章ヲ省キ副章ノミ佩フルコトアルヘシ又常通禮服ニハ時宜ニ依リ副章ノミ佩フルコトアルヘシ

二等以下ノ勳章ヲ有スル者ハ通常禮服着用時ニ於テモ時宜ニ依リ之ヲ佩フルコトアルヘシ

外國勳章記章

第八款 外國勳章佩用方ハ各彼ノ規則ニ依ル

第九款 我勳章ヲ有スル者我勳章ヲ佩ヒスレテ彼ノ勳章ノミヲ佩フヘカラス

第十款 彼我ノ大綬章ヲ有スル者ハ彼ノ大綬章ヲ佩ヒス之ニ屬スル副章ノミヲ我副章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

但外交ノ時宜ニ依リ彼ノ大綬章及ヒ其副章ヲ佩フル時ハ我大綬章ヲ省キ我副章ハ併佩スヘシ

第十一款 彼我ノ綬ヲ用ヒサル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

第十二款 彼我ノ喉下ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下ニ佩フヘシ



第十三款 彼我ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十四款 彼ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ我從軍記章及ヒ褒章ヲ彼ノ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十五款 彼ノ記章ト我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ之ヲ我從軍記章及褒章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

○ 略章 略章佩用心得 明治二十二年二月 賞勳局告示第二號

- 一 各種勳章ノ略章(凡ソ徑曲尺五六分若クハ其以下ノ大サニシテ)ハ通常禮服着用ノ時或ル場合ニ於テ連鎖或ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩用スルヲ得外國勳章ノ略章モ亦同シ
  - 二 略章ハ通常禮服通常禮服用ノ節左襟見返シノ鈕孔ニ掛ケ佩フヘシ
  - 三 略章ハ別種二箇以上ノ勳章ヲ有スル者各其綬ト同色ナル絹ヲ以テ二箇若クハ數箇合併ノモノヲ製シ之ヲ佩用スルヲ得又内外數種ノ勳章ヲ有スル者ハ内外數箇合併ノ略章ヲ製シ之ヲ佩用スルヲ得
  - 四 我略章ヲ佩ヒテ外國ノ勳章ヲ佩フルコトナシ
- (略章佩用圖略ス)

○ 勳三等旭日章副章製式 明治二十一年十一月 賞勳局告示第一號

明治二十一年十一月 勅令第七十六號勳章佩用式第三條第二項ニアル勳二等旭日章ノ副章ハ其製式勳三等旭日章ニ異ナルコトナシ

○ 勳章還納ノ場合 明治二十二年三月 勅令第三十八號

朕勳章還納ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳等進叙シ同種ノ上級勳章ヲ受ケタル者ハ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ

但勳記ハ還納スルノ限ニアル

○ 勳章還納手續 明治二十二年三月 閣令第九號

- 勳章還納手續ヲ定ムルコト左ノ如シ
- 勳章還納手續
- 第一條 同種上級ノ勳章ヲ授與セラレタル者ハ一週間以内ニ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ
  - 第二條 同種上級ノ勳章ヲ賞勳局ノ送達ニヨリ受領シタル者ハ直ニ其領票ト共ニ下級ノ勳章ヲ同局ヘ差出スヘシ
  - 官廳ヲ經テ受領シタル者ハ其官廳ヘ差出シ官廳ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ
- 第三條 外國人ノ勳等進叙シ同種上級勳章ヲ受ケタル者ハ亦此手續ニ從ヒ

下級ノ勳章ヲ還納スヘシ其外國ニ在ル者ハ最寄我公使館又ハ領事館ヘ差出スヘシ

第四條 公使館又ハ領事館ニ於テ前條勳章ヲ領收シタルトキハ外務省ヘ送付シ同省ヘ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ

第五條 勳章還納ニ關スル費用ハ受章者ノ自辨トス又官廳ヨリ賞勳局ヘ送付スルモノハ其官廳ニ於テ支辨スヘシ

附則

一從前同種勳章ニ進叙シタル者ハ東京ハ二週間以內各地方ハ三十日以內ニ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ我國在留ノ外國人亦同シ其外國ニ在ル者ハ手續第五條ニ依ルヘシ

但進級者既ニ死亡シタルトキハ本文ノ限ニアラス

○外國勳章佩用願規則 明治十八年十一月第三十五號布告

明治十一年六月第拾五號布告外國勳章佩用免許願手續左ノ通改正ス

外國勳章佩用願規則

第一條 外國ノ勳章ヲ受領シ之ヲ佩用セントスル者ハ賞勳局總裁ヘ願出免許狀ヲ受クヘシ

第二條 佩用願書ニハ勳章勳記其他關係書類ヲ添ヘ勅委任官ハ直ニ賞勳局

總裁ヘ差出スヘシ  
總裁ヘ華族ハ宮内卿判任以下ハ本屬長官士族平民ハ管轄廳ヲ經テ賞勳局

第三條 外國ノ勳章ヲ佩用スル者死亡シタルトキハ三十日以內ニ其旨ヲ遺族又ハ親戚ヨリ華族ハ宮内卿士族平民ハ管轄廳ヲ經テ賞勳局ヘ届出ヘシ

第四條 外國ノ記章從軍記章人命救助記章博覽會記章ノ類ヲ受領シ之ヲ佩用セントスル者ハ總裁此規則ニ準據スヘシ

○勳章年金褫奪及停止 明治十六年六月第廿二號布告

勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アル時ハ賞勳及年金ヲ褫奪ス外國勳章ハ其佩用免許狀ヲ沒收ス

勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留若クハ保釋責付セラレタル時ハ勳章ヲ佩用スルコトヲ得ス又之ニ屬スル禮遇特權及ヒ年金ヲ受クルヲ得ス右奉 勅旨布告候事

○勳章年金褫奪及停止取扱手續 明治十九年七月閣令第十九號

各官廳

明治十六年九月第三十九號達勳章年金褫奪及停止取扱手續ヲ改正スルヲ左ノ

第一條 (明治十六年十一月十五日福岡縣同十七年二月四日內務省指令) 勳章年金視奪及停止取扱手續第一條第三項ニ所謂懲戒令トハ汎ク之ヲ指稱シタルモノニシテ單ニ官吏懲戒例ニ限ラス巡查懲戒令ノ如キモ包含ス

如シ

勳章年金視奪及停止取扱手續

- 第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、ハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス
  - 第一項 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者
  - 但輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者ハ其所犯ノ情狀ニヨル
  - 第二項 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者
  - 第三項 懲戒例及免職條例ニヨリ免官セラレタル者
  - 第四項 素行修マラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者
- 第二條 第一條第一項ニ觸ル、者輕罪ヲ犯シタルハ裁判確定ノ後裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ宣告書寫ヲ添ヘ其旨ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ普通刑法第三十一條第三十二條陸軍刑法第二十八條第二十九條海軍刑法十七條ニ依リ處分ス
- 第三條 第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ
- 第四條 賞勳局總裁ハ其具申ヲ審査シ重禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ直ニ上奏シ其輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者ハ議定官ノ會議ニ於テ其視奪ノ當否ヲ論定シ視奪スヘキ者

ハ奏請ス

- 第五條 視奪ノ裁可アリタルハ賞勳局總裁ハ視奪狀ヲ作り視奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム
- 視奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ視奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヘ通知スヘシ
- 第六條 勳位進級セシ者ナルハ前級ノ勳賞勳記ヲモ視奪スヘシ年金票モ亦同シ
- 第七條 視奪シタル勳章勳記年金票ハ視奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局ヘ還納スヘシ但其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ニ係ルハ其宣告書寫ヲ添フヘシ
- 第八條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルハ其年月日及ヒ事由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ
- 但公訴權消滅シタルハ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルハ亦其事情ヲ詳記シテ之ヲ申告スヘシ
- 第九條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ其訴ヲ受ケスト雖モ現ニ拘留セラレタルハ檢察官ヨリ前條ノ手續ニ從ヒ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ
- 第十條 外國勳章佩用免狀ヲ沒收スルハ亦總テ此手續ニ準據スヘシ

第十二類 褒賞 恤救

○褒賞

○褒章條例 明治十四年十二月  
第六十三号布告

褒章條例別紙ノ通相定來明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス  
右奉 勅旨布告候事

(別紙)

褒章條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ願ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナル者孝子  
順孫節婦  
義僕ノ類又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者疏河築堤修路墾田ノ業或ハ  
貧院學校設立ノ類ヲ云フヲ表彰  
スル爲メ左ノ三種ノ褒章ヲ定ム

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ願ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者ニ賜フモノトス

第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀

ヲ與フコトアルヘシ

第三條 已ニ褒章ヲ賜リタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章ヲ賜フヘキトキハ其都度飾版一箇ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與セス

章	銀櫻花紋圓形徑九分
鈕并飾版	銀
綬	幅一寸 種類ニヨリ紅綠藍三色ノ別アリ

(褒章圖式畧之)

○褒章條例取扱手續

明治十四年十二月 官省院使廳府縣

今般第六十三號ヲ以テ褒章條例布告候ニ付取扱手續左ノ通相定候此旨相達候事

但明治八年七月第二百二十一號達ハ右條例施行ノ日ヨリ廢止候事

(明治十六年六月二十日農商務省 同日農商務省 日太政官指令)

難破船ニ係ル人命救助ナルモノハ甲船困難ノ際同所航行中ノ乙船船長水夫若クハ乘客又ハ該地元人民ト同心協力シテ救援スル等其場合一ニシテ足ラス今其褒賞ヲ救助者各自ノ管轄長官ニ於テ舉行スルモノトセハ處分上或ハ多少ノ煩雜モ可有之ヲ以テ斯ル場合ニ於テハ連難救援ノ事實ヲ詳悉シタル地方長官ニ於テ賞與スヘシ

第一條 凡ソ勳章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ其當否ヲ審査スヘシ

但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ褒章ヲ賜フノ限リニアラス

第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒章ヲ賜フヘキモノト思量スルトキハ之ヲ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據リ勅奏任官並ニ從六位以上及勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ褒章ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ其管轄長官ヲシテ之ヲ傳達セシムヘシ

但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜フヘキトキハ外務卿ヨリ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ授與ノトキモ亦同卿ヲ經由シテ之ヲ傳達セシムヘシ其公私備ニ係ル者ハ本條ニ同シ

第三條 褒狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レヒ勅奏任官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ハ内務卿又ハ農商務卿ニ具申スヘシ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ太政官ニ上申シ太政官ニ於テ之ヲ賜フヘシ

○褒章ト金銀木杯金圓賜リ方

明治十四年十二月 第六拾三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フキ者又ハ公益ノ爲メニ金銀財產等ヲ寄付シタル者ハ金銀木杯若クハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト

金銀木杯金圓ヲ併セ賜フコトアルヘシ  
右奉 勅旨布告候事

○金銀木杯金圓賜與手續明治十六年三月十七號達

官省院廳府縣

本年第壹號布告ノ旨ニ依リ金銀木杯又ハ金圓賜與手續別紙ノ通相定候條此旨相達候事

(別紙)

金銀木杯金圓賜與手續

第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木杯又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セフトキハ其等差左ノ如シ

定例

第一等 木杯三組品格ヲ三等ニ分ツ又ハ金拾圓ヨリ多カラス六圓ヨリ少カラス

第二等 木杯三組品格ヲ三等ニ分ツ又ハ金五圓ヨリ多カラス貳圓五拾錢ヨリ少カラス

第三等 木杯壹個品格ヲ三等ニ分ツ又ハ金貳圓ヨリ多カラス壹圓ヨリ少カラス

但賜杯賜金ニ及ハサルモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ  
特例

第一等 金杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二等 銀杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二條 公益ノ爲メニ金穀財產等ヲ寄附シタル者ニ金銀木杯ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

奇附金額又ハ價格

拾圓未滿

褒狀

但壹圓未滿ハ褒詞ヲ以テ褒狀ニ換フルコトアルヘシ(明治十七年第二十二號達ヲ以テ但書追加)

拾圓以上百圓未滿

木杯壹個

但五十圓未滿ハ拾圓毎ニ五圓以上ハ貳拾五圓毎ニ價格ニ等差アリ

百圓以上五百圓未滿

木杯三組

但三百圓未滿ハ五拾圓毎ニ三百以上ハ百圓毎ニ價格ニ等差アリ

五百圓以上貳千圓未滿

銀杯壹組

但千圓未滿ハ貳百五拾圓毎ニ千圓以上ハ五百圓毎ニ價格ニ等差アリ

貳千圓以上五千圓未滿

銀杯三組

但シ千圓毎ニ價格ニ等差アリ

五千圓以上壹萬圓未滿

金杯壹個

但シ二千五百圓毎ニ價格ニ等差アリ

壹萬圓以上

金杯三組

第三條 金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フ事項ハ賞勳局總裁之ヲ管理スルモノトス  
 褒章又ハ木杯又ハ定例金圓ノミヲ賜フハ警視總監府知事縣令管理施行スルモノトス

但勅委任官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戸主ニ賜フ  
 ～キトキハ第四條ニ準據スヘシ

第四條 金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フヘキ者アルトキハ警視總監府知事縣令ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ審査シ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ

賞勳局總裁ハ其申牒ニ據テ勅委任官並從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戸主ニハ之ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ警視總監府知事縣令ヲシテ之ヲ傳達セシム

第五條 金銀木杯又ハ金圓又ハ褒狀ヲ受クヘキ者ニシテ其未タ授與セサル前重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ授與セス

○圖書諸器物等寄附ニ係ル取計方  
 明治二十二年四月  
 内務省訓令第十八號

北海道廳 府縣

閣令第十五号ヲ以テ明治十年<sup>十</sup>太政官達第七十七号同十一年同第十三号ヲ廢セラレタルヲ以テ自今各官廳へ圖書諸器物等ヲ寄附シ若クハ官費支辨ノ事業ニ對シ金穀其他ノ物件ヲ寄附スル者アルトキハ之ヲ受領シタル官廳ヨリ本人所在ノ地方廳ニ通知可相成ニ付右通知ヲ受ケタルトキハ明治十六年第一号布告同年太政官第十七號達ニ據リ取計フヘシ

○黃綬褒章ヲ制定ス  
 明治二十年五月  
 勅令第十六號

朕黃綬褒章臨時制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 私財ヲ獻納シ防海ノ事業ヲ贊成スルモノニ授與スル爲メ黃綬褒章ヲ制定シ分テ金章銀章ノ二種トス

第二條 黃綬褒章ヲ佩用シ又ハ沒収スルノ事項ハ明治十四年<sup>十二</sup>第六十三號褒章條例ニ依ル

第三條 黃綬褒章ノ圖式左ノ如シ

章	金及銀圓形表面ニ菊ノ徽章褒章ノ二字大砲ノ圖裏面ニ贊成防海事業ノ六字ヲ鑄出ス
綬	橙黃色

(褒章圖式畧之)

○警察賞與規則 明治二十一年十月 內務省訓令第二十一號

廳府縣

警察賞與規則左ノ通相定ム

警察賞與規則

第一條 警察上功勞アル者ハ本則ニ依リ賞與スヘキモノトス

第二條 警察賞與ヲ分テ左ノ三種トス

甲種 金三圓以上拾五圓以下

乙種 金五圓以下

特別賞 金拾五圓以上三拾圓以下

特別賞ヘ事ノ重要ニ涉リ功勞ノ特ニ著明ナルモノニ限り之ヲ給スルコトヲ得

第三條 犯罪事件ニ關スル功勞ノ賞與ハ左ノ各項ニ依ル

第一項 左ノ罪犯ヲ現行ノ場合ニ於テ捕獲シ又ハ容易ニ捕獲スルヲ得セシメタル者

甲種

一 國事ニ關スル重罪犯

二 兇徒聚衆ニ關スル重罪犯

三 貨幣偽造變造ニ關スル重罪犯

四 人命ニ關スル重罪犯

五 放火ニ關スル重罪犯

六 強盜ニ關スル重罪犯

乙種

一 貨幣偽造變造ニ關スル輕罪犯

二 竊盜ニ關スル罪犯

第二項 前項ノ罪犯ヲ分明ニ訴出タル者亦前項ノ區別ニ同シ

第三項 第一項ノ場合ニシテ罪犯暴行強迫ヲ以テ抗拒シタルトキハ其難

易ニ因リ及第一項ニ掲クル罪犯ニシテ其未遂ノ時ニ訴出タル者ハ其乙

種ハ金三圓以上拾圓以下甲種ハ五圓以上貳拾圓以下ノ金額ヲ賞與スル

コトヲ得

第四項 前數項ノ外其功勞ノ前數項ニ比シ相下ラサルモノハ其適度ニ應

シ賞與スルコトヲ得

第五項 前數項ニ該當スルモノト雖モ事ノ最モ輕キモノ又ハ功勞ノ最モ

尠キモノ若クハ金圓ヲ賞與シ難キ事情アル者ハ賞詞ヲ與フルコトヲ得

第四條 水火災其他犯罪ニ關セサル功勞ハ乙種ノ賞ヲ給與スヘシ但其功勞

ノ大ナル者ハ甲種ノ賞ヲ與フルコトヲ得



第五條 罪犯判決前ニ逃亡又ハ死去シタル場合若クハ賞與スヘキ事件ノ完結セサル前ト雖モ其疑ナキモノハ賞與ヲ施行スルコトヲ得

第六條 賞與ハ何等ノ場合ヲ問ハス一旦施行シタル後ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第七條 本則ニ定メタル賞與ノ金額ハ一事件ノ賞トス但第三條第一項ノ場合ハ一罪犯ニ付テノ賞トス

數事件數罪犯ニテ功勞者一人ナルトキハ數事件數罪犯ノ賞ヲ各別ニ給與スヘシ

一事件若クハ數事件二名若クハ數名ノ罪犯ニシテ功勞者數人ナルトキハ之ヲ賞與スルニハ一事件若クハ一罪犯ニ對スル金額又ハ數事件若クハ數罪犯ニ對スル金額適宜功勞者ノ人員ニ配當給與スヘシ

第八條 功勞者賞與執行前ニ死去シタルトキハ賞與ノ金額ハ親屬ノ最近ナル者ニ給ス若シ親屬ナキトキハ戸長ニ交付シテ祭祀料ニ充用セシムヘシ其所在不分明ナルトキ亦同シ但親屬ナキ者ニシテ三十六ヶ月ヲ經過シタルトキハ賞與ヲ施行セス

第九條 公權ヲ剝奪セラレタル者ニハ賞與ヘス

第十條 自己又ハ親屬ノ利害ニ關スル事件ニ付テハ賞與ヘス但共功勞ノ特ニ著明ニシテ一般ニ洪益ヲ及ボスモノハ時宜ニヨリ之ヲ賞與スルコト

ヲ得其被害者ト利害ヲ共ニスル者亦同シ

第十一條 罪犯其親屬ニ係ルトキハ總テ賞與スルコトヲ得ス

第十二條 第八條第十條第十一條ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ニ記載シタル者ヲ云フ

第十三條 巡查ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ本則ニ定ムル賞與ノ區別ニ從ヒ甲種以上及特別賞ヲ與フルコトヲ得

第一項 第三條ニ掲クル罪犯ヲ捜査シ又ハ捕獲シ其功勞著シキ者

第二項 前項ニ該當セスト雖モ其功勞ノ前項ニ比シ相下ラサル者

第三項 第四條ニ掲クル事項及流行病ニ付其功勞著シキ者

第四項 自己ノ危難ヲ顧ミ人命ヲ救援シタル者

第十四條 巡查罪犯ヲ捕獲シ功勞アリト雖モ未タ拘留セサル前ニ逃走セシメタルモノハ賞與スルコトヲ得ス

護送中逃走セシメ其護送者ニ於テ捕獲シタルトキ亦同シ

第十五條 巡查私事旅行中其管内ニ於テ賞與スヘキ功勞アリタルトキハ其職務上ニ於テ爲シタルモノト同一ノ賞ヲ與フヘシ

第十六條 巡查ニシテ一般人民共ニ人命ヲ救援シタルトキハ賞與スヘキ金額ヲ救援者ノ全數ニ分賦シ其巡查ニ屬スル金額ヲ賞與スヘシ

第十七條 本則第七條乃至第十一條ハ巡查ノ賞與ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第十八條 巡查ノ賞與ハ其所屬廳ニ於テ施行シ其他ハ左ノ區別ニヨリ各管轄廳東京府ハニ於テ施行スヘシ

第一項 訴ヲ受タル地ノ管轄廳

第二項 罪犯ヲ最初ニ受取タル地ノ管轄廳

第三項 犯罪事件ニ屬セサルモノハ其事件ノ生シタル地ノ管轄廳

第十九條 賞與スヘキ事件若クハ功勞者ノ數官廳ニ牽連スルモノハ互ニ協議ヲ盡シ其金額ヲ定メ之ヲ差分シ又ハ功勞ノ多少ニ依リ適宜分割シ各其廳ニ於テ賞與スヘシ

第二十條 警部其他警察事務ニ從事スル者ニシテ功勞アルトキハ巡查ノ例ニ準シ賞與スルコトヲ得

第二十一條 特別賞與ヲ行フタルトキハ其都度狀ヲ具シ報告スヘシ(明治十務省訓令第二號ヲ以テ改正)

第二十二條 賞與ノ費額ハ各其所屬ノ經費ヲ以テ支辨スヘシ

○看守押丁賞與方明治廿二年一月 內務省訓令第一號

廳府縣 集治監 假留監

看守押丁ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ明治二十一年十月內務省訓令第二十一號警察賞與規則ニ據リ功勞ノ適度ニ應シ金拾五圓以下ヲ賞與スヘシ

一 反獄ヲ鎮制スルニ當テ其功勞著シキ者

二 自己ノ監守ニ非ラサル在監人ニシテ逃走スル者ヲ捕獲シ其功勞著シキ者

三 監獄内ノ水火風震及ヒ流行病ニ付其功勞著シキ者

四 自己ノ危難ヲ顧ミス在監人ノ性命ヲ救援シタル者

○恤救

○恤救規則明治七年十二月 第百六十二号達

府縣

濟貧恤窮ハ人民互ノ情誼ニ因テ其方法ヲ設ヘキ等ニ候得共目下難差置無告ノ窮民ハ自今各地ノ遠近ニヨリ五十日以内ノ分左ノ規則ニ照シ取計置委曲內務省ヘ可伺出此旨相達候事

恤救規則

一 極貧ノ者獨身ニテ癱疾ニ罹リ産業ヲ營ム能ハサル者ニハ一ヶ月米一石八斗ノ積ヲ以テ給與スヘシ

但獨身ニ非スト雖モ餘ノ家人七十年以上十五年以下ニテ其身癱疾ニ罹リ窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與スヘシ

一同獨身ニテ七十年以上ノ者重病或ハ老衰シテ産業ヲ營ム能ハサル者ニハ

- 一ヶ月米一石八斗ノ積ヲ以テ給與スヘシ
- 但獨身ニ非スト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身重病或ハ老衰シテ窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與スヘシ
- 一同獨身ニテ疾病ニ罹リ産業ヲ營ム能ハサル者ニハ一日(男ハ三合女ハ二合)ノ割ヲ以テ給與スヘシ
- 但獨身ニ非スト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身病ニ罹リ窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與スヘシ
- 一同獨身ニテ十三年以下ノ者ニハ一ヶ月米七斗ノ積ヲ以テ給與スヘシ
- 但獨身ニ非スト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與スヘシ
- 一救助米ハ該地前月ノ下米相場ヲ以石代下ケ渡スヘキ事

○窮民救助申請手續 明治八年七月 內務省乙第八十五號達

府縣

窮民救助ノ儀ニ付テハ昨七年第百六十二號ヲ以テ御達ノ趣モ有之候處爾後右等ノ者共救助申請ノ砌ハ左ノ箇條ニ照シ篤ト調査ノ上可伺出此旨心得トシテ相達候事

第一條 恤救規則ニヨル可キモノハ獨身老幼癱疾疾病等ニテ何等ノ業モ爲

- ス能ハス事實赤貧ニシテ曾テ他ニ保育スル者モ無之全ク無告ノ窮民而已ニ限ルヘシ然ルニ唯年齡廢疾等ノ名義ニヨリ救助伺出ツル等ノ儀コレアリテハ恤救規則ノ趣旨ニモ乖戾可致ニ付假令七十一年以上又ハ廢疾ノ者タリモ其業ニヨリテハ生産ノ道可相立者ナレトモサレハ篤ト現場ノ實況ヲ査定シ眞ニ不得已者而已具狀致スヘシ
- 第二條 同上ニヨリ是迄其市村内或ハ隣保ノ情誼ヨリ互ニ協救仕來ル如キハ別段官ノ給與ヲ乞ハサルヲ以本旨トスヘシ
- 第三條 同上ニヨリ互ニ協救スルト雖若シ其手當不足ニシテ其内幾分ヲ官ヨリ仰カサレハ補助スル能ハサル等ノ如キハ其幾分給助ノ次第及ヒ石數金員ニ至ル迄詳悉記載申出ヘシ
- 第四條 同上ニヨリ十三年以上七十年以下ノ者疾病中救助米賜ルト雖全快ノ期ヲ篤ト調査シ荏苒支給等無之様注意イタスヘシ
- 第五條 同上ニヨリ疾病或ハ病者トシテ記載申請ノ向モ有之候得共爾後左ノ雛形ニ準シ詳悉記載別紙ニ製シ具申イタスヘシ
- 但規則脇書ニコレアル餘ノ家人アラハ本文雛形ニ記載スル本人名前ノ左傍ニ委詳書記スヘシ
- 第六條 同上ニヨリ五十日以内給與シ申請ノ節 何月幾日ヨリ何日分ト記載伺出ヘシ

第七條 同上ニヨリ伺濟ノ上其石割ヲ以給與セシムルハ勿論ナレト譬ハ一ケ年一石八斗ヲ目途ニ立テ其以內ヲ以足レリトスルカ如クハ其數量實地至當ニ斟酌シ適宜ノ處分不苦候間其旨精細具狀イタスヘシ

第八條 老幼癡疾々病等ニテ獨身ニ非スト雖餘ノ家人七十一年以上十五年以上下タレハ本人ノミヘ獨身ニ準シ給與スヘキ成規ノ處若シ餘ノ家人癡疾疾病老幼ニテ事實難捨置情故アラハ其者共ヘモ救助セシムルコトアルヘキニ付其旨趣ヲ以具狀スヘシ併シ右様ノ場合ニオイテ一家數人ノ救助ニ及フトキハ各自給與ヲ致サストモ其適度ニ斟酌シ可成丈減省ヲ見込ミ伺出可シ

用紙美濃紙  
恤救名簿

某

縣府

(括弧内ハ朱書)

某縣下何大區何小區

某國某郡某町

農或ハ誰亡長男女歟

工(又ハ元何藩士族亡其父母兄弟姉妹ノ類)

商(當時平民歟其外厄介歟)

一 癡疾

誰

何歳

但生來癡疾ニテ其名稱及ヒ年月且親戚或ハ市村内隣保等ノ情誼ヨリ助カテ受ケン處右不行届ノ次第又ハ譬ハ破覽盲目ノ類ニテ手業ヲ以生計營ミ來リシカ終ニ爲ス能ハス去リ迎他ニ保養スヘキ者無之云々等其事實詳悉記載スヘシ何月何日ヨリ何ノタメ同斷事故同斷

一 疾病

誰

何歳

但何年何月ヨリ何症ニ罹リ前同斷

同斷

一 幼弱

誰

何歳

但何年何月ヨリ父母親戚等ニ離別ノ事故等前同斷

同斷

一 老衰

誰

何歳

但前ニ倣フ  
右ノ通有之候也

何年何月日

縣長官名印

○三子出產困窮者へ養育料給與方 明治六年三月  
第七十九號布告

三子出產ノ者其家困窮ニテ養行届兼候向ハ以來養育料トシテ一時金五圓給與致シ候間地方官ニ於テ速ニ施行致シ追テ請取方大藏省へ可申出候事

○棄兒養育米下賜方 明治四年六月  
布告

從來棄兒救育ノ儀所預ノ分ハ養育米被下貰受人有之分ハ不被下候處自今預リ貰受ニ不拘棄兒當歳ヨリ十五歳迄年々米七斗宛被下候間實意養育可致事

○棄兒養育米下賜年限及年齡見定方 明治六年四月  
第百卅八號布告

棄兒養育米ノ儀辛未六月中相達候通十五歳迄年々米七斗宛下渡候處自今滿十三年ヲ限リ被下候條生年月日見定ノ儀ハ其所戶長等立合身体骨格等篤ト検査シ本年第三十六號布告ニ照シ年齡相定候様可致事

○棄兒養育米代金引直シ下渡 明治七年九月内務大藏  
兩省乙第五十六號達

棄兒養育米ノ儀正米無之節ハ貢納石代直段ヲ以テ代金渡可致旨壬申年大藏省第四十五號ヲ以テ相達候處自今正米無之節ハ其他前月下米平均相場ヲ以テ渡方可取計此旨相達候事

但本年十月一日ヨリ渡方本條ノ通可相心得事

第十三類 府縣 郡市町村 市區改正

○府縣

○府縣會規則 明治十三年四月 第十五號布告

明治十一年七月第十八号布告府縣會規則左ノ通改正候條此旨布告候事

第一章 總則

第一條 府縣會ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其徵收方法ヲ議定ス

第二條 府縣會ハ通常會ト臨時會トノ二類ニ別ツ其定期ニ於テ開ク者ヲ通常會トナシ臨時ニ開ク者ヲ臨時會トナス

第三條 通常會臨時會ヲ論セス會議ノ議案ハ總テ府知事縣令ヨリ之ヲ發ス

第四條 臨時會ハ其特ニ會議ヲ要スル事件ニ限リ其他ノ事件ヲ議スルヲ得

第五條 府縣會ノ議決ハ府知事縣令認可ノ上之ヲ施行スヘキ者トス若シ府知事縣令其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルキハ其事由ヲ內務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

前項ノ場合ニ於テ府縣知事縣令ハ時宜ニ依リ之ヲ再議ニ付スルヲ得再議ノ後猶其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルキハ內務卿ノ指揮ヲ請フヘシ

項ニ同シ(明治十四年第四號布告ヲ以テ本項追加)

第六條 府縣會ハ毎年通常會議ノ初メニ於テ地方稅ニ係ル前年度ノ出納決算ノ報告書ヲ受ケ府知事縣令ニ說明ヲ求ムルヲ得若シ異見アルハ議長ノ名ヲ以テ直チニ內務大藏兩卿ニ上申スルヲ得

出納決算ノ報告書ニ府縣會ヨリ說明ヲ求ムルトキハ府知事縣令若クハ其代理人之ヲ説明スヘシ(明治十五年第六十八號布告ヲ以テ本項追加)

第七條 通常會期中議員ノ内二人以上ノ發議ヲ其府縣内ノ利害ニ關スル事件ニ付キ建議ヲ爲サントスル者アラハ先ツ議會ノ許可ヲ得テ之ヲ會議ニ付シ可決スルキハ其會ノ所見トシ議長ノ名ヲ以テ直チニ內務卿ニ建議シ又ハ府知事縣令ニ建議スルヲ得

但シ臨時會ニ於テ其會議ヲ要シタル事件ニ限り建議スルヲ得

第八條 府縣會ハ府知事縣令ヨリ其府縣内ニ施行スヘキ事件ニ付キ會議ノ意見ヲ問フアルトキハ之ヲ議ス

第九條 府縣會ハ議事ノ細則ヲ議定シ府知事縣令ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルヲ得

府縣會ハ議員ノ内招集ニ應セス又ハ事故ヲ告ケスシテ參會セサル者ヲ審查シ其退職者タルヲ決スルヲ得

府知事縣令ト府縣會トノ間ニ於テ法律ノ見解ヲ異ニシ又ハ權限ヲ爭フ

アルキハ双方ヨリ其事由ヲ具狀シ政府ノ裁定ヲ請フヘシ此場合ニ於テ府知事縣令ハ其議事若クハ會議ヲ中止スルヲ得(明治十四年第四號布告ヲ以テ本項追加)

第二章 選舉

第十條 府縣會ノ議員ハ郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニ五人以下ヲ撰ブ(明治十五年第十號布告ヲ以テ本項追加)

每郡區議員定數ノ外補缺員トシテ十名以下ヲ增撰スルヲ得

第十一條 議長副議長ハ議員中ヨリ公撰シ之ヲ府知事縣令ニ報告シ府知事縣令ハ之ヲ內務卿ニ報告スヘシ

議長副議長及ヒ議員ハ俸給ナシ但シ會期中滞在日當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ會議ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條 書記ハ議長之ヲ選ヒ庶務ヲ整理セシム其俸給ハ會費ノ中ヨリ之ヲ給ス

第十三條 府縣會ノ議員タルヲ得ヘキ者ハ滿廿五歲以上ノ男子ニシテ其府縣内ニ本籍ヲ定メ滿三年以上住居シ其府縣内ニ於テ地租拾圓以上ヲ納ムル者ニ限ル但左ノ各款ニ觸ル者ハ議員タルヲ得ス

第一款 風癩白痴ノ者

第二款 舊法ニ依リ一年以上懲役及ヒ國事犯禁獄ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經サル者(明治十五年第十號布告ヲ以テ本項改正)

新法ニ依リ公權ヲ剝奪及ヒ停止セラレタル者又ハ一年以上輕重禁錮ノ刑ニ處セラレ主刑滿期後五年ヲ經サル者(全上)

第三款 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四款 官吏教導職及ヒ陸海軍諸卒現役ノ者(全上)

第五款 府縣會ニ於テ退職者トセラレタル後四年ヲ經サル者

第十四條 議員ヲ撰擧スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ其郡區内ニ本籍ヲ定メ其府縣内ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムルモノニ限ルヘシ

但前條ノ第一款第二款第三款第五款ニ觸ル、者及陸海軍軍人現役ノ者ハ撰擧人タルヲ得ス(明治十五年第十號布告ヲ以テ但書改正)

第十五條 (明治二十二年法律第六號ヲ以テ本條廢止)

第十六條 撰擧ノ投票ハ豫定ノ日ニ郡區廳ニ於テ之ヲ爲シ郡區長之ヲ調査シ撰擧會中ノ取締ヲ爲スヘシ但シ便宜ニ因リ郡區廳外ニ於テ撰擧會ヲ開クヲ得

第十七條 (全上)

第十八條 (全上)

第十九條 (全上)

第二十條 一人ニテ數郡區ノ選ニ當ルキハ其何レノ郡區ニ屬スヘキハ當人ノ好ニ任スヘシ

第二十一條 議員ノ任期ハ四年トシ二年毎ニ全數ノ半ヲ改選ス第一回二年

期ノ改選ヲ爲スハ抽籤法ヲ以テ其退任ノ人ヲ定ム

第二十二條 議長副議長ノ任期ハ二年トシ議員ノ改選毎ニ之ヲ公選スヘシ

第二十三條 前二條ノ場合ニ於テハ前任ノ者ヲ再選スルコトヲ得

第二十四條 議員中第十三條ニ掲クル諸款ノ場合ニ遭遇スルカ其府縣外ニ轉籍スルカ其他總テ缺員アルキハ更ニ之ニ代ル者ヲ選舉ス(明治十五年第十號布告ヲ以テ轉任ヲ轉籍ト改ム)

但シ補缺員アルキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ取り尙缺員アルトキハ本條末文ノ手續ニ依ル(全上布告ヲ以テ但書追加)

第三章 議則

第二十五條 議員半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第二十六條 會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第二十七條 府知事縣令若クハ其代理人ハ會議ニ於テ議案ノ旨趣ヲ辨明スルヲ得但決議ノ數ニ入ルヲ得ス

第二十八條 會議ハ傍聽ヲ許ス但府知事縣令ノ要メニ依リ又ハ議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルヲ得

第二十九條 議員ハ會議ニ方リ充分討論ノ權ヲ有ス然レモ人身上ニ付テ衰



貶毀譽ニ涉ルヲ得ス

第三十條 議場ヲ整理スルハ議長ノ職掌トス若シ規則ニ背キ議長之ヲ制止シテ其命ニ順ハサル者アルハ議長ハ之ヲ議場外ニ退去セシムルヲ得其強暴ニ涉ル者ハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルヲ得

第四章 開閉

第三十一條 府縣會ハ每年一度十一月ニ於テ之ヲ開ク其開閉ハ府知事縣令ヨリ之ヲ命ス會期ハ三十日以内トス但區郡部會ヲ開ク地方ニ於テハ七日以内延期スルヲ得(明治十五年第六十八號布告及同十一年第二十七號布告ヲ以テ改正)

第三十二條 通常會期ノ外會議ニ付スヘキ事件アルハ府知事縣令ハ臨時會ヲ開クコトヲ得其會期ハ七日以内トス但該會ヲ要スル事由ヲ直ニ內務卿ニ報告スヘシ(明治十五年第六十八號布告ヲ以テ改正)

第三十三條 會議ノ論說國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルハ府知事縣令ハ會議ヲ中止セシメ內務卿ニ具狀シテ其指揮ヲ請フヘシ

府縣會ニ於テ若シ法律上議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會期內ニ於テ議案ヲ議決シ終ラサルトキハ府知事縣令ハ更ニ其議定ヲ要セス內務卿ニ具狀シ其認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得(明治十五年第六十八號布告ヲ以テ改正)議員招集ニ應セサル者半數ヲ過キ議會ヲ開クヲ得サルコトアルハ府知事

縣令ハ其事由ヲ內務卿ニ具狀シ指揮ヲ請フヘシ(明治十四年第四號布告ヲ以テ本項追加)

第一項ノ場合ニ於テ內務卿ハ府縣會ヲ停止スルコトヲ得而シテ更ニ開會ヲ命スル迄ノ間ハ府知事縣令ニ於テ地方稅ノ經費豫算及徵收方法ヲ定メ內務卿ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得(明治十五年第六十八號布告ヲ以テ本項追加)

第三十四條 會議中國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルハ內務卿ハ何レノ時ヲ問ハス議員ノ解散ヲ命スルコトヲ得(明治十四年第四號布告ヲ以テ本條中附會云々七字ヲ削ル)

前項ノ場合ニ於テ前議員ノ未タ議定セサル議案アルハ後任議員ヲシテ之ヲ議定セシム(全上布告ヲ以テ本項追加)

第三十五條 內務卿ヨリ解散ヲ命シタルハ其解散ヲ命シタル日ヨリ九十日以内ニ更ニ議員ヲ改選スヘシ

第五章 常置委員(明治十三年第四十九號布告ヲ以テ本項追加)

第三十六條 府縣會ハ其議員中五人以上七人以下ノ常置委員ヲ選任スヘシ常置委員定數ノ外數名ヲ增撰シ欲員アルハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ補充スルヲ得(明治十五年第十號布告ヲ以テ本項追加)

區部會郡部會ヲ開設シタル府縣ニ在テハ區郡各部ニ之ヲ選任スヘシ(全上)

第三十七條 常置委員ハ府縣會ノ議定ニ依リ事業ヲ執行スルノ方法順序及

豫備費ノ支出ニ付府知事縣令ヨリ諮問アルハ其意見ヲ述フ(明治十五年ヲ以テ本項追加)

常置委員ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事業ニシテ臨時急施ヲ要スル場合ニ於テハ其經費ノ豫算及徵收方法ヲ議決シ退テ府縣會ニ報告スルヲ得(全上)

第三十八條 常置委員ハ通常府縣會議ノ初メ委員會議ニ於テ議決シタル事件ノ要領ヲ報告シ且ツ通常會ト臨時會トヲ論セス府知事縣令ヨリ發スヘキ議案ヲ前以テ請取り會議ニ向テ其意見ヲ報告スヘシ

第三十九條 常置委員會議所ハ府縣廳内ニ置キ定日ニ會議スヘシ  
第四十條 常置委員ノ諮問會議ハ別ニ議案書ヲ用ユルヲ要セス(明治十五年ヲ以テ常置委員ノ下諮問ノ二字ヲ加フ)

第四十一條 諮問會ハ府知事縣令ヲ以テ議長トナシ其他ノ會議ハ委員中ヨリ之ヲ選舉スヘシ(全上布告ヲ以テ改正)  
第四十二條 常置委員ハ半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條 常置委員會議ノ議事ハ書記ヲシテ書記セシムヘシ  
第四十四條 府知事縣令ハ主務ノ僚屬ヲ委員會議ニ出シ其會議ニ係ル事件ニ付辨明ヲ爲サシムルヲ得

第四十五條 常置委員會議ハ傍聽ヲ許サス  
第四十六條 常置委員ノ任期ハ二ケ年トシ議員ノ改選毎ニ之ヲ改選ス但期限ニ至リ再選スルヲ得(明治十五年第十號布告ヲ以テ本條中ニケ年トシノ下議員云々ノ十三字ヲ加フ)

第四十七條 常置委員會議所ノ書記ハ府縣ノ屬官中ヨリ府知事縣令之ヲ選任ス(全上布告ヲ以テ議長ヲ府知事縣令ト改ム)

第四十八條 常置委員ハ三十圓以上八十圓以下ノ月手當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ府縣會ノ議決ヲ以テ定ム  
第四十九條 常置委員ノ月手當旅費其他委員會議所ノ費用ハ地方稅ヨリ給ス

○辭選者補欠及假議長公選ノ件明治十三年九月太政官番外達

府縣會規則之義ニ付左ノ二件爲心得相達候事

- 一 議員選舉ノ際郡區相當人員ノ外辭選者補欠ノタメ別ニ數名(五名以下)ヲ副選センメ置クモ妨ケナシ(府縣會規則第十條參看)
- 一 議長副議長共欠席スルハ議員中ニ於テ臨時假議長ヲ公選シ其日ノ會議ヲ開クモ妨ケナシ

○府縣會規則心得條件明治十三年十二月內務省乙第四十八号達

府 縣 沖 繩 縣 ヲ 除 ク

本年第四十九號ヲ以テ府縣會規則追加公布相成候ニ付左ノ條件爲心得相違候事

一 常置委員ハ來ル十四年通常會開會前ニ於テ撰任スヘシ(明治十三年內務省乙部令第五十三號達ヲ以テ追加)

一 十三年度中常置委員ノ月手當又往復旅費ハ委員ヲ撰擧セシムル臨時會ニ於テ議定セシムヘシ(全上)

一 郡區經濟ヲ異ニスル府縣ニ在テハ定員内ニ於テ其郡區撰出ノ人員ヲ定ムルヲ得

一 常置委員補欠ノ爲メ相當ノ豫備員ヲ撰ヒ置クモ妨ケナシ

一 第四十一條ニ據リ議長ハ府知事縣令之ヲ務ムト雖モ本務ノ都合ニ依リ書記官之レカ代理ヲ爲スヲ得

一 第四十六條ノ通委員ノ任期ハ二年タルヘシト雖モ若シ議員本分ノ任期ヲ終リタルモノハ其本分ノ任期ト共ニ委員ノ任期モ終リタルモノトス  
一 常置委員會議ノ細則ハ該會ニ於テ議決シ府知事縣令認可ノ上施行スヘキモノトス

○府縣會ニテ議定スヘキ事件區町村會ニ付スル

件明治十四年二月第六號布告

府縣會ハ其議定スヘキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利土功會ノ議決ニ付スルヲ得ヘシ此旨布告候事

○議員改選就職交替手續明治十四年七月內務省甲第四號達

府縣會規則第廿一條ニ據リ議員改選之上其就職交替ノ手續ハ豫メ府縣會ニ於テ議定セシメ府知事縣令認可ノ上施行可致此旨布達候事  
但常置委員之儀モ本文同様可取計事

○府縣會議員聯合集會往復通信ヲ許サス明治十五年十二月

第七拾號布告

府縣會議員會議ニ關スル事項ヲ以テ他ノ府縣會議員ト聯合集會シ又ハ往復通信スルヲ許サス

其集會スル者何等ノ名義ヲ以テスルモ府知事縣令ニ於テ此禁令ヲ犯ス者ト認ムルハ直ニ解散ヲ命スヘシ

前項ノ場合ニ於テ解散ノ命ニ從ハサルモノハ集會條例第十三條ニ依テ處分ス

右奉 勅旨布告候事

○開會中議員建議書携帶上京ヲ許サス明治十五年十二月第十一號達

府 縣沖繩縣ヲ除ク

府縣會規則第七條ニ依リ内務卿へ建議スルノ場合ニ於テ開會中議員自ラ其建議書ヲ携帶上京等ノ義ハ不相成筋ニ候條此旨相達候事  
但本文ノ趣府縣會へ相達シ置クヘシ

○府縣會審理事務手續明治十四年十月九十一號達

官省院使廳府縣

今般參事院ヲ被置候ニ付本年<sup>ニ</sup>第六號達審理局ヲ被廢事務手續左ノ通被定候條此旨相達候事

但本文ノ儀ハ府縣會ニ達シ置クヘシ  
第一條 本年第四號布告府縣會規則第九條追加ニ依リ府知事縣令及ヒ府縣會ヨリ裁定ヲ請フノ具狀書ハ府知事縣令ニ於テ之ヲ取纏メ法制局長官ニ當テ差出スヘシ

第二條 裁定ヲ要スル事件具狀書ヲ以テ悉サ、ルコトアルトキハ府知事縣令若クハ其代理人及府縣會總代自ラ法制局ニ出頭シテ之ヲ弁明シ又ハ法制局ヨリ之ヲ召喚シテ尋問スルコトアルヘシ

但府縣會總代ハ其議員タル者ニ限ル  
第三條 裁定書ハ其議決ノ理由ヲ詳記シ審理委員週署シテ之ヲ發付スヘシ

(參照)明治十八年十二月第七十八號達

省院廳府縣

今般參事院ヲ廢シ内閣ニ法制局ヲ置キ候ニ付明治十四年<sup>十</sup>第九十一號達第一條中參事院議長ヲ法制局長官ト改メ第二條中參事院ヲ法制局ト改ム但本文ノ儀ハ府縣會へ相達スヘシ

○府縣會議員撰舉規則明治二十二年二月

法律第六號

朕府縣會議員選舉規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣會議員選舉規則

第一條 戶長ハ毎年九月十五日ヲ期トシ其役場管内ノ選舉人名簿ヲ調査シ其副本ヲ十月一日迄ニ郡長ニ差出スヘシ

選舉人名原簿ニハ選舉人ノ氏名住所生年月納ムル所ノ地租ノ總額並ニ其納稅地ヲ記載スヘシ

第二條 郡長ハ戶長ヨリ差出ス所ノ原簿ヲ調査シ毎年十月十五日ヲ期トシ其役所管内ノ選舉人名簿ヲ調製スヘシ

第三條 區長ハ毎年九月十五日ヲ期トシ其役所管内ノ選舉人名原簿ヲ調製シ十月十五日ヲ期トシ選舉人名簿ヲ調製スヘシ

選舉人名原簿ニ記載スヘキ事項ハ第一條第二項ニ同シ  
第四條 府縣會規則第十三條ノ年齡及ヒ年限ヲ算スルハ選舉人名簿調製ノ

期日ヲ以テ限界ト爲シ其地租納額ヲ算スルハ原簿調製ノ期日ヨリ前一年以上之ヲ納メ猶引續キ納ムル者ニ限ルヘシ但家督ニ依リ財産ヲ相續シタル者ハ前財産主ノ納稅額ヲ以テ其者ノ納稅額ニ算入スヘシ

第五條 選舉人其住居スル區町村ノ外ニ於テ地租ヲ納ムルトキハ其納稅地區戶長ノ證狀ヲ添ヘ選舉人名原簿調製ノ期日迄ニ其住居地ヲ區戶長ニ届出ヘシ

前項ノ届出ヲ爲サル納稅額ハ選舉及ヒ被選舉ノ資格ニ算入スルコトヲ得ス

第六條 郡區長ハ十月二十日ヨリ十五日間其役所管内ノ選舉人名簿及ヒ選舉人名簿ノ寫ヲ其郡區役所ニ於テ縦覽セシムヘシ但關係者ノ請求アルトキハ戶長役場ニ於テモ其調製シタル原簿ノ寫ヲ示スヘシ

第七條 選舉資格アル者選舉人名簿ニ於テ脱漏又ハ誤載アルコトヲ發見シタルトキハ其縦覽期限内ニ之ヲ郡區長ニ申立ヘシ

第八條 郡區長ニ於テ脱漏又ハ誤載ノ申立ヲ受ケタルトキハ十月以内ニ之ヲ審査判定シ其申立正當ナルトキハ直ニ其人名ヲ記入又ハ削除シ其由ヲ管内ニ告示スヘシ但郡ニ在テハ仍ホ當人住居地ノ戶長ニ通知スヘシ

第九條 前條審査ノ爲メ必要アル場合ニ於テハ申立人又ハ當人ヲ召喚審問スルコトヲ得

第十條 申立人又ハ當人ニ於テ郡區長ノ判定ニ不服アルトキハ判定ノ日ヨリ七日以内ニ始審裁判所ニ出訴スルコトヲ得但其判定ハ出訴ノ爲メ停止セサルモノトス

第十一條 始審裁判所ニ於テ前條ノ訴訟ヲ受取リタルトキハ他ノ訴訟ノ順序ニ拘ハラズ速ニ其裁判ヲ爲スヘシ

第十二條 前條始審裁判所ノ裁判ハ上告スルコトヲ得ト雖モ控訴スルコトヲ許サス但其裁判ハ上告ノ爲メ停止セサルモノトス

第十三條 選舉人名簿ハ十一月十五日ヲ以テ確定期限トシ次年ノ改正期日迄之ヲ据置クモノトス但裁判言渡ニ依リ訂正スヘキモノハ郡區長ニ於テ其言渡ヲ受ケタルトキヨリ二十四時間以内ニ之ヲ訂正シ其由ヲ管内ニ告示スヘシ但郡ニ在テハ仍ホ當人住居地ノ戶長ニ通知スヘシ

前項ノ外次年ノ改正期日前ト雖モ選舉ヲ行フ前ニ於テ選舉權ヲ失ヒ若クハ選舉權ヲ有セザリシコトヲ發見シタル場合ニ於テハ郡區長ハ其人名ヲ削除スヘシ

每年確定ノ選舉人名簿ハ臨時ノ補闕選舉ニモ之ヲ使用スルモノトス

第十四條 選舉投票ハ通常二月若クハ三月ニ於テ之ヲ行フヘシ但解散及ヒ補闕選舉ノ場合ハ此限ニ在ラス

前項ノ時期ハ府縣ノ情況ニ依リ府縣知事ニ於テ府縣會ノ議決ヲ取り内務

大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ變更スルコトヲ得

第十五條 議員ヲ選舉スヘキトキハ少クトモ一箇月前ニ府縣知事ヨリ其月日選舉開會並ニ投票函閉鎖ノ時刻選舉ヲ行フヘキ郡區ノ名及ヒ選舉スヘキ議員ノ數ヲ記シ之ヲ管内ニ告示スヘシ若シ正議員ノ外補關員ノ増選ヲ要スルトキハ各別ニ其數ヲ記スヘシ

選舉開會ヨリ投票函閉鎖迄ノ時間ハ四時間以上十時間以内ナルヘシ

第十六條 前條ノ告示アリタルトキハ郡區長ハ前條各事項並ニ選舉開會ノ場所ヲ管内ニ告示スヘシ

第十七條 郡區長ハ其管内ノ選舉人中ヨリ立會人五名ヲ定メ遅クトモ選舉ノ期日ヨリ五日以前ニ之ヲ本人ニ通知シ選舉ノ當日選舉會場ニ參會セシムヘシ

選舉分會ヲ設ケタル場合ニ於テハ本會分會トモ各其會場所屬ノ選舉人ニ就キ前項ニ項リ立會人ヲ定ムヘシ

立會人ハ正當ノ事故ナクシテ其職ヲ辭スルコトヲ得ス立會人若シ選舉開會ノ時刻ニ至リ出頭セザルトキハ參會ノ選舉人中最多額ノ地租ヲ納ムル者ヲ以テ假ニ其關ヲ補フヘシ

第十八條 郡區長ハ選舉會場トナリ選舉會場ヲ管理スヘシ郡區長事故アルトキハ代理書記ヲ以テ之ニ充ツヘシ

選舉會書記ハ郡區長ニ於テ郡區書記中ヨリ之ヲ命スヘシ

第十九條 選舉人ハ選舉開會ノ時刻ヨリ投票函閉鎖ノ時刻ニ至ル迄何時ヲリトモ到着ノ順序ニ從ヒ投票スルコトヲ得

第二十條 選舉會場ニハ錠ヲ付シタル投票函及ヒ選舉錄並ニ筆墨ヲ備ヘ置クヘシ

投票函ハ投票ニ先チ參集シタル選舉人ノ面前ニ於テ之ヲ開キ其虛空ナルコトヲ示スヘシ

第二十一條 投票用紙ハ府縣知事ノ定ムル所ニ依リ各郡區ニ於テ一定ノ式ヲ用ニ投票ノ當日選舉會場ニ備ヘ置キ選舉會長又ハ書記ヨリ之ヲ各選舉人ニ交付スヘシ

用紙ハ正議員ノ外補關員ノ増選ヲ要スル場合ニ於テハ之ヲ甲乙二種ニ分チ甲種ハ正議員ノ爲メノ用紙ト爲シ乙種ハ補關員ノ爲メノ用紙ト爲スヘシ

第二十二條 選舉人ハ自ラ投票ヲ行フヘシ代人ニ託スルコトヲ得ス

第二十三條 選舉人ハ選舉會場ニ於テ投票用紙ニ被選舉人並ニ自己ノ氏名ヲ記シ捺印スヘシ但氏名ノ外住所若クハ位階勳等其他敬稱ノ類ヲ記スルモ妨ナシ

第二十四條 選舉人投票ヲ爲サントスルトキハ選舉會長ハ其住所氏名ヲ選

舉人名簿ニ照シ名簿ニ消印ヲ捺シ選舉人ナシテ自ラ之ヲ投票函ニ投入セシムヘシ

第二十五條 選舉人ニシテ文字ヲ書スルコト能ハサル由チ申立ルトキハ選舉會長ハ書記ヲシテ代書セシメ之ヲ本人ニ開セ並ニ立會人ニ示シタル後捺印投票セシムヘシ

第二十六條 選舉ニ關スル吏員及ヒ選舉人ノ外何人タリトモ選舉會場ニ入ルコトヲ得ス但會場臨視ノ職權アル官吏ハ此限ニ在ラス

第二十七條 選舉人名簿ニ記載セラレタル者ノ外投票スルコトヲ得ス但記載セラルヘキ裁判言渡書ヲ所持シテ參會スル者ハ此限ニ在ラス

第二十八條 選舉人ハ會場ニ於テ演說討論ヲ爲シ若クハ喧噪ニ涉リ又ハ互ニ投票ヲ勸誘スルコトヲ得ス

第二十九條 選舉會場ニ於テ秩序ヲ紊ル者アルトキハ選舉會長ハ之ヲ警戒シ其命ニ從ハサルトキハ之ヲ會場外ニ退出セシムヘシ但其投票ヲ爲サシムル爲メ再ヒ之ヲ呼入ルハコトヲ得

選舉會長ハ會場取締ノ爲メ必要ト認ムルトキハ警察官ノ助力ヲ求ムルコトヲ得

第三十條 選舉權ナク又ハ他人ノ氏名ヲ詐稱シテ投票セントスル者アルトキハ選舉會長ハ其投票ヲ取上クヘシ

第三十一條 投票函閉鎖ノ時刻ニ至ルトキハ選舉會長ハ其由チ宣告シ書記ヲシテ一時選舉會場ノ入口ヲ鎖サシメ參會者ニ問フニ未タ投票セザリシ者ナキヤヲ以テシ若シ之アルニ於テハ直ニ投票セシメタル後投票函ヲ閉鎖スヘシ

第三十二條 選舉會場ニハ點數簿二冊ヲ備ヘ書記二人チシテ各一冊ヲ擔任セシムヘシ

第三十三條 投票函閉鎖後十分時間ヲ經過スレハ選舉會長ハ立會人ノ面前ニ於テ投票函ヲ開キ逐次投票ヲ取出シ披封點檢シテ之ヲ書記ニ付シ選舉人被選舉人ノ氏名ヲ朗讀セシメ點數簿擔任ノ書記チシテ被選舉人ノ得點ヲ點數簿ニ記入セシムヘシ

前項ノ點檢中若シ無効ノ投票ヲ發見シタルトキハ之ニ抹線ヲ加ヘ一部分無効ノモノハ其部分ニ抹線ヲ加フヘシ

第三十四條 選舉人ハ投票點檢ノ際之ヲ參觀スルコトヲ得

第三十五條 投票點數ノ記入ヲ終リタルトキハ選舉會長ハ書記チシテ各被選舉人得點ノ合計ヲ點數簿ニ記入シテ之ヲ朗讀セシムヘシ

第三十六條 點數記入並ニ計算其他書記ノ事務ハ總テ選舉會長並ニ立會人ノ面前ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三十七條 點數ノ合計ヲ記入シ終リタルトキハ選舉會長ハ立會人ノ面前

ニ於テ多數ヲ得タル者ヨリ順次ニ其被選舉權ノ有無ヲ査定シ同數ハ年長ヲ取り同年ハ抽籤ヲ用非其當選ヲ定ムヘシ但即時ニ其當選ニ必要ナル事實ヲ確知シ得サルトキハ調査ニ必要ナル時日ノ間其査定ヲ延ハスコトヲ得

分會ヲ設ケタル場合ニ於テハ第五十條ニ依リ當選ヲ定ムルモノトス

當選タルヘキ多數ヲ得タル者ノ被選舉權ヲ有セサルコトヲ發見シタルトキハ順次其次者ヲ以テ當選ト爲スヘシ此場合ニ於テハ郡區長ハ當選者ノ氏名ト共ニ其事由ヲ告示スヘシ

當選タルヘキ多數ヲ得タル被選舉人他郡區ノ人ニシテ直ニ其當選ヲ定メ難キトキハ第四十一條ニ依リ之ヲ定ムヘシ

第三十八條 點檢濟ノ投票ハ之ヲ取纏メ封緘ノ上選舉會長立會人並ニ書記之ニ捺印スヘシ

前項ノ投票ハ封印ノ儘附屬書類ト共ニ一年間郡區役所ニ保存スヘシ若シ選舉ニ關シ訟訴又ハ告訴發アルトキハ一年ヲ過クルモ其裁判確定ニ至ルマテ之ヲ保存スヘシ

第三十九條 左ノ事項ハ之ヲ選舉錄中ニ記入スヘシ

- 一 選舉開會ノ月日並ニ時刻
- 二 選舉會長及ヒ書記ノ氏名

- 三 立會人ノ住所氏名
- 四 第二十七條但書ニ依リ投票セシメタルトキハ其顛末
- 五 第三十條ノ處分ヲ爲シタルトキハ其顛末
- 六 投票函閉鎖ノ時刻
- 七 各被選舉人ノ得點數
- 八 當選人ノ住所氏名若シ直ニ當選ヲ定メ難キトキハ其事由
- 九 選舉閉會ノ時刻
- 十 右ノ外選舉會長ニ於テ緊要ト認ムル事項

當選ノ査定ヲ延シタルトキハ其結果ヲ追記スヘシ

第四十條 選舉錄ニハ選舉會長立會人並ニ書記之ニ署名捺印スヘシ

第四十一條 當選タルヘキ多數ヲ得タル被選舉人他郡區ノ人ナルトキハ郡區長ハ其本籍地ノ郡區長ニ照會シ被選舉權ヲ有スルヤ否ヤノ證明ヲ求ムヘシ若シ其權ヲ有セサルトキハ第三十七條第三項ノ例ニ依ル

第四十二條 左ノ投票ハ無効トス

- 一 選舉人名簿ニ記載ナキ者ノ投票但裁判言渡書ヲ所持シタルニ依リ投票シタル者ハ此限ニ在ラス
- 二 成規ノ用紙ヲ用非サルモノ
- 三 選舉人又ハ被選舉人ノ氏名ヲ記載セサルモノ



四 選舉人ノ氏名ノ讀ミ難キモノ又ハ何人タルヲ知ルヘカラサルモノ  
 五 選舉人被選舉人ノ住所氏名ノ外餘事ヲ記入スルモノ但位階勳等其他  
 敬稱ノ類ヲ記入スルモノハ餘事ト見做スノ限ニ在ラス  
 六 被選舉人ノ氏名ノ讀ミ難キモノ又ハ何人タルヲ知ルヘカラサルモ  
 ノハ列記ノ被選舉人ニ付テハ仍ホ其効アリトス  
 七 被選舉權ナキ者ヲ記載シタルモノハ列記ノ被選舉人ニ付テハ仍ホ其  
 効アリトス

第四十三條 投票ニ記載ノ被選舉人其選舉スヘキ定數ニ足ラサルモ之ヲ無  
 効トス又定數ニ過クルトキハ第六條第七ニ觸ルモノアルト否トヲ問ハ  
 ス末尾ヨリ其過數ヲ順次ニ棄却スヘシ  
 一人ノ氏名ヲ複記シタルモノハ一人トシテ計算スヘシ

第四十四條 選舉人又ハ被選舉人ノ住所氏名ニ誤字脱字アリ又ハ假名字ヲ  
 用ユルモ其何人ノ何人ヲ選舉シタルコト明瞭ナルトキハ其投票ヲ有効ト  
 スヘシ

第四十五條 投票効力ノ有無ニ付疑義アルトキハ立會人ノ意見ヲ聞キ選舉  
 會長之ヲ決定スヘシ其決定ニ對シテハ選舉會場ニ於テ異議ヲ申立ルコト  
 ヲ得ス

第四十六條 郡區ノ區域廣濶ニ過クルカ又ハ郡區内島嶼ノ地アリテ選舉人

ノ參會ニ不便ナル爲メ己ムヲ得サル場合ニ於テハ郡區長ハ府縣知事ノ指  
 揮ニヨリ又ハ府縣知事ノ許可ヲ得テ選舉分會ヲ設クルコトヲ得

分會ノ爲メ特ニ選舉人名簿ヲ調製スルヲ要セスト雖モ選舉人名簿中ニ各  
 選舉人所屬ノ會場ヲ區別シ豫メ分會場所屬ノ區域並ニ會場ヲ管内ニ告示  
 スヘシ

第四十七條 分會ハ本會ト同日時ニ之ヲ開キ投票時間モ亦本會ト同一タル  
 一ニシ其他選舉ノ手續會場ノ取締選舉錄ノ記載等ハ總テ本會ニ準スヘシ但  
 島嶼其他遠隔ノ地ニ限リ府縣知事ニ於テ適宜其投票ノ期ヲ異ニシテ選舉  
 本會ノ投票期日迄ニ其投票函ヲ送致セシムルコトヲ得

第四十八條 分會選舉會長ハ上席郡區書記ヲ以テ之ニ充ツヘシ  
 分會書記ハ郡區長ニ於テ其郡區書記又ハ其地ノ戶長又ハ戶長役場吏員中  
 ヲリ之ヲ命スヘシ

第四十九條 分會ニ於テ投票函ヲ閉鎖シタルトキハ之ニ封印シ選舉會長及  
 ヒ書記ノ中少クトモ一名付添直ニ本會場ニ送付スヘシ若シ立會人又ハ他  
 ノ選舉人中同行ヲ望ム者アルトキハ之ヲ許スヘシ

第五十條 分會ヲ設ケタルトキハ本會場ニ於テハ投票函閉鎖ノ後分會投票  
 函ノ到着ヲ待テ第三十三條ノ手續ヲ爲シ合算ノ上總數ヲ以テ當選ヲ定ム  
 一ニシ

第五十一條 當選者ノ定マリタルトキハ郡區長ハ直ニ其旨ヲ當選者ニ通知スヘシ

當選者當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ五日以内ニ當選承諾ノ届出ヲ爲スヘシ若シ當選ノ通知ヲ爲シタル日ヨリ十日以内ニ承諾ノ届出ヲ爲サ、ルトキハ當選ヲ辭シタルモノト見做スヘシ

當選ヲ辭シタル者アルトキハ郡區長ハ次點者ヲ以テ當選者トナスヘシ

第五十二條 選舉ノ結果ハ郡區長ヨリ之ヲ府縣知事ニ報告スヘシ

第五十三條 當選者ノ住所氏名ハ府縣知事ニ於テ之ヲ管内ニ告示スヘシ

第五十四條 府縣會規則第十條第二項ニ依リ補闕員ヲ增選スルトキハ其選舉ハ正議員選舉ト同會ニ於テ同時ニ之ヲ行フ但其投票函ハ正議員ノ投票函ト異ニスヘシ

第五十五條 一人ニシテ正議員補闕員ノ選ニ併セ當ルトキハ之ヲ正議員ト爲シ其次點者ヲ以テ補闕當選ト爲スヘシ

第五十六條 當選ノ査定ニ不服アル關係者ハ當選者ノ氏名告示ヨリ十日以内ニ府縣知事ニ其更正又ハ選舉取消ノ申立ヲ爲スコトヲ得府縣知事ノ判定ニ服セサル者ハ二十日以内ニ控訴院ニ出訴スルコトヲ得但其判決ハ終審トス

第五十七條 當選者確定ノ後其當選者ノ被選舉權ヲ有セザリシコトヲ發見

スルトキハ府縣知事ハ其當選ヲ取消シ其次點者ヲ以テ當選ト爲スヘシ但此場合ニ於テハ其事由ヲ管内ニ告示スヘシ

第五十八條 選舉全會ヲ取消シ更ニ選舉ヲ命スルハ其選舉ノ選舉規定ニ違フ場合ニ限ル但規定ニ違フ所アルモ其事ノ輕微ニシテ選舉ノ結果ニ異動ヲ生セス又ハ其事ノ更正シ得ヘキモノハ取消ノ限ニ在ラス

選舉全會ノ取消ハ府縣知事ヨリ内務大臣ニ具狀シ其認可ヲ經テ之ヲ爲スヘシ但其事由ヲ管内ニ告示スヘシ

第五十九條 納稅額年齡其他選舉資格ニ必要ナル事項ヲ詐稱シ選舉人名簿ニ記載セラレタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス其被選舉資格ニ必要ナル事項ヲ詐稱シテ當選者ト爲リタル者又ハ其資格ヲ有セザルモ其事ヲ告ケスシテ當選者ト爲リタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十條 投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若クハ他人ノ爲メニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スルノ目的ヲ以テ直接又ハ間接ニ金錢物品ヲ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス其授與又ハ約束ヲ受ケタル者モ亦同シ

直接又ハ間接ニ金錢物品ヲ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シテ投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若クハ他人ノ爲メニ投票ヲ爲スコトヲ抑止シタル者ハ刑法第二百三十四條ノ例ヲ以テ論ス其授與又ハ約束ヲ受ケテ投



ノ議決ヲ以テ之ヲ増減スルコトヲ得此場合ニ於テ其退職スヘキ議員ハ抽籤ヲ以テ定メ其増加スヘキ議員ハ新ニ選舉スヘシ

第三條 郡内ノ市街ニ市制ヲ施行スル場合ニ於テモ府縣會議員選舉ノ區域ハ之ヲ變更セス其選舉事務ハ郡長ニ於テ之ヲ管理シ選舉ニ關スル費用ハ郡役所經費ヲ以テ支辨スヘシ

第四條 郡部ト經濟ヲ異ニスル區ニ於テ從來地方稅ヲ以テ支辨シタル事業ニシテ市ノ事業ニ屬スヘキモノハ府縣會ノ議決ヲ以テ市ニ引繼クヘシ

第五條 郡部ト經濟ヲ異ニセサル區ニ市制ヲ施行シ又ハ町村ニ市制ヲ施行シ若クハ町村ヲ區ニ合併シテ市制ヲ施行スル場合ニ於テハ其區費又ハ町村費ヲ二年以來納メタル者ヲ市制第七條ノ市ノ負擔分任者ト看做スヘシ郡部ト經濟ヲ異ニスル區ニ市制ヲ施行スル場合ニ於テハ府縣會ノ議決ヲ以テ區部地方稅中專ラ區ノ費用ニ支出シタルモノヲ區分シ其區分シタル稅金ヲ二年以來納メタル者ヲ市制第七條ノ市ノ負擔分任者ト看做スヘシ其區分シタル稅金ノ外區費ヲ納メタル者アルトキハ其金額ヲ併算スヘシ

○區郡部會規則 明治十四年二月 第八號布告

東京府京都府大坂府神奈川縣區郡部會規則左ノ通相定メ明治十三年(五月)第二十六號及第二十七號布告廢止候條此旨布告候事

第一條 三府及ヒ神奈川縣ニ於テハ府縣會ヲ分チ區部會郡部會トナシ區郡部ニ分別シタル事件ヲ議定セシム

第二條 區部會郡部會ニ於テ議定スヘキ事件ト府縣會ニ於テ議定ス可キ事件トハ府縣會ニ於テ之ヲ議定ス

第三條 府縣會規則第十條ノ定限外ニ於テ區部議員ノ増加ヲ要スルモハ府知事縣令ヨリ內務卿ニ具狀シ其認可ヲ得テ其定限ヲ殊ニスルヲ得

第四條 府縣會ハ區郡部部議員各半數以上出席スルニアラサルハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第五條 府縣會ノ議定ニ屬スル事件ニ付テハ區郡部郡部常置委員會同シテ諮問ヲ受ケ又ハ議決スヘシ

但區郡部郡部常置委員各半數以上出席スルニアラサレハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第六條 (明治十五年第十二號布告ヲ以テ削除)

第七條 (同上)

第八條 明治十三年度以前ニ係ル地方稅ノ中區郡連帶支辨セサルモノハ其決算ヲ府縣會ニ報告シ區郡ニ分別セルモノハ其決算ヲ各別ニ區部會郡部會ニ報告スヘシ

第九條 區部ニ係ル戶數割ハ區部會ノ議決ヲ經テ府知事縣令ヨリ內務大藏

兩卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ得テ家屋稅ト爲スヲ得(明治十五年第十二號布告ヲ以テ追加)

○各府縣公共財產ニシテ府縣會區町村會及水利

土功會ノ議定ニ付セサルモノ管理方明治廿二年一月內務省

令第一號

第一條 從來各府縣下ニ存在スル公共ノ財產ニシテ府縣會區町村會及水利土功會ノ議定ニ付セサルモノハ其管理方法又ハ名義ノ如何ニ拘ラス府縣知事ニ於テ其管理者又ハ關係者ノ意見ヲ聞キ其所屬ヲ定メ自今府縣會若クハ區町村會ノ議定ヲ經テ府縣知事若クハ郡區長戶長ニ於テ之ヲ管理スヘシ

第二條 前條ノ財產ニシテ地方稅又ハ區町村費ト經濟ヲ異ニスルノ必要アルモノハ議會ノ決議ニヨリ別ニ經濟ヲ立ツルコトヲ得

第三條 公益ニ供スル爲メ有志人民ノ協力ヲ以テ設立シタル學校病院ノ類ハ府縣立ノ名義ヲ附シ府縣知事ニ於テ之ヲ管理スルモ本令第一條ニ據ルノ限ニ在ラス

○府縣會規則市制町村制衆議院議員選舉法中議

員タルヲ得サル官吏ハ在職者ニ限ル等ノ件明治廿二年六月

閣令第十八號

府縣會規則第十三條市制町村制第十五條衆議院議員選舉法第九條第十條ニ記載シタル官吏ハ在職者ノミニ限ルモノトス  
非職者休職者ニシテ議員又ハ市町村ノ吏員タラントスルトキハ本屬長官ノ許可ヲ受ク可シ

○郡市町村

○郡區町村編制法明治十一年七月  
第拾七號布告

郡區町村編制法左ノ通被定候條此旨布告候事

第一條 地方ヲ畫シテ府縣ノ下郡區町村トス

第二條 郡町村ノ區域名稱ハ總テ舊ニ依ル

第三條 郡ノ區域廣濶ニ過キ施政ニ不便ナル者ハ一郡ヲ畫シテ數郡トナス(東西南北上中下某郡ト云カ如シ)

第四條 (明治廿一年法律第  
一號ヲ以テ廢止)

第五條 每郡ニ郡長各一員ヲ置キ每區ニ區長各一員ヲ置ク郡ノ狹少ナルモ

ノハ數郡ニ一員ヲ置クヲ得

第六條 (明治廿一年法律第  
一號ヲ以テ廢止)

第七條 此編制法ヲ施行シ難キ島嶼ハ其制ヲ異ニスルヲ得(明治十三年第  
十號布告ヲ以テ  
加追)

第八條 地方ノ便益若クハ人民ノ請願ニ由リ止ムヲ得サル理由アルモノハ  
郡區町村ノ區域名稱ヲ變更スルコトヲ得(全上)

第九條 第三條(第四條)第七條第八條ノ施行ヲ要スルキハ府知事縣令ヨリ  
內務卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受ク可シ(全上)

(明治十一年法律第一  
號ヲ以テ但書廢止)

○市制町村制 明治二十一年四月  
法律第一號

朕地方共同ノ利益ヲ發達セシメ衆庶臣民ノ幸福ヲ増進スルコトヲ欲シ隣保  
團結ノ舊慣ヲ存重シテ益之ヲ擴張シ更ニ法律ヲ以テ都市及町村ノ權義ヲ保  
護スルノ必要ヲ認メ茲ニ市制及町村制ヲ裁可シテ之ヲ公布セシム

第一章 總則

第一款 市及其區域

第二款 市住民及其權利義務

第三款 市條例

第二章 市會

第一款 組織及選舉

第二款 職務權限及處務規程

第三章 市行政

第一款 市參事會及市吏員ノ組織選舉

第二款 市參事會及市吏員ノ職務權限及處務規程

第三款 給料及給與

第四章 市有財產ノ管理

第一款 市有財產及市稅

第二款 市ノ歲入出豫算及決算

第五章 特別ノ財產ヲ有スル市區ノ行政

第六章 市行政ノ監督

第七章 附則

市制 第一章 總則

第一款 市及其區域

第一條 此法律ハ市街地ニシテ郡ノ區域ニ屬セス別ニ市ト爲入ノ地ニ施行スルモノトス

第二條 市ハ法律上一個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡市ノ公共事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ之ヲ處理スルモノトス

第三條 凡市ハ從來ノ區域ヲ存シテ之ヲ變更セス但將來其變更ヲ要スルコトアルトキハ此法律ニ準據ス可シ

第四條 市ノ境界ヲ變更シ又ハ町村ヲ市ニ合併シ及市ノ區域ヲ分割スルコトアルトキハ町村制第四條ヲ適用ス

第五條 市ノ境界ニ關スル爭論ハ府縣參事會之ヲ裁決ス其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二款 市住民及其權利義務  
第六條 凡市内ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其市住民トス

凡市住民タル者ハ此法律ニ從ヒ公共ノ營造物並市有財産ヲ共用スルノ權利ヲ有シ及市ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ有スルモノトス但特ニ民法上ノ權利及義務ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第七條 凡帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子二年以來(一)市ノ住民トナリ(二)其市ノ負擔ヲ分任シ及(三)其市内ニ於テ地租ヲ納メ若クハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ其市公民トス其公費ヲ以テ救助ヲ受ケ

タル後二年ヲ經サル者ハ此限ニ在ラス但場合ニ依リ市會ノ議決ヲ以テ本條ニ定ムル二ケ年ノ制限ヲ特免スルコトヲ得

此法律ニ於テ獨立ト稱スルハ滿二十五歲以上ニシテ一戸ヲ構ヘ且治産ノ禁ヲ受ケサル者ヲ云フ

第八條 凡市公民ハ市ノ選舉ニ參與シ市ノ名譽職ニ選舉セラルノ權利アリ其名譽職ヲ擔任スルハ市公民ノ義務ナリトス

左ノ理由アルニ非サレハ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職スルコトヲ得ス

一 疾病ニ罹リ公務ニ堪ヘサル者  
二 營業ノ爲メニ常ニ其市内ニ居ルコトヲ得サル者  
三 年齡滿六十歲以上ノ者

四 官職ノ爲メニ市ノ公務ヲ執ルコトヲ得サル者  
五 四年間無給ニシテ市吏員ノ職ニ任シ爾後四年ヲ經過セサル者及六年

間市會議員ノ職ニ居リ爾後六年ヲ經過セサル者  
六 其他市會ノ議決ニ於テ正當ノ理由アリト認ムル者

前項ノ理由ナクシテ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職シ若クハ無任期ノ職務ヲ少クモ三年間擔當セス又ハ其職務ヲ實際ニ執行セサル者ハ市會ノ議決ヲ以テ三年以上六年以下其市公民タルノ權ヲ停止シ且同年期其負擔スヘキ市費ノ八分一乃至四分一ヲ增課スルコトヲ得

前項市會ノ議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條 市公民タル者第七條ニ掲載スル要件ノ一ヲ失フトキハ其公民タルノ權ヲ失フモノトス

市公民タル者身代限處分中又ハ公權ノ剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重輕罪ノ爲メ裁判上ノ訊問若クハ勾留中又ハ租稅滯納處分中ハ其公民タルノ權ヲ停止ス

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ市ノ公務ニ參與セサルモノトス

市公民タル者ニ限リテ任スヘキ職務ニ在ル者本條ノ場合ニ當ルトキハ其職務ヲ解ク可キモノトス

第三款 市條例

第十條 市ノ事務及市住民ノ權利義務ニ關シ此法律中ニ明文ナク又ハ特例ヲ設クルコトヲ許セル事項ハ各市ニ於テ特ニ條例ヲ設ケテ之ヲ規定スルコトヲ得

市ニ於テハ其市ノ設置ニ係ル營造物ニ關シ規則ヲ設クルコトヲ得  
市條例及規則ハ法律命令ニ抵觸スルコトヲ得且之ヲ發行スルトキハ地方慣行ノ公告式ニ依ル可シ

第二章 市會

第一款 組織及選舉

第十一條 市會議員ハ其市ノ選舉人其被選舉權アル者ヨリ之ヲ選舉ス其定員ハ人口五萬未滿ノ市ニ於テハ三十人トシ人口五萬以上ノ市ニ於テハ三十六人トス

人口十萬以上ノ市ニ於テハ人口五萬ヲ加フル毎ニ人口二十萬以上ノ市ニ於テハ人口十萬ヲ加フル毎ニ議員三人ヲ増シ六十八ヲ定限トス  
議員ノ定員ハ市條例ヲ以テ特ニ之ヲ増減スルコトヲ得但定限ヲ超ユルコトヲ得ス

第十二條 市公民(第七條)ハ總テ選舉權ヲ有ス但其公民權ヲ停止セララル者(第八條第三項第九條第一項)及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス

凡內國人ニシテ公權ヲ有シ直接市稅ヲ納ムル者其額市公民ノ最多ク納稅スル者三名中ノ一人ヨリモ多キトキハ第七條ノ要件ニ當ラスト雖モ選舉權ヲ有ス但公民權ヲ停止セラル者及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス

法律ニ從テ設立シタル會社其他法人ニシテ前項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

第十三條 選舉人ハ分テ三級ト爲ス



選舉人中直接市税ノ納額最多キ者ヲ合セテ選舉人總員ノ納ムル總額ノ三分一ニ當ル可キ者ヲ一級トス

一級選舉人ノ外直接市税ノ納額多キ者ヲ合セテ選舉人總員ノ納ムル總額ノ三分一ニ當ル可キ者ヲ二級トシ爾餘ノ選舉人ヲ三級トス

各級ノ間納稅額兩級ニ跨ル者アルトキハ上級ニ入ル可シ又兩級ノ間ニ同額ノ納稅者二名以上アルトキハ其市ニ住居スル年數ノ多キ者ヲ以テ上級ニ入ル若シ住居ノ年數ニ依リ難キトキハ年數ヲ以テ年數ニモ依リ難キトキハ市長抽籤ヲ以テ之ヲ定ム可シ

選舉人每級各別ニ議員ノ三分一ヲ選舉ス其被選舉人ハ同級内ノ者ニ限ラス三級ニ通シテ選舉セララルコトヲ得

第十四條 區域廣濶又ハ人口稠密ナル市ニ於テハ市條例ヲ以テ選舉區ヲ設クルコトヲ得但特ニ二級若クハ三級選舉ノ爲メ之ヲ設クルモ妨ケナシ

選舉區ノ數及其區域並各選舉區ヨリ選出スル議員ノ員數ハ市條例ヲ以テ選舉人ノ員數ニ準シ之ヲ定ム可シ

選舉人ハ其住居ノ地ニ依テ其所屬ノ區ヲ定ム其内市ニ住居ナキ者ハ課稅ヲ受ケタル物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ム若シ數選舉區ニ亘リ納稅スル者ハ課稅ノ最多キ物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ム可シ

選舉區ヲ設クルトキハ其選舉區ニ於テ選舉人ノ等級ヲ分ツ可シ

被選舉人ハ其選舉区内ノ者ニ限ラサルモノトス

第十五條 選舉權ヲ有スル市公民(第十二條第一項)ハ總テ被選舉權ヲ有ス左ニ掲クル者ハ市會議員タルコトヲ得ス

一 所屬府縣ノ官吏

二 有給ノ市吏員

三 檢察官及警察官吏

四 神官僧侶及其他諸宗教師

五 小學校教員

其他官吏ニシテ當選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受ク可シ

代言人ニ非スシテ他人ノ爲メニ裁判所又ハ其他ノ官廳ニ對シテ事ヲ辨スルヲ以テ業ト爲ス者ハ議員ニ選舉セララルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ市會議員タルコトヲ得ス其同時ニ選舉セラレタルトキハ投票ノ數ニ依テ其多キ者一人ヲ當選トシ若シ同數ナレハ年長者ヲ當選トス其時子異ニシテ選舉セラレタル者ハ後者議員タルコトヲ得ス

市參事會員トノ間父子兄弟タルノ緣故アル者ハ之ト同時ニ市會議員タルコトヲ得ス若シ議員トノ間ニ其緣故アル者市參事會員ノ任ヲ受クルトキ

ハ其縁故アル議員ハ其職ヲ退ク可シ

第十六條 議員ハ名譽職トス其任期ハ六年トシ毎三年各級ニ於テ其半數ヲ改選ス若シ各級ノ議員二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初回ニ於テ解任ス可キ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム  
退任ノ議員ハ再選セラレハコトヲ得

第十七條 議員中闕員アルトキハ毎三年定期改選ノ時ニ至リ同時ニ補闕選舉ヲ行フ可シ若シ定員三分ノ一以上闕員アルトキ又ハ市會市參事會若クハ府縣知事ニ於テ臨時補闕ヲ必要ト認ムルトキハ定期前ト雖モ其補闕選舉ヲ行フ可シ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス  
定期改選及補闕選舉トモ前任者ノ選舉セラレタル選舉等級及選舉區ニ從テ之カ選舉ヲ行フ可シ

第十八條 市長ハ選舉ヲ行フ毎ニ其選舉前六十日ヲ限リ選舉原簿ヲ製シ各選舉人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選舉人名簿ヲ製ス可シ但選舉區ヲ設クルトキハ每區各別ニ原簿及名簿ヲ製ス可シ  
選舉人名簿ハ七日間市役所又ハ其他ノ場所ニ於テ之ヲ關係者ノ縦覽ニ供ス可シ若シ關係者ニ於テ訴願セントスルトキハ同期限内ニ之ヲ市長ニ申立ッ可シ市長ハ市會ノ裁決(第二十五條第一項)ニ依リ名簿ヲ修正ス可キ

トキハ選舉前十日ヲ限リテ之ニ修正ヲ加ヘテ確定名簿ト爲シ之ニ登錄セラレサル者ハ何人タリトモ選舉ニ關スルコトヲ得ス  
本條ニ依リ確定シタル名簿ハ當選ヲ辭シ若クハ選舉ノ無効トナリタル場合ニ於テ更ニ選舉ヲ爲ストモ亦之ヲ適用ス

第十九條 選舉ヲ執行スルトキハ市長ハ選舉ノ場所日時ヲ定メ及選舉ス可キ議員ノ數ヲ各級各區ニ分チ選舉前七日ヲ限リテ之ヲ公告ス可シ  
各級ニ於テ選舉ヲ行フノ順序ハ先ツ三級ノ選舉ヲ行ヒ次ニ二級ノ選舉ヲ行ヒ次ニ一級ノ選舉ヲ行フ可シ

第二十條 選舉掛ハ名譽職トシ市長ニ於テ臨時ニ選舉人中ヨリ二名若クハ四名ヲ選任シ市長若クハ其代理者ハ其掛長トナリ選舉會ヲ閉開シ其會場ノ取締ニ任ス但選舉區ヲ設クルトキハ每區各別ニ選舉掛ヲ設ク可シ

第二十一條 選舉開會中ハ選舉人ノ外何人タリトモ選舉會場ニ入ルコトヲ得ス選舉人ハ選舉會場ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條 選舉ハ投票ヲ以テ之ヲ行フ投票ニハ被選舉人ノ氏名ヲ記シ封緘ノ上選舉人自ラ掛長ニ差出ス可シ但選舉人ノ氏名ハ投票ニ記入スルコトヲ得ス

選舉人投票ヲ差出ストキハ自己ノ氏名及住所ヲ掛長ニ申立テ掛長ハ選舉人名簿ニ照シテ之ヲ受ケ封緘ノ儘投票函ニ投入ス可シ但投票函ハ投票ヲ

終ル迄之ヲ開クコトヲ得ス

第二十三條 投票ニ記載ノ人員其選舉ノ可キ定數ニ過キ又ハ不足アルモ其投票ヲ無効トセス其定數ニ過クルモノハ末尾ニ記載シタル人名ヲ順次ニ棄却ス可シ

左ノ投票ハ之ヲ無効トス

- 一 人名ヲ記載セス又ハ記載セル人名ノ讀ミ難キモノ
- 二 被選舉人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ
- 三 被選舉權ヲキ人名ヲ記載スルモノ
- 四 被選舉人氏名ノ外他事ヲ記入スルモノ

投票ノ受理並効力ニ關スル事項ハ選舉掛假ニ之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ掛長之ヲ決ス

第二十四條 選舉ハ選舉人自ラ之ヲ行フ可シ他人ニ託シテ投票ヲ差出スコトヲ許サス

第十二條第二項ニ依リ選舉權ヲ有スル者ハ代人ヲ出シテ選舉ヲ行フコトヲ得若シ其獨立ノ男子ニ非サル者又ハ會社其他法人ニ係ルトキハ必ス代人ヲ以テス可シ其代人ハ內國人ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人ハ委任狀ヲ選舉掛ニ示シテ代理ノ證トス可シ

第二十五條 議員ノ選舉ハ有効投票ノ多數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取り同年ナルトキハ掛長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

同時ニ補闕員數名ヲ選舉スルトキハ(第十七條)投票數ノ最多キ者ヲ以テ殘任期ノ最長キ前任者ノ補闕ト爲シ其數相同キトキハ抽籤ヲ以テ其順序ヲ定ム

第二十六條 選舉掛ハ選舉錄ヲ製シテ選舉ノ顛末ヲ記錄シ選舉ヲ終リタル後之ヲ朗讀シ選舉人名簿其他關係書類ヲ合綴シテ之ニ署名ス可シ投票ハ之ヲ選舉錄ニ附屬シ選舉ヲ結了スルニ至ル迄之ヲ保存ス可シ

第二十七條 選舉ヲ終リタル後選舉掛長ハ直ニ當選者ニ其當選ノ旨ヲ告知ス可シ其當選ヲ辭セントスル者ハ五日以内ニ之ヲ市長ニ申立ツ可シ一人ニシテ數級又ハ數區ノ選舉ニ當リタルトキハ同期限内何レノ選舉ニ應ス可キコトヲ申立ツ可シ其期限内ニ之ヲ申立テサル者ハ總テ其選舉ヲ辭スル者トナシ第八條ノ處分ヲ爲ス可シ

第二十八條 選舉人選舉ノ効力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選舉ノ日ヨリ七日以内ニ之ヲ市長ニ申立ツルコトヲ得(第二十五條第一項)市長ハ選舉ヲ終リタル後之ヲ府縣知事ニ報告シ府縣知事ニ於テ選舉ノ効力ニ關シ異議アルトキハ訴願ノ有無ニ拘ラス府縣參事會ニ付シテ處分ヲ

行フコトヲ得

選舉ノ定規ニ違背スルコトアルトキハ其選舉ヲ取消シ又被選舉人中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルトキハ其人ノ當選ヲ取消シ更ニ選舉ヲ行ハシム可シ

第二十九條 當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ效力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市會之ヲ議決ス

第二款 職務權限及處務規程

第三十條 市會ハ其市ヲ代表シ此法律ニ準據シテ市ニ關スル一切ノ事件並從前特ニ委任セシレ又ハ將來法律勅令ニ依テ委任セラル、事件ヲ議決スルモノトス

第三十一條 市會ノ議決ス可キ事件ノ概目左ノ如シ

- 一 市條例及規則ヲ設ケ並改正スル事
- 二 市費ヲ以テ支辨ス可キ事業但第七十四條ニ掲グル事務ハ此限ニ在ラス
- 三 歳入出豫算ヲ定メ豫算外ノ支出及豫算超過ノ支出ヲ認定スル事
- 四 決算報告ヲ認定スル事
- 五 法律勅令ニ定ムルモノヲ除クノ外使用料、手数料、市稅及夫役現品ノ

賦課徵收ノ法ヲ定ムル事

- 六 市有不動産ノ賣買交換讓受讓渡並質入書入ヲ爲ス事
- 七 基本財産ノ處分ニ關スル事
- 八 歳入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事
- 九 市有ノ財産及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事
- 十 市吏員ノ身元保證金ヲ徵シ並其金額ヲ定ムル事
- 十一 市ニ係ル訴訟及和解ニ關スル事
- 第三十二條 市會ハ法律勅令ニ依リ其職權ニ屬スル市吏員ノ選舉ヲ行フ可シ
- 第三十三條 市會ハ市ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閲シ市長ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理議決ノ施行並收入支出ノ正否ヲ監査スルノ職權ヲ有ス
- 市會ハ市ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ差出スコトヲ得
- 第三十四條 市會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述ス可シ
- 第三十五條 市住民及公民タル權利ノ有無、選舉權及被選舉權ノ有無、選舉人名簿ノ正否並其等級ノ當否代理ヲ以テ執行スル選舉權(第十二條第二項)及市會議員選舉ノ效力(第二十八條)ニ關スル訴願ハ市會之ヲ裁決ス

市會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ事件ニ付テハ市長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ爲スコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其執行ヲ停止スルコトヲ得ス但判決確定スルニ非サレハ更ニ選舉ヲ爲スコトヲ得ス

第三十六條 凡議員タル者ハ選舉人ノ指示若クハ委囑ヲ受ク可カラサルモノトス

第三十七條 市會ハ每曆年ノ初メ一周年ヲ限リ議長及其代理者各一名ヲ互選ス

第三十八條 會議ノ事件議長及其父母弟兄若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事アルトキハ議長ニ故障アルモノトシテ其代理者之ニ代ル可シ

第三十九條 市參事會員ハ會議ニ列席シテ議事ヲ辨明スルコトヲ得

第四十條 市會ハ會議ノ必要アル毎ニ議長之ヲ召集ス若シ議員四分ノ一以上ノ請求アルトキ又ハ市長若クハ市參事會ノ請求アルトキハ必ス之ヲ召集ス可シ其召集並會議ノ事件ヲ告知スルハ急施ヲ要スル場合ヲ除クノ外少クモ會議ノ三日前タル可シ但市會ノ議決ヲ以テ豫メ會議日ヲ定ムルモ妨ケナシ

市參事會員ヲ市會ノ會議ニ召集スルトキモ亦前項ノ例ニ依ル

第四十一條 市會ハ議員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ議決スルコトヲ得ス但同一ノ議事ニ付召集再回ニ至ルモ議員猶三分ノ二ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラス

第四十二條 市會ノ議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ再議議決ス可シ若シ猶同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條 議員ハ自己及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ市會ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

議員ノ數此除名ノ爲メニ減少シテ會議ヲ開クノ定數ニ滿タサルトキハ府縣參事會市會ニ代テ議決ス

第四十四條 市會ニ於テ市吏市員ノ選舉ヲ行フトキハ其一名毎ニ匿名投票ヲ以テ之ヲ爲シ有效投票ノ過半數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス若シ過半數ヲ得ル者ナキトキハ最多數ヲ得ル者二名ヲ取り之ニ就テ更ニ投票セシム若シ最多數ヲ得ル者三名以上同數ナルトキハ議長自ラ抽籤シテ其二名ヲ取り更ニ投票セシム此再投票ニ於テモ猶過半數ヲ得ル者ナキトキハ抽籤ヲ以テ當選ヲ定ム其他ハ第二十二條、第二十三條、第二十四條第一項ヲ適用ス  
前項ノ選舉ニハ市會ノ議決ヲ以テ指名推選ノ法ヲ用フルコトヲ得

第四十五條 市會ノ會議ハ公開ス但議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

第四十六條 議長ハ各議員ニ事務ヲ分課シ會議及選舉ノ事ヲ總理シ開會閉會並延會ヲ命シ議場ノ秩序ヲ保持ス若シ傍聽者ノ公然贊成又ハ擯斥ヲ表シ又ハ喧擾ヲ起ス者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退出セシムルコトヲ得

第四十七條 市會ハ書記ヲシテ議事録ヲ製シテ其議決及選舉ノ顛末並出席議員ノ氏名ヲ記錄セシム可シ議事録ハ會議ノ末之ヲ朗讀シ議長及議員二名以上之ニ署名ス可シ

市會ハ議事録ノ謄寫又ハ原書ヲ以テ其議決ヲ市長ニ報告ス可シ市會ノ書記ハ市會之ヲ選任ス

第四十八條 市會ハ其會議細則ヲ設ク可シ其細則ニ違背シタル議員ニ科ス可キ過怠金二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

第三章 市行政

第一款 市參事會及市吏員ノ組織選任

第四十九條 市ニ市參事會ヲ置キ左ノ吏員ヲ以テ之ヲ組織ス

一 市長 一名

二 助役 東京ハ三名京都大阪ハ各二名其他ハ一名

三 名譽職參事會員 東京ハ十二名京都大阪ハ各九名其他ハ六名

助役及名譽職參事會員ハ市條例ヲ以テ其定員ヲ増減スルコトヲ得

第五十條 市長ハ有給吏員トス其任期ハ六年トシ内務大臣市會ヲシテ候補者三名ヲ推薦セシメ上奏裁可ヲ請フ可シ若シ其裁可ヲ得サルトキハ再推薦ヲ爲サシム可シ再推薦ニシテ猶裁可ヲ得サルトキハ追テ推薦セシノ裁可ヲ得ルニ至ルノ間内務大臣ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ市長ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第五十一條 助役及名譽職參事會員ハ市會之ヲ選舉ス其選舉ハ第四十四條ニ依テ行フ可シ但投票同數ナルトキハ抽籤ノ法ニ依ラス府縣參事會之ヲ決ス可シ

第五十二條 助役ハ有給吏員トシ其任期ハ六年トス

助役ノ選舉ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス若シ其認可ヲ得サルトキハ再選舉ヲ爲ス可シ再選舉ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ追テ選舉ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間府縣知事ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ助役ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第五十三條 市長及助役ハ其市民タル者ニ限ラス但其任ヲ受クルトキハ其公民タルノ權ヲ得

第五十四條 名譽職參事會員ハ其市民中年齡滿三十歲以上ニシテ選舉權

ヲ有スル者ヨリ之ヲ選舉ス其任期ハ四年トス任期滿限ノ後ト雖モ後任者就職ノ日迄在職スルモノトス

名譽職參事會員ハ每二年其半數ヲ改選ス若シ二分ニ離キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ退任セシム初回ノ退任者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム但退任者ハ再選セララルコトヲ得

若シ闕員アルトキハ其殘任者ヲ補充スル爲メ直ニ補闕選舉ヲ爲ス可シ

第五十五條 市長及助役其他參事會員ハ第十五條第二項ニ掲載スル職ヲ兼スルコトヲ得ス同條第四項ニ掲載スル者ハ名譽職參事會員ニ選舉セララルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ縁故アル者ハ同時ニ市參事會員タルコトヲ得ス若シ其縁故アル者市長ノ任ヲ受クルトキハ其縁故アル市參事會員ハ其職ヲ退ク可シ其他ハ第十五條第五項ヲ適用ス

市長及助役ハ三ヶ月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退職料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十六條 市長及助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ス其他ノ營業ハ府縣知事ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十七條 名譽職參事會員ノ選舉ニ付テハ市參事會自ラ其效力ノ有無ヲ

議決ス

當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ效力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市參事會之ヲ議決ス其議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得其他ハ第三十五條末項ヲ適用ス

第五十八條 市ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ市參事會ノ推薦ニ依リ市會之ヲ選任ス

收入役ハ市參事會員ヲ兼スルコトヲ得ス

收入役ノ選任ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス其他ハ第五十一條、

第五十二條、第五十三條、第五十五條及第七十六條ヲ適用ス

第五十九條 市ニ書記其他必要ノ附屬員並使丁ヲ置キ相當ノ給料ヲ給ス其人員ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定メ市參事會之ヲ任用ス

第六十條 凡市ハ處務便宜ノ爲メ市參事會ノ意見ヲ以テ之ヲ數區ニ分チ每區區長及其代理者各一名ヲ置クコトヲ得區長及其代理者ハ名譽職トス但東京京都大坂ニ於テハ區長ヲ有給吏員ト爲スコトヲ得 區長及其代理者ハ市會ニ於テ其區若クハ隣區ノ公民中選舉權ヲ有スル者

ヨリ之ヲ選舉ス區會(第百十二條)ヲ設クル區ニ於テハ其區會ニ於テ之ヲ選舉ス但東京京都大坂ニ於テハ市參事會之ヲ選任ス

第六十一條 市ハ市會ノ議決ニ依リ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得其委員ハ名譽職トス

委員ハ市參事會員又ハ市會議員ヲ以テ之ニ充テ又ハ市參事會員及市會議員ヲ以テ之ヲ組織シ又ハ會員議員ト市民中選舉權ヲ有スル者トヲ以テ之ヲ組織シ市參事會員一名ヲ以テ委員長トス

委員中市會議員ヨリ出ツル者ハ市會之ヲ選舉シ選舉權ヲ有スル公民ヨリ出ル者ハ市參事會之ヲ選舉シ其他ノ委員ハ市長之ヲ選任ス

第六十二條 區長及委員ニハ職務取扱ノ爲ニ要スル實費辨償ノ外市會ノ議決ニ依リ勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得

第六十三條 市吏員ハ任期滿限ノ後再選セララル、コトヲ得

市吏員及使丁ハ別段ノ規定又ハ規約アルモノヲ除クノ外隨時解職スルコトヲ得

第二款 市參事會及市吏員ノ職務權限及處務規程  
第六十四條 市參事會ハ其市ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任ス

市參事會ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

一 市會ノ議事ヲ準備シ及其議決ヲ執行スル事若シ市會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ市參事會ハ自己ノ意見ニ由リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ府縣參事會ノ議決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ議決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二 市ノ設置ニ係ル營造物ヲ管理スル事若シ特ニ之カ管理者アルトキハ其事務ヲ監督スル事

三 市ノ歳入ヲ管理シ歳入出豫算表其他市會ノ議決ニ依テ定マリタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スル事

四 市ノ權利ヲ保護シ市有財産ヲ管理スル事

五 市吏員及使丁ヲ監督シ市長ヲ除クノ外其他ニ對シ懲戒處分ヲ行フ事其懲戒處分ハ譴責及十圓以下ノ過怠金トス

六 市ノ諸證書及公文書類ヲ保管スル事  
七 外部ニ對シテ市ヲ代表シ市ノ名義ヲ以テ其訴訟並和解ニ關シ又ハ他廳若クハ人民ト商議スル事



八 法律勅令ニ依リ又ハ市會ノ議決ニ從テ使用料、手数料、市税及夫役現品ヲ賦課徴收スル事

九 其他法律命令又ハ上司ノ指令ニ依テ市參事會ニ委任シタル事務ヲ處理スル事

第六十五條 市參事會ハ議長又ハ其代理者及名譽職會員定員三分ノ一以上出席スルトキハ議決ヲ爲スコトヲ得

其議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

議決ノ事件ハ之ヲ議事録ニ登記ス可シ

市參事會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ市長ハ自己ノ意見ニ由リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ府縣參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第六十六條 第四十三條ノ規定ハ市參事會ニモ亦之ヲ適用ス但同條ノ規定ニ從ヒ市參事會正當ノ會議ヲ開クコトヲ得サルトキハ市會之ニ代テ議決スルモノトス

第六十七條 市長ハ市政一切ノ事務ヲ指揮監督シ處務ノ澁滞ナキコトヲ務

ム可シ

市長ハ市參事會ヲ召集シ之カ議長トナル市長故障アルトキハ其代理者ヲ以テ之ニ充ツ

市長ハ市參事會ノ議事ヲ準備シ其議決ヲ執行シ市參事會ノ名ヲ以テ文書ノ往復ヲ爲シ及之ニ署名ス

第六十八條 急施ヲ要スル場合ニ於テ市參事會ヲ召集スルノ暇ナキトキハ

市長ハ市參事會ノ事務ヲ專決處分シ次回ノ會議ニ於テ其處分ヲ報告ス可シ

第六十九條 市參事會員ハ市長ノ職務ヲ補助シ市長故障アルトキ之ヲ代理ス

市長ハ市會ノ同意ヲ得テ市參事會員ヲシテ市行政事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ名譽職會員ハ職務取扱ノ爲メニ要スル實費辨償ノ外勤務ニ相當スル報酬ヲ受ケルコトヲ得

市條例ヲ以テ助役及名譽職會員ノ特別ナル職務並市長代理ノ順序ヲ規定ス可シ若シ條例ノ規定ナキトキハ府縣知事ノ定ムル所ニ從ヒ上席者之ヲ代理ス可シ

第七十條 市收入役ハ市ノ收入ヲ受領シ其費用ノ支拂ヲ爲シ其他會計事務ヲ掌ル

第七十一條 書記ハ市長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス

第七十二條 區長及其代理者(第六十條)ハ市參事會ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區内ニ關スル市行政事務ヲ補助執行スルモノトス

第七十三條 委員ハ(第六十一條)市參事會ノ監督ニ屬シ市行政事務ノ一部ヲ分掌シ又ハ營造物ヲ管理シ若クハ監督シ又ハ一時ノ委託ヲ以テ事務ヲ處辨スルモノトス

市長ハ隨時委員會ニ列席シテ議決ニ加ハリ其議長タルノ權ヲ有ス常設委員ノ職務權限ニ關シテハ市條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第七十四條 市長ハ法律命令ニ從ヒ左ノ事務ヲ管掌ス

一 司法警察補助官タルノ職務及法律命令ニ依テ其管理ニ屬スル地方警察ノ事務但別ニ官署ヲ設ケテ地方警察事務ヲ管掌セシムルトキハ此限ニ在ラス

二 浦役場ノ事務

三 國ノ行政並府縣ノ行政ニシテ市ニ屬スル事務但別ニ吏員ノ設ケアルトキハ此限ニ在ラス

右三項中ノ事務ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ市參事會員ノ一名ニ分掌セシムルコトヲ得

本條ニ掲載スル事務ヲ執行スルカ爲メニ要スル費用ハ市ノ負擔トス

第三款 給料及給與

第七十五條 名譽職員ハ此法律中別ニ規定アルモノヲ除クノ外職務取扱ノ爲メニ要スル實費ノ辨償ヲ受クルコトヲ得

實費辨償額及報酬額ハ市會之ヲ議決ス

第七十六條 市長助役其他有給吏員及使丁ノ給料額ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

市會ノ議決ヲ以テ市長ノ給料額ヲ定ムルトキハ内務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス若シ之ヲ許可ス可カラスト認ムルハ内務大臣之ヲ確定ス

市會ノ議決ヲ以テ助役ノ給料額ヲ定ムルトキハ府縣知事ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス府縣知事ニ於テ之ヲ許可ス可カラスト認ムルトキハ府縣參事會ノ議決ニ付シテ之ヲ確定ス

市長助役其他有給吏員ノ給料額ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得

第七十七條 市條例ノ規定ヲ以テ市長其他有給吏員ノ退隱料ヲ設クルコトヲ得

第七十八條 有給吏員ノ給料、退隱料其他第七十五條ニ定ムル給與ニ關シテ異議アルトキハ關係者ノ申立ニ依リ府縣參事會之ヲ裁決ス其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十九條 退隱料ヲ受クル者官職又ハ府縣郡市町村及公共組合ノ職務ニ

就キ給料ヲ受クルトキハ其間之ヲ停止シ又ハ更ニ退隱料ヲ受クルノ權ヲ得ルトキ其額舊退隱料ト同額以上ナルトキハ舊退隱料ハ之ヲ廢止ス

第八十條 給料、退隱料、報酬及辨償ハ總テ市ノ負擔トス

第四章 市有財産ノ管理

第一款 市有財産及市税

第八十一條 市ハ其不動産、積立金穀等ヲ以テ基本財産ト爲シ之ヲ維持スルノ義務アリ

臨時ニ收入シタル金穀ハ基本財産ニ加入ス可シ但寄附金等寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

第八十二條 凡市有財産ハ全市ノ爲メニ之ヲ管理シ及共用スルモノトス但特ニ民法上ノ權利ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第八十三條 舊來ノ慣行ニ依リ市住民中特ニ其市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ有スル者アルトキハ市會ノ議決ヲ經ルニ非サレハ其舊慣ヲ改ムルコトヲ得ス

第八十四條 市住民中特ニ市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ得ントスル者アルトキハ市條例ノ規定ニ依リ使用料若クハ一時ノ加入金ヲ徵收シ又ハ使用料加入金ヲ共ニ徵收シテ之ヲ許可スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十五條 使用權ヲ有スル者(第八十三條、第八十四條)ハ使用ノ多寡ニ準シテ其土地物件ニ係ル必要ナル費用ヲ分擔ス可キモノトス

第八十六條 市會ハ市ノ爲メニ必要ナル場合ニ於テハ使用權(第八十三條、第八十四條)ヲ取上ケ又ハ制限スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十七條 市有財産ノ賣却貸與又ハ建築工事及物品調達ノ請負ハ公ケノ入札ニ付ス可シ但臨時急施ヲ要スルトキ及入札ノ價額其費用ニ比シテ得失相償ハサルトキ又ハ市會ノ認許ヲ得ルトキハ此限ニアラス

第八十八條 市ハ其必要ナル支出及従前法律命令ニ依テ賦課セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラレ、支出ヲ負擔スルノ義務アリ

市ハ其財産ヨリ生スル收入及使用料、手数料(第八十九條)並科料、過怠金其他法律勅令ニ依リ市ニ屬スル收入ヲ以テ前項ノ支出ニ充テ猶不足アルトキハ市税(第九十條)及夫役現品(第一百一條)ヲ賦課徵收スルコトヲ得

第八十九條 市ハ其所有物及營造物ノ使用ニ付又ハ特ニ數個人ノ爲メニスル事業ニ付使用料又ハ手数料ヲ徵收スルコトヲ得

第九十條 市税トシテ賦課スルコトヲ得可キ目左ノ如シ  
一 國稅府縣稅ノ附加稅  
二 直接又ハ間接ノ特別稅

附加税ハ直接ノ國税又ハ府縣税ニ附加シ均一ノ稅率ヲ以テ市ノ全部ヨリ徵收スルヲ常例トシ特別税ハ附加税ノ外別ニ市限リ稅目ヲ起シテ課稅スルコトヲ要スルトキ賦課徵收スルモノトス

第九十一條 此法律ニ規定セル條項ヲ除クノ外使用料、手数料第八十九條特別税(第九十條第一項第二)及從前ノ區町村費ニ關スル細則ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定ス可シ其條例ニハ科料一圓九十五錢以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

科料ニ處シ及之ヲ徵收スルハ市參事會之ヲ掌ル其處分ニ不服アル者ハ令狀交付後十四日以内ニ司法裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九十二條 三ヶ月以上市内ニ滞在スル者ハ其市稅ヲ納ムルモノトス但其課稅ハ滞在ノ初ニ遡リ徵收ス可シ

第九十三條 市内ニ住居ヲ構ヘス又ハ三ヶ月以上滞在スルコトヲシト雖モ市内ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ營業ヲ爲ス者(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ハ其土地家屋營業若クハ其所得ニ對シテ賦課スル市稅ヲ納ムルモノトス其法ハタルモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

第九十四條 所得稅ニ附加税ヲ賦課シ及市ニ於テ特別ニ所得稅ヲ賦課セントスルトキハ納稅者ノ市外ニ於ケル所有ノ土地家屋又ハ營業(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ヨリ收入スル所得ハ之ヲ控除ス可キモノトス

第九十五條 數市町村ニ住居ヲ構ヘ又ハ滞在スル者ニ前條ノ市稅ヲ賦課スルトキハ其所得ヲ各市町村ニ平分シ其一部分ニノミ課稅ス可シ但土地家屋又ハ營業ヨリ收入スル所得ハ此限ニ在ラス

第九十六條 所得稅法第三條ニ掲クル所得ハ市稅ヲ免除ス

第九十七條 左ニ掲クル物件ハ市稅ヲ免除ス

一 政府、府縣市町村及公共組合ニ屬シ直接ノ公用ニ供スル土地、營造物及家屋

二 社寺及官立公立ノ學校病院其他學藝、美術及慈善ノ用ニ供スル土地、營造物及家屋

三 官有ノ山林又ハ荒蕪地但官有山林又ハ荒蕪地ノ利盡ニ係ル事業ヲ起シ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ得テ其費用ヲ徵收スルハ此限ニ在ラス

第九十八條 前二條ノ外市稅ヲ免除ス可キモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從フ皇族ニ係ル市稅ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル

第九十九條 數個人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修築及保存ノ費用ハ之ヲ其關係者ニ賦課ス可シ

市内ノ一區ニ於テ專ラ使用スル營造物アルトキハ其區内ニ住居シ若クハ

滞在シ又ハ土地家屋ヲ所有シ營業(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ヲ爲ス者ニ於テ其修築費用ヲ負擔ス可シ但其一區ノ所有財產アルトキハ其收入ヲ以テ其費用ニ充ツ可シ

第百條 市税ハ納稅義務ノ起リタル翌月ノ初ヨリ免稅理由ノ生シタル月ノ終迄月割ヲ以テ之ヲ徵收ス可シ

會計年度中ニ於テ納稅義務消滅シ又ハ變更スルトキ納稅者ヨリ之ヲ市長ニ届出ツ可シ其届出ヲ爲シタル月ノ終迄ハ從前ノ稅ヲ徵收スルコトヲ得

第百一條 市公共ノ安寧ヲ維持スルカ爲メニ夫役及現品ヲ以テ納稅者ニ賦課スルコトヲ得但學藝美術及手工ニ關スル勞役ヲ課スルコトヲ得ス

夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除クノ外直接市稅ヲ準率ト爲シ且之ヲ金額ニ算出シテ賦課ス可シ

夫役ヲ課セラレタル者ハ其便宜ニ從ヒ本人自ラ之ニ當リ又ハ適當ノ代人ヲ出スコトヲ得又急迫ノ場合ヲ除クノ外金額ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第百二條 市ニ於テ徵收スル使用料、手数料(第八十九條)市稅(第九十條)夫役ニ代フル金額(第百一條)共有物使用料及加入金(第八十四條)其他市ノ收入ヲ定期内ニ納メサルトキハ市參事會ハ之ヲ督促シ猶之ヲ完納セサルトキハ國稅滯納處分法ニ依リ之ヲ徵收ス可シ其督促ヲ爲スニハ市條例ノ規定ニ依リ手数料ヲ徵收スルコトヲ得

納稅者中無資力ナル者アルトキハ市參事會ノ意見ヲ以テ會計年度内ニ限リ納稅延期ヲ許スコトヲ得其年度ヲ越ユル場合ニ於テハ市會ノ議決ニ依ル

本條ニ記載スル徵收金ノ追徵、期滿得免及先取特權ニ付テハ國稅ニ關スル規則ヲ適用ス

第百三條 地租ノ附加稅ハ地租ノ納稅者ニ賦課シ其他土地ニ對シテ賦課スル市稅ハ其所有者又ハ使用者ニ賦課スルコトヲ得

第百四條 市稅ノ賦課ニ對スル訴願ハ賦課令狀ノ交付後三ヶ月以内ニ之ヲ市參事會ニ申立ツ可シ此期限ヲ經過スルトキハ其年度内減稅免稅及償還ヲ命求スルノ權利ヲ失フモノトス

第百五條 市稅ノ賦課及市ノ營造物市有財產并其所得ヲ使用スル權利ニ關スル訴願ハ市參事會之ヲ裁決ス但民法上ノ權利ニ係ルモノハ此限ニ在ラズ

前項ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第百六條 市ニ於テ公債ヲ募集スルハ從前ノ公債元額ヲ償還スル爲メ又ハ天災時變等已ムチ得サル支出若クハ市ノ永久ノ利益トナル可キ支出ヲ要

スルニ方リ通常ノ歳入ヲ増加スルトキハ其市住民ノ負擔ニ堪ヘサルノ場  
合ニ限ルモノトス

市會ニ於テ公債募集ノ事ヲ議決スルトキハ併セテ其募集ノ方法利息ノ定  
率及償還ノ方法ヲ定ム可シ償還ノ初期ハ三年以内ト爲シ年々償還ノ歩合  
ヲ定メ募集ノ時ヨリ三十年以内ニ還了ス可シ

定額豫算内ノ支出ヲ爲スガ爲メ必要ナル一時ノ借入金ハ本條ノ例ニ依ラ  
ス其年度内ノ収入ヲ以テ償還ス可キモノトス但此場合ニ於テハ市會ノ議  
決ヲ要セス

第二款 市ノ歳入出豫算及決算

第七條 市參事會ハ每會年度收入支出ノ豫知シ得可キ金額ヲ見積リ年度  
前二ヶ月ヲ限リ歳入出豫算表ヲ調製ス可シ但市ノ會計年度ハ政府ノ會計  
年度ニ同シ

內務大臣ハ省令ヲ以テ豫算表調製ノ式ヲ定ムルコトヲ得

第八條 豫算表ハ會計年度前市會ノ議決ヲ取り之ヲ府縣知事ニ報告シ並  
地方慣行ノ方式ヲ以テ其要領ヲ公告ス可シ

豫算表ヲ市會ニ提出スルトキハ市參事會ハ併セテ其市ノ事務報告書及財  
産明細表ヲ提出ス可シ

第九條 定額豫算外ノ費用又ハ豫算ノ不足アルトキハ市會ノ認定ヲ得テ

之ヲ支出スルコトヲ得

定額豫算中臨時ノ場合ニ支出スルカ爲メニ豫備費ヲ置キ市參事會ハ豫メ  
市會ノ認定ヲ受ケスシテ豫算外ノ費用又ハ豫算超過ノ費用ニ充ツルコト  
ヲ得但市會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第十條 市會ニ於テ豫算表ヲ議決シタルトキハ市長ヨリ其謄寫ヲ以テ之  
ヲ收入役ニ交付ス可シ其豫算表中監督官廳若クハ參事會ノ許可ヲ受ク可  
キ事項アルトキハ(第百二十一條ヨリ第百二十二條ニ至ル)先ツ其許可ヲ  
受ク可シ

收入役ハ市參事會(第六十四條第二項第三)又ハ監督官廳ノ命令アルニ非  
サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス又收入役ハ市參事會ノ命令ヲ受クルモ其支  
出豫算表中ニ豫定ナキカ又ハ其命令第百九條ノ規定ニ據ラサルトキハ支  
拂ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ規定ニ背キタル支拂ハ總テ收入役ノ責任ニ歸ス

第十一條 市ノ出納ハ毎月例日ヲ定メテ檢査シ及毎年少クモ一回臨時檢  
査ヲ爲ス可シ例月檢査ハ市長又ハ其代理者之ヲ爲シ臨時檢査ハ市長又ハ  
其代理者ノ外市會ノ互選シタル市制議員一名以上ノ立會ヲ要ス

第十二條 決算ハ會計年度ノ終ヨリ三ヶ月以内ニ之ヲ結了シ證書類ヲ併  
セテ收入役ヨリ之ヲ市參事會ニ提出シ市參事會ハ之ヲ審査シ意見ヲ附シ

テ之ヲ市會ノ認定ニ付ス可シ其市會ノ認定ヲ經タルトキハ市長ヨリ之ヲ府縣知事ニ報告ス可シ

決算報告ヲ爲ストキハ第三十八條及第四十三條ノ例ニ準シ市參事會員故障アルモノトス

第五章 特別ノ財産ヲ有スル市區ノ行政

第百十三條 市内ノ一區ニシテ特別ニ財産ヲ所有シ若クハ營造物ヲ設ケ其區限リ特ニ其費用(第九十九條)ヲ負擔スルトキハ府縣參事會ハ其市會ノ意見ヲ聞キ條例ヲ發行シ財産及營造物ニ關スル事務ノ爲メ區會ヲ設クルコトヲ得ス會議ハ市會ノ例ヲ適用スルコトヲ得

第百十四條 前條ニ記載スル事務ハ市ノ行政ニ關スル規則ニ依リ市參事會之ヲ管理ス可シ但區ノ出納及會計ノ事務ハ之ト分別ス可シ

第六章 市行政ノ監督

第百十五條 市行政ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第二次ニ於テ內務大臣之ヲ監督ス但法律ニ指定シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ參與スルハ別段ナリトス

第百十六條 此法律中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外凡市ノ行政ニ關スル府縣知事若クハ府縣參事會ノ處分若クハ裁決ニ不服アル者ハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得

市ノ行政ニ關スル訴願ハ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ十四日以内ニ其理由ヲ具シテ之ヲ提出ス可シ但此法律中別ニ期限ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス此法律中ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事若クハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ二十一日以内ニ出訴ス可シ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ許シタル場合ニ於テハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得

訴願及訴訟ヲ提出スルトキハ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止ス但此法律中別ニ規定アリ又ハ當該官廳ノ意見ニ依リ其停止ノ爲メニ市ノ公益ニ害アリト爲ストキハ此限ニ在ラス

第百十七條 監督官廳ハ市行政ノ法律命令ニ背戾セサルヤ其事務錯亂滯滯セサルヤ否ヲ監視ス可シ監督官廳ハ之カ爲メニ行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徴シ並實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閲スルノ權ヲ有ス

第百十八條 市ニ於テ法律勅令ニ依テ負擔シ又ハ當該官廳ノ職權ニ依テ命令スル所ノ支出ヲ定額豫算ニ載セス又ハ臨時之ヲ承認セス又ハ實行セサルトキハ府縣知事ハ理由ヲ示シテ其支出額ヲ定額豫算表ニ加ヘ又ハ臨時支出セシム可シ

市ニ於テ前項ノ處分ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得  
 第一百十九條 凡市會又ハ市參事會ニ於テ議決ス可キ事件ヲ議決セサルトキ  
 ハ府縣參事會代テ之ヲ議決ス可シ  
 第一百二十條 內務大臣ハ市會ヲ解散セシムルコトヲ得解散ヲ命シタル場合  
 ニ於テハ同時ニ三ヶ月以内更ニ議員ヲ改選ス可キコトヲ命ス可シ但改選  
 市會ノ集會スル迄ハ府縣參事會市會ニ代テ一切ノ事件ヲ議決ス  
 第一百二十一條 左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコ  
 トヲ要ス  
 一 市條例ヲ設ケ並改正スル事  
 二 學藝美術ニ關シ又ハ歷史上貴重ナル物品ノ賣却讓與質入書入交換若  
 クハ大ナル變更ヲ爲ス事  
 前項第一ノ場合ニ於テハ勅裁ヲ經テ之ヲ許可ス可シ  
 第一百二十二條 左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ內務大臣及大藏大臣ノ許可  
 ヲ受クルコトヲ要ス  
 一 新ニ市ノ負債ヲ起シ又ハ負債額ヲ増加シ及第百六條第二項ノ例ニ違  
 フモノ但償還期限三年以内ノモノハ此限ニ在ラス  
 二 市特別稅並使用料、手数料ヲ新設シ増額シ又ハ變更スル事  
 三 地租七分ノ一其他直接國稅百分ノ五十ヲ超過スル附加稅ヲ賦課スル

事

四 間接國稅ニ附加稅ヲ賦課スル事  
 五 法律勅令ノ規定ニ依リ官廳ヨリ補助スル歩合金ニ對シ支出金額ヲ定  
 ムル事  
 第一百二十三條 左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ府縣參事會ノ許可ヲ受クル  
 コトヲ要ス  
 一 市ノ營造物ニ關スル規則ヲ設ケ並改正スル事  
 二 基本財産ノ處分ニ關スル事(第八十一條)  
 三 市有不動產ノ賣却讓與並質入書入ヲ爲ス事  
 四 各個人特ニ使用スル市有土地使用法ノ變更ヲ爲ス事(第八十六條)  
 五 各種ノ保證ヲ與フル事  
 六 法律勅令ニ依テ負擔スル義務ニ非スシテ向五ヶ年以上ニ亘リ新ニ市  
 住民ヘ負擔ヲ課スル事  
 七 均一ノ稅率ニ據ラスシテ國稅府縣稅ニ附加稅ヲ賦課スル事(第九十  
 條第二項)  
 八 第九十九條ニ從ヒ數個人又ハ市内ノ一區ニ費用ヲ賦課スル事  
 九 第一百一條ノ準率ニ據ラスシテ夫役及現品ヲ賦課スル事  
 第一百二十四條 府縣知事ハ市長、助役、市參事會員、委員、區長其他市吏員ニ對



シ懲戒處分ヲ行フコトヲ得其懲戒處分ハ罷責及過怠金トス其過怠金ハ二十五圓以下トス追テ市吏員ノ懲戒法ヲ設クル迄ハ左ノ區別ニ從ヒ官吏懲戒例ヲ適用ス可シ

一 市參事會ノ懲戒處分(第六十四條第二項第五)ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ府縣知事ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二 府縣知事ノ懲戒處分ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得  
三 本條第一項ニ掲載スル市吏員職務ニ違フコト再三ニ及ヒ又ハ其情狀重キ者又ハ行狀ヲ亂リ廉恥ヲ失フ者財産ヲ浪費シ其分ヲ守ラサル者又ハ職務ヲササル者ハ懲戒裁判ヲ以テ其職ヲ解クコトヲ得其隨時解職スルコトヲ得可キ者ハ(第六十二條)懲戒裁判ヲ以テスルノ限ニ在ラス總テ解職セラレタル者ハ自己ノ所爲ニ非スシテ職務ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲メ解職セラレタル場合ヲ除クノ外退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

四 懲戒裁判ハ府縣知事其審問ヲ爲シ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得  
市長ノ解職ニ係ル裁決ハ上奏シテ之ヲ執行ス  
監督官廳ハ懲戒裁判ノ裁決前吏員ノ停職ヲ命シ並給料ヲ停止スルコト

ヲ得

第二百二十五條 市吏員及使丁其職務ヲ盡サス又ハ權限ヲ越エタル事アルカ爲メ市ニ對シテ賠償ス可キコトアルトキハ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ七日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但出訴ヲ爲シタルトキハ府縣參事會ハ假ニ其財産ヲ差押フルコトヲ得

第七章 附則

第二百二十六條 此法律ハ明治二十二年四月一日ヨリ地方ノ情況ヲ裁酌シ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣指定スル地ニ之ヲ施行ス

第二百二十七條 府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間府縣參事會ノ職務ハ府縣知事行政裁判所ノ職務ハ內閣ニ於テ之ヲ行フ可シ

第二百二十八條 此法律ニ依リ初テ議員ヲ選舉スルニ付市參事會及市會ノ職務並市條例ヲ以テ定ム可キ事項ハ府縣知事又ハ其指命スル官吏ニ於テ之ヲ施行ス可シ

第二百二十九條 社寺宗教ノ組合ニ關シテハ此法律ヲ適用セス現行ノ例規及其地ノ習慣ニ從フ

第二百三十條 此法律中ニ記載セル人口ハ最終ノ人口調査ニ依リ現役軍人ヲ除キタル數ヲ云フ

第三百一十一條 現行ノ租稅中此法律ニ於テ直接稅又ハ間接稅トス可キ類別

ハ內務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第三百二十二條 明治九年十月第三百十號布告各區町村金穀公借共有物取扱

土木起功規則、明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法第四條、明治

十七年五月第十四號布告區町村會法、明治十七年五月第十五號布告、明治

十七年七月第二十三號布告、明治十八年八月第二十五號布告其他此法律

ニ抵觸スル成規ハ此法律施行ノ日ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第三百二十三條 內務大臣ハ此法律實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及

訓令ヲ發布ス可シ

町村制

第一章 總則

第一款 町村及其區域

第二款 町村住民及其權利義務

第三款 町村條例

第二章 町村會

第一款 組織及選舉

第二款 職務權限及處務規程

第三章 町村行政

第一款 町村吏員ノ組織選任

第二款 町村吏員ノ職務權限

第三款 給料及給與

第四章 町村有財產ノ管理

第一款 町村有財產及町村稅

第二款 町村ノ歲入出豫算及決算

第五章 町村內各部ノ行政

第六章 町村組合

第七章 町村行政ノ監督

第八章 附則

町村制

第一章 總則

第一款 町村及其區域

第一條 此法律ハ市制ヲ施行スル地ヲ除キ總テ町村ニ施行スルモノトス

第二條 町村ハ法律上一個人ト均シク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡町村公共

ノ事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ之ヲ處理スルモノトス

第三條 凡町村ハ從來ノ區域ヲ存シテ之ヲ變更セス但將來其變更ヲ要スル

コトアルトキハ此法律ニ準據ス可シ

第四條 町村ノ廢置分合ヲ要スルトキハ關係アル市町村會及郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣參事會之ヲ議決シ內務大臣ノ許可ヲ受ク可シ

町村境界ノ變更ヲ要スルトキハ關係アル町村會及地主ノ意見ヲ聞キ郡參事會之ヲ議決ス其數郡ニ涉リ若クハ市ノ境界ニ涉ルモノハ府縣參事會之ヲ議決ス

町村ノ資力法律上ノ義務ヲ負擔スルニ堪ヘス又ハ公益上ノ必要アルトキハ關係者ノ異議ニ拘ハラズ町村ヲ合併シ又ハ其境界ヲ變更スルコトアルヘシ

本條ノ處分ニ付其町村ノ財產處分ヲ要スルトキハ併セテ之ヲ議決ス可シ  
第五條 町村ノ境界ニ關スル爭論ハ郡參事會之ヲ裁決ス其數郡ニ涉リ若クハ市ノ境界ニ涉ルモノハ府縣參事會之ヲ裁決ス其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二款 町村住民及其權利義務

第六條 凡町村内ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其町村住民トス

凡町村住民タル者ハ此法律ニ從ヒ公共ノ造營物并町村有財產ヲ共用スルノ權利ヲ有シ及町村ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ有スルモノトス但特ニ民法上ノ權利及義務ヲ有スル者アルトキハ此限ニアラス

第七條 凡帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子三年以來(一)町村ノ住民トナリ(二)其町村ノ負擔ヲ分任シ及(三)其町村内ニ於テ地租ヲ納メ若クハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ其町村公民トス其公費ヲ以テ救助ヲ受ケタル後二年ヲ經サル者ハ此限ニ在ラス但場合ニ依リ町村會ノ議決ヲ以テ本條ニ定ムル二年ノ制限ヲ特免スルコトヲ得  
此法律ニ於テ獨立ト稱スルハ滿二十五歲以上ニシテ一戸ヲ構ヘ且治産ノ禁ヲ受ケサル者ヲ云フ

第八條 凡町村公民ハ町村ノ選舉ニ參與シ町村ノ名譽職ニ選舉セラレハノ權利アリ又其名譽職ヲ擔任スルハ町村公民ノ義務ナリトス

- 左ノ理由アルニ非サレハ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職スルコトヲ得ス
  - 一 疾病ニ罹リ公務ニ堪ヘサル者
  - 二 營業ノ爲メニ常ニ其町村ニ居ルコトヲ得サル者
  - 三 年齡滿六十歲以上ノ者
  - 四 官職ノ爲メニ町村ノ公務ヲ執ルコトヲ得サル者
  - 五 四年間無給ニシテ町村吏員ノ職ニ任シ爾後四年ヲ經過セサル者及六年間町村議員ノ職ニ居リ爾後六年ヲ經過セサル者
  - 六 其他町村會ノ議決ニ於テ正當ノ理由アリト認ムル者
- 前項ノ理由ナクシテ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職シ若クハ無任期ノ職

務ヲ少クモ三年間擔當セス又ハ其職務ヲ實際ニ執行セサル者ハ町村會ノ議決ヲ以テ三年以上六年以下其町村公民タルノ權ヲ停止シ且同年期間其負擔ス可キ町村費ノ八分一乃至四分一ヲ増課スルコトヲ得  
前項町村會ノ議決ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條 町村公民タル者第七條ニ掲載スル要件ノ一ヲ失フトキハ其公民タルノ權ヲ失フモノトス

町村公民タル者身代限處分中又ハ公權剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重輕罪ノ爲メ裁判上ノ訊問若クハ勾留中又ハ租稅滯納處分中ハ其公民タルノ權ヲ停止ス

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ町村ノ公務ニ參與セサルモノトス  
町村公民タル者ニ限リテ任ス可キ職務ニ在ル者本條ノ場合ニ當ルトキハ其職務ヲ解ク可キモノトス

第三款 町村條例

第十條 町村ノ事務及町村住民ノ權利義務ニ關シ此法律中ニ明文ナク又ハ特例ヲ設クルコトヲ許セル事項ハ各町村ニ於テ特ニ條例ヲ設ケテ之ヲ規定スルコトヲ得

町村ニ於テハ其町村ノ設置ニ係ル營造物ニ關シ規則ヲ設クルコトヲ得  
町村條例及規則ハ法律命令ニ抵觸スルコトヲ得ス且之ヲ發行スルトキハ地方慣行ノ公告式ニ依ル可シ

第二章 町村會

第一款 組織及選舉

第十一條 町村會議員ハ其町村ノ選舉人其被選舉權アル者ヨリ之ヲ選舉ス其定員ハ其町村ノ人口ニ準シ左ノ割合ヲ以テ之ヲ定ム但町村條例ヲ以テ特ニ之ヲ増減スルコトヲ得

- 一 人口千五百未滿ノ町村ニ於テハ 議員八人
- 一 人口千五百以上五千未滿ノ町村ニ於テハ 議員十二人
- 一 人口五千以上一萬未滿ノ町村ニ於テハ 議員十八人
- 一 人口一萬以上二萬未滿ノ町村ニ於テハ 議員二十四人
- 一 人口二萬以上ノ町村ニ於テハ 議員三十人

第十二條 町村公民(第七條)ハ總テ選舉權ヲ有ス但其公民權ヲ停止セララル者(第八條第二項、第九條第二項)及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス

凡內國人ニシテ公權ヲ有シ直接町村稅ヲ納ムル者其額町村公民ノ最多ク納稅スル者三名中ノ一人ヨリモ多キドキハ第七條ノ要件ニ當ラスト雖モ